1.612
2止

諸家高名記巻之八

同縁

一 巫女を市子と名附給ふ事

附タリ 吉木氏ノ付記の時を以て賛せらるべし

迷ひ甲斐なる涙云来意のよし

二 大徳院殿と波多野肥前守との事

附タリ 長尾弾正ノ云伝る所と不足のよし

小田原左京亮政の所小地を相伝のよし

三 織田右兵衛督信長の事
附 北条村伊豫守の事
柘植清三郎の事
四 高田孫兵衛信幸村幼を召る事
同孫中勢之助の事
附 木村長門守重茂柘植清三郎の事

一 速水甲斐守守隆云来歴の事

夫れ得よりこの方ひさしく人の行跡をたづねしに家より四入る。雲生るとしつる。信長の者。源又入道の。嫡男なり。大坂よりこし。竜城して。義教の名代として。城中諸士の相口を。性尺の役者とうけ給りぬ。を黄纐の衣と。いとり。雲生るとうじめ。信長の。法士と軍用をしげまし。その次第歳重ねしーゞ。いのかどとり。市ナ房と名づけて。姫女を小性よつりたて。を相具させてゞ。きらきらと。姫ハ市ナ房を。女人と申すなれば。雲生るの下知ゝくして。城中の指図をうけ。侍友又兵衛やとうどもひ。ひそかに雲生るへむひ。夫ハ一ゝ。軍中より。女性をさらの事。さゞまゝ法なり。ちゝとそれを

やぶり給へる事。ありてのあり。高成は市ち
を。城郭へ出せ。わるべきといひそれば。雲生も。武勇に拙
其こゝをてゝつゝく事。まつゝく例をちらざるよりうどいよ
しゝ源のもつゝ。ちづうとして白拍子を。軍中よりくく
し。又本ゝ仲ハ。ゝくゝ山城をめつゝきゝり。ゝをのく名拍
子あゝうどやゝれたゝかゝるよ及ゝどゝやゝされそれば。ゝゝてゝ
ゝ。拍ゝをこゝまゝ。ゝゝ。ゝをゝけ給ゝゝゝのゝゝ。その
ゝつゝ。ゝゝ仲ハ。日ゝ中ゝ双の男拍軍のゝゝゝ
ゝゝ。ゝれゝゝ一ゝんの美ゝ。ゝゝ拍をゝゝ。
軍中ゝ女をゝゝゝゝゝ。越ゝゝゝゝて。ゝゝゝゝ
ゝゝれ。ゝゝゝの男拍ゝ。ゝゝれゝ。天下をゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝを
ゝゝゝれゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ仲ゝ

仲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くひ。又ハ移くの雑源をとりて。一人も出合どわまり
よたびく。攻うさかうよつさ。七組のくとも。内高合して。
をのく一回より出とあつハ。孫より片桐市正。大岡秀元ハ出
時。数度の合戦より。分命をうりうん。軍功をあらハし。志
津嶽の七本槍。日本ようそれかさ。働をかしていさてう
私かく。忠貞をつくし。老ほの今ととも。さかく秀頼の
出馬をねしたびく。駿府より。大御所の出撃ハ。
ひくろい。天下を安事より。かすべきとそう。市正をだよ。安
実をもりて。罷よとと。殊勝ちまんとの事。和くと
てとたび。今ハ出情驕をくへらるくやうかれた。明日の事
んりとれ。めんく伊かどよ。ねうとそ。片桐ゑ長より
へ及びくく。ちうれハ服。およくのうくをうかうくうくと

分命をもそく。たのしきるかさ。涉天物よりあうとと。そのうくへ
先事。涙を回覚脇。御[illegible]の秀頼公を。ないかーろよかし
生り。ちらうを老回ありよ。西くよるまよ。まづりてそん
和かりノ。とくハ和くくんを。ちよりとんとそ。七人一回して
秀頼公の出おへ出りよくるハ。出ありよ。れわて。迷水甲斐守。年老
かんを。ちくそまうる。一くこを和ちよこそ出発人ちれとと
出ちくしゆく。恐れかくく。ちうこくをうけて。ちよ
された。大御所の影響の。ハ和とそしとのい。ちうに合戦より
及びくん。和くかけ。いくく存まくくばうくかくと。市
正をかくへされ出和賜の義をおりかしとも。大阪より
もいくて。猛暑より。おかしくまよ。たび今いうかくよ。おかし

先ゝはそれぞれさい集り騒ぎて。皆面々のなをよべば。
来ぐるさい。黒金沙弥のあいく。ゝりくるゝ大名小名多
勢といひ。いくさ出運のひらくまん。弥ひべきさいさめざる
い。ほのぼのよりくるぞ。只者の出為よ。ゝ物ゝゝうず物ゝなるく。
人間を一変して。速水グわとふつて。堀田勝ゝ村。吉野中納
伊東。吉東こしだそろへてゆくろ。義教公ゝこゝ。ゝゝ
ど沸ゝぐるひあふくるものとゝて。義物させて。安下よ付死
さをんをふびゝ。ゝれだ。長ゝとまをつゝふとゝ。吉東ちゝ
づゝさゝゝさゝゝぞやく物ゝよ出ゝよの伝せて出ゝくだの
ちくさゝり。吉東氏アやゝろへ七人の者を。ゆゝよ出いくあや
よゝいまのゝく海ゝぐ。命ををゝく物ゝて。ゝよるゝいあゝを
をでゝよ出情ゝさ。伝せとゝゝいゝ武者ゝく。私ゝ教ゝ。但為ゝ数ゝ

義物仕りかゝゝ。実東のゝ場。ゝ落を中ゝて。何ゝて武物
を出ゝさゝづくゝや。後代よ後病の名をのゝゝゝセゝの沸
事ゝゝ。さゝゝそゝ一ゝ一タのゝもゝゝゝたゝゝそ出運のひゝゝ。
ゝのよゝゝゝど出ゝ賜のゝゝよゝゝゝおゝゝゝたゝゝゝゝ。
たゝ今の通りゝそゝいひゝゝく。私ゝゝ命をゝゝて。ゝの
出為よゝゝゝゝず。何ゝぞ出賢ゝを物ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。物よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝく。ひゝゝゝ命をゝゝくゝ。物ゝゝゝゝよゝ出為ゝさ
ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物出実先下ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

勢を引うけて。我門よりたてまつりしの作
ぶうくいさひろよしくだかしをのく討死仕りて名を後
代よのこさんと約をちぎりてごとをかくあはれろけ義
いそれで。秀郷ふかとやとぶ〜めくんひとりくよ。所
さうづく。鬢斗に布をトされろ。色ををのく懸申して
はおを退出し。西ぐ拾ちへうり。死をうちんじて義をお
りく。名をうしおりく。光怪せりをあれ結宰人ら〜め
の義勢よろりをどもちさいで。海を迎おんとをろこの
おり。海よたのこをくあを。海の神ぐ大龍波をが。ト知て安
人今ハかうろ

㊁大野修理亮と波を関義勝〜口論の事

高王。諸のやくよ奥ろ。ふ義のりく。賢臣。霧のかくよ

集ろ。百度の石。海よ実朱の出仕徒よ。攻伏の大名小名
一戦よ及ぐ。我さきよ高名し。義をおさんといろめさけ
ち。蜂須賀阿波守入道。蓮唐へ。さく東海をぬひの
よりり。を列演松ゆて。は同ろく仕りそれ。ち出仕ゆて。京
ろ出せり。海よ義をとりとの所。もごこそく。色をとてあ。い
あし。本多ゆ仲の対手よ。強金場。松勇の下知よろ
て。松よ出ろ所よ。近江ゆの住人。伊と本田ゆ高ゆ綱ちくよ松
ハのりろどして。ろく強金よてろ。松勇ゆて。強しまり
て。のりよろ。古名のいさ。古今を語ハろ〜どゆ勝
高を東しいよろの色ハ所相市ゆ武人ゆりしゆ。三列吉田を。
下向仕り。京ゆ使うしてびさびの語さ。隠ぐ〜あげ
れで。大所所出撃蜂ろく。京松をめ〜つまろれ出いろ

とゝ下うて。時。出役の出少和を。相ゝ仕付せ付られ。旗本の地
よりゆて。市正大坂の惣内よ。五出よりのよりさうけ
給つゝて。庄兵衛。旗本へ。ぞうりよりゝ。又ぞ多ゝ兵法
寺ハ。手勢二万餘騎を引卒して。牧方より陣をとる。
実東の出仕垂。十月廿日をゝて。大坂表の義ハ延引か
されよりり。板倉伯耆。加藤左馬助。黒田甲斐守。平野
長泰。若山右衛門。お相手。びんぐ。ハ大閤秀吉の恩顧あるよ
りゝて。大坂への所住いかうゝり。板倉伯耆よハ。秀頼公の出
馬へ。諸相とあゝの考られて。ゝて軍評議わゝて。相
口の作事。いよく。珍義をゝ。ゝらゝ。時よ大和修理亮
よハ。黒門ぐちハ。平野の方ちよ。お同ぐう。大和。薬害。
びけらハ。兵ゝ。ゝむへしとの時。後ア内蔵助。面ハ抜し

相ぶけ。よりゝて。ぐ。ゝ。修理亮。方ゝ。我ゝ。
達る。兵ぐゝ。ゝ。黒門ぐちを。分ゝ。方ゝ。相ぐち
よせんとハ。奇怪。西方。遠藤基次ぐゝ。ぜひゝ。ゝ。
ひ後。と。対ゝ。ゝ。たゝ。ゝ。ハ。市兵の横よ。ゝ。
ゝ。ぶん。ゝ。西善よりゝて。ゝ。ゝ。
ゝ。修理亮。ゝ。ゝ。相ぐちを。ゝ。
ゝ。ゝ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。人よハ
や。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。修理亮。ゝ。命
ぜ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

よ殺生をこのみ。つりよりる。うの丈南の出丸。さゝざろて
吉田屋。一人。よ作せ付られて。ぐさむらいへ。元来吉田
安芸守。れで。明石掃部。をめ。ぐらへらるへ。吉田
うけ。ぐり。出張。よ。ぐ。ひ出丸の義。ぐ。さゝざろて。
屋。一人よ作せ付られ。世の人とぞよ。ひ丸。吉田屋。
知へ。ぐるよ。ぐ。一義と。ぐ。ねゝさよ。外の人をまで。へ
て。屋。不肖の名。のぐ。よ。ぐ。まつひ。ぐ。下ぐ
ぐ。ねぐひぐる。ひぐ。ぐ。ぐ。

切出されたり。一戦の時分。孫九亮助が下知を得て。
たくさんにべしとの作く。当方我勢をとうけ強り。無且る西
よ。潮をかぶり。系統不肖よりかぶり。うてあり。物ともせず軍
を。自余のさうづをうけて。仕出しの義。物こ面目なくこそ
はへと。陣あるまうりうのて。つくるふよ。比企を迎出て。冥
ある陣系。ちぐらよ比企よむりて。つそうきして。傷
人の大勝乃勇りよ。をどろうをんものをそれあてハ世の人かる
多細と知で。ひくさとも西方我アして。春裏の作ふこそ
あるものと。坂代をもうとあざそ也んを出合こ。西伯たのを
くうさ。勇彩ろよ伏しうこと。まうを不運ものを。つ西比企
を相ちして。討死せんと。ら乗つ度ようこある。物実事か
せめぐちはうざうを作大名作をこうり。をのく部屋を

ほうりて。出陣ある。貝殻のひぐさ。夫よりら。伊勢を甲
斐のをとい。地よあるまりて。ゆくしく。世ようをびうるる
事。二月の死山。禁の川よ涙うるへ。あよ恙法をかぐこ
とふさと似うり

三 織田を系歌中将信長卿の事

友ちくくうざまだ。仁をたとけどへ。てをくちん
でうざれで。智代強と事あうつど。変よ結為恋愛を
利しうるへ。建水甲悔ぐ。紙下れをこの恙を一こ
働をあるものを。びうこ義塩の物口。をうをうみをひ。
一方をうあるよ。いうるひかしをん。結為恋愛へ。
ふぐりしへ。関東へ比企の内強を。ひそうを通どうし。恙
形ふをうをうめされ。このを法を後のうく。高比者を後ち。比

北村作兵衛方へ参られ。拙者言葉ぞやしとろげて。自然
高慢にてこそ。まことにわきまえなど。是時よ頃くもて。首を凡
せよとの仰せ。仰ぶんあんくつこまりぬ。さてべ横目として。小
川作兵衛さてこそ。三人同道。三人同道にて。言葉ぐ拙者の方
よ向いて。三人途中にて内談をるよ。いづれとも。ひて改名
の服変わり。それをだまして。やくそく中。ちうごろ乃和
こ絵しこそぎ。さてこそ。言葉よ拙者さてこそ
やとうべし。ふとめとまりと。一同して。言葉ぐ後
而よ入。まの和をおる。つくしのべそれだ。言葉ちうごろ
て。不仕合うれ。兼て面白を拙者して。付孔のんぐ。
一命をこそ。さてこそ。これを民門よ。三人こよだろ。
東代をの和尊。仏名字を実てせ。

うろさく。赤面とべし。ぐ紙あいたそのちうぐ
ぐるさけよ。実屋をたべし。名字のけど通さるや
よ。ねぐひ。ひ切れ大ねうくしこゆ。人のことだを伝聞し
拙者。一方をうけ拙ろて。つくさと切る言葉を手よ
笑ひ拙者。毛虫をの墨をの。顔のるよい拙ふ。さうべ切腹
仕しれあぐ。をのくの関首をちされくとそて。自害く
見人をを三人をとあ。うあくどろやまるべうくど。き後ぐ
物ハ。うるぐしこれんのたれゆへ人のり事を通しなく。笑く
おがめて。こう方を。実の罪よとし拙ふ。そのうろよ
又仕横踊ちやくあるく。おだくく命をおがくへで。ア
とけあるべしと。制しされで。言葉と。実よ方を失て
事。さうとそいはおいしと。滅ぐくよ。切腹をてまる。

さうだ。ぢあへ因て。そ、ぢ人一回よ。ひらうんと。義経の
ぢあへ出て。玄蕃いさうく。芝へ。ぢうこひ。とりけそれた。
ぢ大物いうふも。佛者のうぢ。めべそれたそれそ。人よ。ぶし
くろうく取。玄蕃ぢ鎧。ぢりそ。ぢの三人の若へ出あづけ
かされる。玄蕃へ。鬼ぢ。して。義経ぢる事。世ゆとひ。ん
よ。ひうう。ぢうに。海中。玄蕃の事。軍勇をかよ。
て。我へ他をそ。ぢ。他へ我を。捨して。さうに。城内をぢやう
ぢず。ぢる。頼よ。松平鷲。腎へ。中国勢。ぢ。辛。ぢ。大坂をさ
うそのぢりぢるぢ。いまぢ。大出。新田軍ゆと。京。伊勢へ出
陣。他のぢ。芝庫ゆそうけ。ぢり。長勝ぢり。神崎川
ぢ。ぢ。伊勢へぢる。ぢ。ぢる。ぢ。ぢ。ぢ。集り。武者を。
鷲。腎を。討ぢ。ぢんぢ。ぢりぢる。ぢる中国勢。ぢ。ぢ。

いひ。ぢ。ぢ。ぢ

のよりて。川へなびき入てうつてうんとぞうしひつくるる。而
るに。後藤兵衛実基。神崎の橋にて。佐藤三人とぞ。わまきを松平なる
ようくるこれをむねんよ。おもひ。中流の下の波とうとうて
て出。中流の勢をうちうんとぞ。紅合うる。なつぐ武蔵
寺にて。はるをうをこうんくとる。いでや一人とわまきすがを下
のまうちうつてのがる。実よ又石川二郎義兼。五十騎。山法
師の勢をもよりて。嫁の聟。天満の左衛門を。縛をうい。実
よ陳所。ぐんと。ちうる。中流のまうちうて。松平武蔵
寺。大坂の大勢よりうあいとぞ。一戦よ。ふぶと。実ふり。
馬をうちうをこそ。うつてのがる。ちうれで。西方大勢あつて。
川をつぶて。ちうへをうこそ。雄雄を。実よ。変とる。平。大野
権現坊。ちうぞやるをたて。ちうず中流のまうちうて。

軍をすゝめ。元軍のたゝかひあやて。万一味方勝利を失ひたる時は。その墜れゝ〳〵しぐさ。〇てゆきをしぬきもと元寇元寇物のみくさの色たゝかひ。どくさよ敵を水ぎよへ引もせ雑兵おなじそうつてとんと。制し多数をたゞめ。七組の人〻軍はたゞ不意ゆきよを。勝利いあを和引をさゝ常のまゝ。軍は雲をたゞれてゝをとつぎやさ冷ゆく。をのく地へ引入多。ごをよりて。川ひらのゆを。軍勢を引せ。中時〻り。天海のあつぐよ。をこる吉義石川五郎

四　高田左馬作幸村紡を守る事

英雄ちの臣は。英明のよりあの。九又の者は。九二の者は大河原天にをるよ。をありて。たゝりは尾列。たは強列の軍士。綿羅星代〻やうして。後へ〻りを多。依後よは出雄なよ。後ゝ多。軍をは。永井右近左文宮勝出関徒よは。横田甚兵ゝ又新右軍よは。葉白山よ出陣をめされれゝ。時の人は。お勝山ゝそゝしびよ多。左後へは。をゆ水。紙下又十人をちゝ。左後へは。中守。はゝしろは。飛隼人。ちゝ山伯者守。岡ゝく岡勝。左後へゝ。軍をの。後者は。左田三郎。長者左右は。安房。ちゝ。その。く。威紙。歳ちよして。をゝ。後ゝ。をゝ。安よ。田陽後守幸者とゝは。安房ちゝ。身中。高田左馬作幸村ちよ。へ。叔父。出関をゝ。ゝて。陽後ちゝ左後。出九左馬作陽ちよ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ方中軍。遠他よこゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝされおだ。信法丸ゆて。三万るゝゝてゝて。得さすべ。
ぶひひ。いふとまされだ。為つまづりゆて。一族のゝゝみよ。
ゝさゞけおく有ゝは。給ゝ私事。さんめゝ関ケ原合戦よ。出
敵とあゆをのくゝ宰ゝく仕りて。ゝる敵ひよのゝり。一僕のゝ
さけよゝいそ。嘉命をつゝぶゝるゝは。ゝゝゝ私ゝゝ。
めゝ出され。領知とそゝゝい。ゝゝゝゝれたゝゝ人をあづゝり。ゝ
口を法とりゝ犬ゝの号をゆゝさゝゝ事。知ゝゝゝゝゝゝゝゝし
ゝれだ。物を変じゝ。出陣方よゝ。ゝゝゝ事ゝゝゝゝゝゝれ
だ。叔父の幸孝とゝく。武ゝ義をゝりて。たゝゝ物を変づゝ
人傷よゝゝゝゝゝれ。私とかゝる事をゝして。ゝゝ方を出みゝ
たよゝゝゝゝ又我ゝゝゝゝゝゝ。ゝよをゝゝめ。犯をゝゝて
ゝゝゝゝりゝ。ひひをゝれべゝゝりゝそゝゝゝ侍。ゝゝゝ

命をたゝけたゝゝゝゝゝゝゝゝ

るこ。ひらへいらうの。そ今生のいとゑごひと。甲冑の神と
ちぎりて。追出しひちもひらをとられだ。相とうぶんのム
ねや。月年一の勇士。又安房ちゑいおくくまうぐとの出姫夫
ゆう寅又ゑ仮の夫をちるぐちをくくあたく。画像中務が
脯。右ゑとゑ者。又ハ画像中務右脯光ゆとて。絵巻ち画
像の海ゆをゆて。武勇天下よくれゆく。二代の間功よりい
ゑ。武者ひとをふくたのゑ。ひ。おぐちをれあぐけかされゑ
ゑ。ひ西へのゑせをい友貴和泉ちる尾くちゑゑ画像
右ゑが敢父ゑ。僕彼ゑるとてありゑゑが。ゑハ友貴ちる尾と
同友のゑしをふくゑ。ゑ事のちゑゑ減ゑゑずさをバ物ハ
中勢と。一西ゑ絵海しゑゑれいる尾矢文を射ケ。今
ゑ。ゑゑえのおぐちを引ゑゑゑひ方の人数をハゑをひくゑる尾

ひしひしと大阿丑へおげて。その恵美よ。御着一出のぬ
とかしーかしんく。いひつろいーくれば。頃彼者表情して
物のぬ物よりくりれだ。ぬ物なくなして。潜代のしるを
見そろかーぬ。今ろ実京よんををせんや。ひとりハ天罷くいひ。
人上の長程ろちぐくーひくろまがめーやめ也よと。常
しれた。頃彼者の動色を抜ーぬ方ハ敬よ一大事をくろう
せて。ぬぐをまーとハ何事ぞ。必定国んのくろうへぬくいそ武
事と。表形ムへつけもくさとんぐーぬ。ちれいけ身。罷科のるをぐく
ー。西殺ちろ金句也ハぬ。ぬ身くろちぐんく。徐刀ぬハ
て。くりそれだぬ。ぬ物くーとめ。梅いさかぐよ。おがめーつの
らせ抜人くや。徐ハ形ぬ。さくいそる庭よりぬくかれ
ていかり。つくく此徐のそいたくく。ぬく実本物よひろて。

もろくくーさ。軍いとそをしまーぬ。ちろをべ高徐いめのまん
かり。越ーどて武士いくくりとめ。ぬそでよ大国表者を。時者
をろろがーて。信長の西ろをぬりたそど。ぬ身天下のねと
思抜ひねびた相をもりてくんがゆろよ表形ムへちやくひく
ひ。時身をもくさくる事いちもをー。ろくるくろうちのんさー
よんどぬ。西んの形ぐをいぶ。・くぬるぐー賢人ぐそぬぬろう
必定は国んのくんいぬやくくぬぐそめぐーー抜へと。叡文物
警戒してぬをない病動とづつろ。軍伊徐ゆとおど。猴
の相の。相を引くろ。交徐をもそろうんいる庭へ国通して。
ぬをけ一度よ。ふをやぐろいやく。ぐふをおそろーくそ。た
くくろ。ちろよ本村ち門る。横国のぬのぬひそうふ本村よ
つげろへ。今日天主ぐちの門西の角横ぬんりよ南徐が

枝の梅よ。紙のつのてゝ弁ひ。わまりよ不寄よねど。梅の根ぐさてゝくゝうゞひアせへゝづまを。梅のゝ基ゝ不枝の根ぐさを。引切ゝうゝもいまゝゝ。煙條ゞゝゝりゝとゝこゝて。わゞゝゝとゝよゝ。本村ゝと実て。ひゝう不煙條ゞ。ねゞゝゝ本て。ゝろよ。梅よ梅のゝゝらよ。紙をつけゝう。枝のねゞさをゝれべ。ゝゝゞゝゝ引ゝゝろゝゝゝゝゞゝを不ゞ煙條ゞゝゝりゝゝよゝ。光中へ通ゞゝれゞゝ犬狆修理。行ゝ不ゞゝ煙條ゞ。枝ゝよゝむゝり。て出用の事ゝあゝわゞゝゞゝ人数をのゝゝゞゝ。京格ゞゝゝ出されよゝゝゝ。中勢ゝゝこゝまゝゝゝて。家人おゝゞゝ。京格ゞゝゝゝゝ出ゝゝゝゝへ。高田年人へゝゝゝゝて。中勢をゝゝて。ゝゝ。縄をゝけゝれゞ。叔父の後放ゝ。事ゝゝゝゝこゝゝゝゞゝゝゞゝ。自害をゝゝ。波多間新介。をのゝゝを。死をこゝゝて。

て。うゝさめをゝゝせんゝと。叔父枝をゞゝゝゝ。をゝをゝけて。義教公の出おへ中勢ゝりゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。

ぜひ書為せしめんとす。はたまた夫の名をのこす　々々

諸家高名記巻之八　終

諸家高名記巻之九

目録

(一) 河州高野山神霊験の事

附タリ　福田修理亮永場合戦名誉の事

中村右衛門尉多賀ちかのすけ

(二) 後藤又兵衛尉ちかのすけ

附タリ　大坂ものの亮方安を仕掛ける事

縣喜十郎　明石もて武戦の事

三 木下左京亮息女を賜ふ事

附タリ 小牧池田合戦の事 郡内の松田来の事
南條光国討るのつがもと無義なり

四 木村出門守今福浅合戦の事

附タリ 淀谷内猪孔雀の尾を拾の事
大冥常陸仏測濤事内の事

一 稲田修理亮長場合戦を若の事

修理亮掌のうらより。乾坤をよぎり。和双足下より。泥鰌を
踏ぬ。十一月十九日。蜂須賀阿波守。御西の。出おへ来上仕りて。
やうやうへ出内在計ぐ〳〵くるる。城をくれ寄り。打とて
亟ひを。始りより延引〳〵おびへいのよをとり〳〵ふりて。様子濤
を。阿波を奪をとり〳〵やうさんとうぐひなれで。一波ちうぐ
し。松平定国。清洲出るへ。ちり〳〵合せて。一戦仕るこのよをさ。
をぐ〳〵阿波を。出あの退出の時。よく〳〵文内出るし。へ祝
仕るこの仕せ。うへをくう〳〵こまりなりて。阿波を陸西へう
へりて。清代の郎従稲田中村。山田樋にちんどをあらせ。
何とうぐ〳〵やうぐや。我累をれ事悪のうふり。一廉の所
用よう〳〵ぐさ者のぐづうちうの責ぐらひとりを。自余の人

さわいまゝ。ゑて。さう〳〵あくさいよ。
こさぞ。いそぐ。ひわうこさ。一ぶんよ。ちて。ゝ。時よ。猫つぶし
あ御所ゝの出。猫。婦よ入。ん。いうふくとき。それ。ゝ。まくは出
ゝ。よ。ゝ。ゝ。ゝ

出さうぞ。沖なるのこくまこさよ。後陣をうけて。敵陣ふく
のり入交度一ゆんじようけやぐら。樋口四郎助八郎を設
敵の甲よ。友威の猪。るハ呂毛の。琵琶股ふこさよ。敵
をあそこのうこんざり。弥よ惟次が家の四天とも倍れうん。
あへてらうづくこのハ。丹後ち。士卒をちうつけ。さいぞ嚢
仇の甲よ。小揚威の猪。ふ呂毛の武者ハ。人編よりもあ
ちのうずもよむうよ。ぞ。ちうずこうこ細ハいうふ精ぞ。
ちちそ。一矢よみ人三人。ぞ。ハ三人。ぞ人を射ちずさぞ。かう
ちのハ。ちあちらうず。月よりろ。ぞのちぐめ。ぞ。さ。ぞ。嚢
の川よりて。ふ。ぞ。天海へ引ちりぞうん。ち。一面よ引べう
ぞ。ちちしやうよこちそへ引。引てハちちみ。ちこよ。嚢川へまん
うべしとと和しうこ。せ。ぞ。れ大物。河ぞ。るかちくよ。嚢川ハ。

くれりハいれど。嚢基ぞ。嚢ぞ。ふ。ふてまハし
ちうちと。雑ぞち。敵よこちん。ぞよ。物ちを。疎ふ。ふ。て。蓑の
ト。よ。扶抱ぞ。ち。ぞ。ち。ち。ち。ち。百人。ちこ。ぞ。ち。人。ぞ。ぞ。ぞ。て
嚢川よ。ち。ち。れハ。丹後ち。ぞ。ぞ。て。ち。ぞ。て。ち。ぞ。て。ち

卍

中て横田兵馬、まつ田隠岐守、浦戸治右衛門、多度田多左衛
門として所領の内の二人ずつ、そこ〳〵にて仕せ下されて
引ゆせとめ上ぐされた。内蔵助、移動をとゞうのて、中村右近
より報ぜ三百騎をさしそへ、まつ〳〵家老を守らせ、我よりの
使ひをうさだめして、西川の内海を渡りて、四月に周防ゆ。内蔵助、
早速の指くへを出、威物をおされ
ゆるものゝ、くい岩田七郎兵衛、盧高右衛門、同じく高又兵衛、若
り越前、樋口内蔵助、山田織部佐、六人へと感状下されて
軍たち給ふこと、武勇のかゞまれをせしわるうるもとゞれて
猫田修理亮、本所西の山をぐ〳〵をりて、接戦の事名
ぞうしをとうくとうよ兵七郎の長州法内列徒潟。稲

田猫ず亮、中さ陳より。五名のちいさやしろ内りの
の法いうの神を。勅諚せ〳〵と知ず。さうよりて世の人
の崇敬もつく。ひ勇より嫉ゆづまを。尼ぜうて。彼壊のまゝて。
雅とりたつ人の。さうよりて。ゆづまを。ゆ名を。稲田
ゴト新。ひろいとうて。湯釜の下より。続よろ〳〵くて。代下神
たちすち。狂乱して。ゆだ〳〵とて。ゆや。神を祭ろ。ゆ
らん。月なよりもつて。力人よとゞれろ。結ぶ八幡宮朝
ゆり。ゼめて我宮を。崇敬こそせまゞ。ゆんぞや我之の。
居とゝもつて。火よ。穢事いとれゆ。ゆうゆみよりて。一家
を尋ねべ〳〵。どゞうひ〳〵ゆゆ。世よゝゝまゞ〳〵ゞへ
まろう。神社亮をどろうさ。為勅の長神ゆまゞう矢ろと
の。崇めまゝでゆ。ゆいざろ山神なりゞこゝふ神社の名居

を。火より焼る。勿神かし。まつひらゆるく。よく文を造
之仕るべーとゝびくれば。下新の狂乱をづまりてつ〇の
病神のごとし。稲田さうゝ工匠をめして。四ーさの間に社を
たてゝ。毎夕祭りをこゝし。武勇をねがひくれば。又下神らる
い出て。我神雲さうやまつる事。ひとゝよ私かし。これをうて。
毎ゞ武勇をもり。名さすべし。今より十三年経て。神路の
あらゝへしーうゝ。ゝ対をまつべーと。神路あらたよりて。
下新い絶へし。こちのちゆ中後して。別義の。稲田人ゆを
うゝらず。いよく山神を信ゝして。そゝよこゝ。学長十
九年の冬。十三年よあらゝ。山時ゝて。我武勇を。天下よ
あらハさんと。神慮をちひ合せ。宮初の彼也。猿多侍の
一戦をちひゝちゆひし。山時。稲田ちうこんでちゝみしへ。

山時いこれうや。強よ修理亮。神社の地とれうすしゝたの地を
をちいて。雲神よ慮て。社をれうゝ事。山吉いゝで。天よ
めゞうゝとゝいよ事かし。さうふうゝて一陣よちゝんでちうを
引よ一矢よ人三人づゝ射てをゝてさうよわゞ矢いかう
ゆゝちうゝ名の弓精をゆづゝ射ゆゝ射丹はる人衛
よゝうゝをあゝじ。かゝれうゝこゝ。天下ようる名をわゝへし。
ゆ孫狂。武ーさうゆ事。ゝふゝゝうゝ雲験る

(二) 騎兵三万略北東
智ハ疑を薬ちうゝ。大勿治よ引事
軍兵を引ゞ。天ちるゞちよひうゝ山吉門ハ。新ちる
ちむといへゝ。南檜ハ。木村吉門吉宗ゆ。手場一万騎北部
よ。紀引大和の勢を。ゆゝ修騎ちさゞ。中白の旗をちて

かへべさりのさるたびしりて宮虎。家よりひろい出ぜると。一戦よ
務負を変せんと。小姫ごろよ陳をとりて。憂支度をそ
ちろろ。姫よ木村と。薮雲との合戦。世の人こぞりて。
武勇の甲しいかんとぐるづをのんでぞまちふろ。家
よ石忠義が事へ。大御所の御うしろをめへ。後石を里小姓
の名ごあやしき男。桃剛せり。秋せりのうぐぐうめうう
てさびしくたびわをだび男。秀頼ふり。薮雲和泉守
ろへ。出書をかりて。ろのろが。和泉守陳所をたづ
う称て。家よまへうとといふ。さうで懐中を金体せよし
て。裸よりてそわを。一通の書状を袋よへて。らび
ようけてぞわ。うろろへくをどろさてび男をせめて。狂ぐ
ねそれで薮雲と。濃姫とへ。大岡秀右のうしみあうくを

はたびあ御所のの書命よあぐへ。姫をせめんといはれども
岡ふへ。秀頼ふへみうくをろ。姫中へ酒肴を献上。又ハ小
袖笠をあげろと。白状しろ。名ゆへ。ひしをたぶ所へ上
されたる。くるの出賞。色ろ。ぎろう薮雲濃姫。さそへ
あるまし。その役ろつうろの少そ。ろさとろへらもてたの通り
で白状し。薮雲濃姫を戒ようと。後ゼ。又法僧衆のうぐび
とうけて。薮雲濃姫。討死ろろ。又ハ一向うろぐろうふうろ
のつぐへぐまうひとりいさをもんろのふ細ハ。薮雲和泉守
ゲ陳所ハ。もうり一里ますへ。ろ天まろ。ぎろもそのうこれか
ふた名の役所をたよまへ。ろもひろとそ。色を寄る事。ふうり
ろめく後授ろり。それ。ここ。ないやうこそあまこと。ぐでん男をぞ
しめ。織ののぶりをさてせ。ぜ若薮雲和泉ろうへ。ぶり姫をお

てらてらりたるもの。そこゆうの白はをるようにして。くのごとく命をたすけまゐらせめかるようにとゆりと。書付て。城のくちをいたゆしゐへだ。なくくは男。城中へ逃くりぬ。大地こうもも城たくこをるよ。たくみの通りそ。ゑんあつはされる面目なさ。顔面方のようひぐさ。ゆくくまるハ勝をくんでそらゆこころ。城よ艘級をもりて。帰ゆこ井へくまれど小船をもりて。大船八豪しくゆ。実よ依竹義張ハ大和川をゆぐて今藤村よ陣をとる。大坂より鴨地の搦今藤搦よハ綱をふりて通を城こうゆ矢地和泉人数百人あげうりてそをつくうこめゆう。大坂京猪へ。鴨地の搦ハへぐて。向城をくまへ。黄ゆをんとて。翌月廿二日の明京。大和川の岸。友雪和泉由右衛門。兎竜の場面ゆりと。実をゆくて軍名をゆし。奥繊よゆうへて

仕舞ける。扨て〜爲家卿。夫婦もこれを出給んかとて。又諸
又家和基次を召まし。是へそなたよりは上杉家為ん。
ろこと依竹義信。そなへさるを。いかゝ〜仕舞こそ。そこ
げまし〜とれ。あまりもうむりの。
とこそ。こゝまのてみと家。出あのあとて。毒殿ごもの樽よの
がりて。敵の台際を稼り。三ヶ管領の軍兵を引率して
毒殿ごもの。赤戸をひらき毒霧墨よりもへて。上杉を中よ。毒
こゝんと出向よ。夫婦和泉これをんて。管領を責たい依竹
と鎧國の爲。慌を守らせ。まを引ぐして上杉をしろを
きゝんと。せもりもへ。そしぐる。上杉い依竹の勢でゐて
ゐつよ。毒ふよ遠しそれた。とりてゐし。時北のむひ
陣へそ。引より。又為もを進まるゆを及ぐ。ゐり引

引くと。夫婦し勢をゐぐこゐず。りの慌よ引ゐ。毒殿
毒を出殺んありて。出撃姫錦ゐりど。又為る山吹威の。慌
濃をゐぐされゐる。又毒ゐ毒ゐ。
毒用仕りゐる。上杉ゐ家人よ。縣毒ゐとゐもの後殿を
ゐがけて。引ゐて。夫婦和泉が人数ゐ人とりてゐして
毒ゐ家をゐりてゐんとゐゐ。ゐりゐ。
ゐ。ゐ人。実毒。ゐりをゐりゐ。
る。大師ゐ毒をゐゐ引ゐれて。りぐゐ引け
称英。ゐされゐるとゐや

三 木下右京亮息女を実を時を事
結神結よ改。毒のひゐる東。慈恨ゐゐく深。毒の
とゐる時。今ゐ感ゐ。ゐ〜へをゐよ。毒懐ゐし。老を

をきれて。なほいとこめた。殺志つよく。梅と菊條中務の
輔宗盛が母。本下左京亮が娘にて。そのうへ菊條光國
へ嫁せり。世よ夫婦の縁ふかつるものハ。ひと女
い大國者。京紀伊屋の法。二条高倉の。出西よ美づく
せり。つまとなる女。殺ものるまことさ出家のうち。老女
婦の所と。まことふりをたどり。清盛二女が事のもとうひ
られんがうしてなりひしせざるなまとものくふうこと技減
うぬらひを学ちうざれだうちもんよとこうず。抑と
眉ようし。宿婦の髪。とてしへよ。桃李の面貌
いよ世てくるる人のんうごうぞくいよ事かしぬし
ちぬらぐさい。被よ入ちまて事いうてびうかがへど。さま元
ちしざのくいが身をもうず。ぬられ美づくのくらようみてつ

をゝやしくよゑしとめて。歌のうちハ。世ゐ事くしくそ
ゆゑをまちて。つきて。ゑりしとそ。出賓おゝよゝさゝ。
おいゝるゝ。三條やゝどてつしまゝ。神よゝれつゝさゝりしそハ。ちを
ゝやゝ。そゝさの。えゝつゝく。形ゐく。よゝの。横顔。人のちをいく。ふゝ
ゝ。をゝたゝ。ゝくゝ。ゝゝと。ゑゝ。香炉。をゝゝ。ゝ。ゝ。

ゐびきなれ。ふるの洞。ふまるゐよ。神どひう。枝を
ちぎる。ゐまをざれのつゑ。あくろうよこそたれゐる。つ
まを。今はわつまを。ほどをとして。神あるむうひ。惡魔と
ゆりて。たゝもゆよ。神のゐづくよ。ゆまぬ。惡神ゆゝしき
と。ゐびきりてもて。三樣ゐんく。ゆりし時。霜病の人。
つまて出ようゐる。つまゐまは。感惡神惜のふゝさよ。
伝ふをつゝゝト向して。ゆまだ十二月十七日出礼ゐり
よ。名疾實ゐよ。ぬゐづくよ。山の間。ことふゐるわど
よ。法枝の祖をる雪をとこひて。ゆまくの松梅よ。
かゐる風情。余の雨ゐは。ゐまゐる生ず。ト向をゆ
ず。孫わたゝどゆば。ゆ身よ雪ふりつゆりて。ゆぞよ。當の
ちゐのゐゐゐたうゐ。京司社僧。とや初雪ゆ

新向の時ぞと。神腦出ゆこそうよとくのへ。松よゐけ
ゐ。神ゐゐ系統の人と。光仰ゆのゐよ出て。なゝの雪ゐ
見出て。新向の松氏おゝしゐゐ。そとくゆ神ハ。月中
文道の大祖。ゆ無の年基號號の初雪ゐ。今ゐゐを添ゐ
強よゆ年ゐて。風雅文才の初ゐを。をのくをゐぞと
實よ樂ふ雪條の添ゐ。中勢光ゆハ。ゐ京仕ゐる
が。月法詩文のゐゐ。面社伝作濃ゐゐれば。け
ゐの初雪よ。簑蓑風流
東福ゐの仕ゐりよゆ。
ゐゐる。連句ハ。雪を彩し
ていゐり。我ゐわといやゝく。行墨梅をよわゐど雪よ
わとゐんゐ。ゐ下ゐりと。廻廊をゐゐひうゐよ入て四

家の系を衛ずよ。ちなみに光明。つまり奥を足合せ
一樹の葉り化生の為なり。ひとりとなり。絶り絶り
て。乗よんをのこりのこされて。ひとり木下に泉覆が
むとあり。事を。実出して。ひとりあり光明ひのちよ
木下よ。ひとりして。夫婦となり。ちなみ絶り西海の
波。ところて。ちなみ夫よりそうひ。数りの海をなりて。ひ
をもりけ。夫婦寄あしてそ人ふしゆしくを
でよ高徳の家を絶。又光明逝去のちへ中勢が南
で。出光あって。たのもしの月。又氏切よりかりなく
家教よ。ひとまを。一方のえるとなりを地勇をとげん
で。ちり絶の名をわぐさ西よ。流まりやうちをなりぐ
まだりりびをうたを。名ひ。和ひ。新門よりさん

ろひ和尊天下ようそれるく。母の子あってへうふひとけ
んりをもりく。ばそび藤紫ゆて。学ちり和子の和をそよ
めんたの身害して。名式のこしくろ

四　木村長門守今福洗合戦のこと

甘い戯し勇し剛し。毒犯をふとりや。謡法よと武
ハに義のうめをめのと訓ぜり。くて鴨北洗て。もしを
たる上杉京揚。是怪を出し。矢北和泉が槌で。ちかぶんと
狭絶をおりけまだ。和泉と同じく。狭絶をおりへ
されを上杉い多勢のこをを中へくくちりる矢北
ハをばうふ。名人公内カ。狭絶疵をうふりてだりぐし
うねべ。よくく上杉京揚よのりてきばくをこをて。槌
をやぶんとちりる。毒ばりの槽ち。海中まこれを足

て。大胡太郎実秀。つゞけ出て。一百餘騎をもつて。先よりさきへとゝて。先手より鉄砲をうたせそれを。上杉がもり槍を出して。せめよせうと大胡を踏るをとゝまセゝ。中わくとこの松浦三郎。中尾新五郎。三宅源次郎。畠村九郎右衛門。上原次郎右衛門。高先太郎。ゆとゝんで上杉ゝ兵惣数十人をうつてゝる。西へ傾後ぐらの甲より。深草威の胴丸。梨毛のるよのつゝ武者。佐田大炊と名のりて。上原より槍を合せ。表方手こうこわいアクてゝ。おだし槍取かゝりしを畠村九郎。横槍を入て。佐田をつゝんとしをる。又上杉分上野右馬ゝ也ゝこうつて。畠村をふせぐ。されども雄度ぐつて。三宅源次郎出張るをのゝ〻ゝるゝし。歩もゞちよりゝて。佐田ゞのゝうゝしろ腰をさゝてゝるゝ

源田ハ弓上の手うれしそうにてくちをきくこうんどりそんぞうと
ぢ手んと源次郎。源田がきんへ弟よりをとけうぞ。源田と
手れて安らうず。百へ大笑常陸。るとのうとそて。源ろう
がらしろうち。甲ぢ引わをひけて。こうかてんびをいさ
ろそうびひまよ器村たちうと。上北左つをたくうはな言
手を負て引よそうぞ。左つ中尾ハたうハ安田と
絶よ切そうれてつぬるよ家ハ付色中尾ハ手を負へて
引ちうそく色ぢうハ歩ハ。ちう色ぢ二ぢ三よそう
て入ぞ。上枝の付たれ安田よ北よ付色よそう。そ家人ぞぐ
色くてたくうハうぐ。元来多勢のうぢを。新手とい
場教のうのを。一わ
る。後北亮ハ猛それをうりたてうを色てちがへどうう

と引ぞうりうり。色ぢそて。大仮ちう本村ぢ門ぢ中白の旗を
ちびを。二方ぢ付ぞうぞ。大北よへうりのてぞんぐふはうう
ういぜんのうてうぞしちぐのう上枝家をそてのるひ色ぢ。本村軍ぢ
よト知しん。色よがうたそくおいつかれいぢをたちう色
ど。一変よどいうとぞ引ちうりぞく。本村北ちのうけて京橋
の一れ棚を。押ぢ。あまくこの雑色踏るのつちうものぞう
ちうとうう。そうちのう上枝勢ぢ本村よわぐんでぜんぞう。公
うハ皆討死とふを引ちぐうて。ちぞうる。西へ協尾山ぢ
今猛ぢのいちう。横ようけ出して本村が勢を中よ
れこめんとす。ぢ門ぢ鶴異よひうりて協尾とたうぞう。さ
きを山協ぢハ新手ちのを。色ぢ。色ぢそぞうう軍勢よ本
村が勢ハつうれうれば。ぢ門ぢ。軍ハこれよりぐうちぢ

をうこせていわくうりゐんと。海をうてで引よる。海よ水
村ゞ勇乱。山村天下よりくれゐ。又上杉家よりおくて。浜
田大炊。大宮常陸。安田上総。上杉左京。後藤のをうこ
とて。大所西ゝ。此儀の義、トされて武勇の名をせよ
あらうゝ。扨又今後荒い作竹義伝こせろゆゝ。多勢
の宮ゝありゐれど後藤又兵衛。七組の若をを引ぐ。作竹
を一時よ進まらんと。ちゝめらり。ひとく軍ををゝめ
らせ多の雑兵。数百人うつてでる。宮よ南先の甲よ長
縄関の鑓をうて。孔雀の尾のさゝ掛しゐ武者一騎
をうて出てせめたくうよ。後藤がくゝ中と。山中後左更
蔚萎の鑓よ。南蛮拵の。甲の緒をちあ。作竹の。陰を
いつさげ出て名をゐ名乗よよだゝと。いざや一騎討の陣

頁作ゝん。いゐふくゝと。宮よちりをのりとをよこそゝ。兵ゝ作
竹陣作の部屋。深江内蔵ゝとの。後藤一騎わを。作竹
及びのさゐふい顔よふをくいるまでと。陰を金せてたくゐー
ゞ山中ゞ運やつよりゐん。よゞんの宮ゝ。利ををそつるよ
深江を。宮ゝとめゐゐ。これちゝ相大坂勢。陽よのりてゞをつけ
く。切まゐる。作竹大将ゞ。ちりといゝ。ゞわゝ。後藤よ切まく
ら進。引ゝををあまさでと。陽時をつゐて進まゐゐ。ゞ
ふを作竹の作大将。梅津主殿更。信田内蔵介。ふゝゐりまつ
てたゐゐ。され引ゐゐ。ゐしち陽少ていゐ人よ加陽ゐく
らでよわやうくゐゝゐ取ゝ上杉京陽のをゐり。大宮常
陸介。大和川のゐ陽を。横よゐゐて。今福地へ軍を
をゐゐめ。鉄砲ををゐゐ。うこをゐる。元ゐ後藤

物碎易して大坂へ引よろ犬實ろ[illegible]て出雲の素問を
もくちりて。勧傍の萱蘭を焼もらい鴨北ちり今福境
へ立ていそろふつけ者さろ ふたろうろ。附の人うんぜぬいか
ろろ

諸家高名記巻之九 終

諸家高名記巻之十

目録

一 長屋掌定向纒をゆるす事

附 松浦弾蔵つ一義眞の像ひの事

梅津市右衛門四刀を仕戴仕る事

㊁ 安房国に寄せて敵を一部とる事

附り 谷村百姓助礼を乞して討死する

塩屋山城の軍勢横合働く事

㊂ 川田八助渕の橋を引くとる事

附り 天方山城の矢面よりこがる

吉田兵衛尉ようて手負事

㊀ 長尾景虎上杉白縄をゆるさる事

附り 松浦弾正一番首の争ひの事

深沢猛拙。今いづまの西よりあり。萬里の雄図。兵法づうよりとうや。和と略地地の合戦よ。主勇とあらんし。実よ名将言くく。今所うろんぜ一家れはし。まづ大坂ぐさよ。木村長門守ゞ手ゆて。大地内部分莫部みる方。若松市郎左衛門井上左衛門。右内匠。所義加左衛門。山口和泉陸。佐久弓部人。小川喜左衛門。年被義左衛門。細谷部左衛門。長尾平左衛門。大塚勘左衛門。三上十四人。後藤のくらうさゆて。長門守感状を出ぬ。これよりて。秀吉ゝ。出羽守ゝ。天ゝ。美濃十枚完ト。されろ。松浦弾正ハ。略地一番首の言名たるひ

木村が感状をもらいて。黄金二十枚よ。出羽の羽織を
出ものつらしてされそう。松今福焼よおめて。み潟又兵衛
基次が手へ。佐竹の部隊。源江内蔵
を討とりし高名黄金二十枚下されそう。山中坊兵衛
赤坂の兵。大住兵右衛門。ちなみ八郎右衛門。太田人七郎
外そうそう。御内見よれば。黄金十枚づつ。松
義信りきそうく春じ。
日の来ぬよ。上杉。京勢。軍兵を引卒し。蒲生焼
ようして出る。大和川の小を今 池しひ。を蒲生
いとり。此焼ハ三をよ樋をうして。井上みつ右衛門。又の鉄鉄
あそうこめうり。木村長門守家の。上杉こそ。蒲生焼へ
うして出そうと実より。自他の軍兵引ぐ。井上

よ力紙合せそう。中ゆと長門守が先手をうつ
河内和泉。上松合右衛門。山口和泉守へ。鉄砲三百
挺出そ。弾出し。上杉ゆさ手の雑兵をうてそうそう
ゆへ。後陣ををへを見ぐして逃よそう。佐竹義宣ハ
ゆ。今福ようておうを。大井伯右衛門。右松内匠先手
として。木村が軍勢清水をよそうて。鉄砲をあうけそう
ゆへ。佐竹の軍勢もそうみうよてでひくへそう。こ
ものが家人柳右衛門。竹義を鉄よりませ。これよ鉄砲
の兵隊をのせ。横よ焼へそうせ。さんぐよ大ぶさをそう
てそうしそれで。佐竹の軍兵。つよくかそうさそうぞ
ゆへをこぐして。人へ鉄を小橋よとり。鉄いくのうしろよ
まりて。鉄砲をのゆ出ん。とだりゆそそむ軍兵い

かうりゝ。本村ハ自紙と。合戦の場をしくこんろ大将よ
て絵の者をを。実ぞよ。かゝれをとめよとゝ和をかとう
し。こまゝいてゆと。松浦党ハ。浦田圖書。浅沼清左衛門
まゝのさゝをうけて。まゝ〳〵よろひをとゝりそう。本村
いよくいさゝをかし。中白の旗をさゝまもくまも。紙の
軍扇のるゝを引をへ。ちゝりようけてくこゝすく
ろ。作竹。と逃てハ。後日の和と。ふゝとゝまゝて。関の
声を合せ。軍ハ。ちゝめて。あゝてうゝこれをろよ
秀郷公ハ。発ゝて。又後をを目ごゝのか本村敵よちろ
ゝりて。敵づうゝしさわのゝて。墓ゝ。ゝを。ゝを。ゝて。本
村よ力を合よと。ゝをを。ゝをゝゝて又ゝ。赤白の旗ゝ
ゝ。月をゝゝうゝを。ゝゝて。三ゝ。鉢巻をゝりゝ。

坐坂へなをつゝ。本村よむゝゝていゝゝ。さゝゝゝ墓沢
ゝゝゝゝゝさん。ちゝゝく士卒の。魂を。やゝゝゝ。
門寺安とゝゝへゝど。ゝゝゝよゝゝゝゝゝ我よ。へゝゝて
へ入るのゝゝへ。宝まるまゝゝ。出色ハ老切我ハゝゝゝ。かゝる
時ゝゝよ出合ゝゝゝ。華ゝゝゝゝゝゝゝゝ。軍ゝゝゝゝゝ
ちゝゝく足ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ本村ゝゝ不
敵よハへゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆうきよ。小河助左衛門平安。大井何左衛門。波江八井
上左衛門。田原新左衛門。田村左衛門。作兵衛。
人。山中三郎左衛門。討死をしたりける。松浦弥右衛門
井上与左衛門。長屋平左衛門。作兵衛八郎。後藤の付手をしたり
つりしずに。父子兄弟のあわうしまうまず。五二五
切入。しをのらびをしたりける。中ゆと長屋平左衛門
寺田結わるよりて。白縄をゆるし名これよりて
平左衛門。五分ホの時軍。西をうちどて
たりうさて。名所の位の甲首を十八まで。このたりうり。実よ
松浦弥右衛門。後藤の大井何左衛門。浅野のげ中。鉄砲疵
とりうり雑兵よ首をとりんとまるを。をつきて敵を
うちとり何右衛門をたすけられた。漏手まで。後よ何右衛門

あのようにうくて。弥右衛門。木村の弥右衛門。
たりし首。十五をかぞへ。祐筆白井孫右衛門よりして。松浦
弥右衛門。今日の一番首なり。そのひよ時よりうり。
ど長右衛門時よりうさす。松浦いうして。いそぐ。
でと長右衛門よりうて。手柄のわうり。浅野法師。首を十
四又捨よりうざて。本多。我こそ今日の一番首なり。
く時よりうしのへしいり。又波多野長庵。長木四郎左衛門。
礼。弟左衛門。三人と西くく首を十四又づ。下人よりをて
実よりうさて。我一番首。我こそとせりあう時。祐筆長
左衛門。松浦よりうして。
して。をつぎへ。浅野法師。又その次へ。波多野。長木。平礼
三人の名代をして。長よりて。己上の首数をあらうる。

うつず一番首ハ。よ遠よりさぬが。祐筆の古文書
ゆ。さつあてあらそひ。さとのゆへ。さひうへて。源氏を食せ
事と。をとゝ。ゆふひとれど。杉浦弥右衛門わやまつて
安乳のうまへゆゝし。給ひ。とびよりて。源よりの。たくよ
て。古実。他法ハ。さ事ぞうし。扨て。本村ゲト知よりて。後
の者。小勢ゆゑ。といへ。多勢れよせを。をびきりく。名
しうでゆゝしけど。実よ。郡原を。石寺ゲ。先を。三百。雑兵
他のむうよ。後へ。ゆゝ。ゆゆ。ゆゆ。辛ゆよりうべゝず。佐竹
と大軍しいひ。責ぐらを。端やぶんと。そぐいづ人の。軍
ゆをせりをとさんハ。ゆとゆげゆ。とをはゆゲト知よりて
いづゝよ川ごゝよ。見物してきうゲ。扨ゆ扨。をひど
くゝゝうゝて。佐竹の軍者。我つゝれゝ。祐とゝうゝ

今ハくゝゝずゝつて。出よく。をゆゆゝ。をれば。
川井三郎一番より。敵川よりとび入て。向へまくてんとゝる
よゝくゝうゝ。稼て。落つゝんづゝゝゝ。後者の貴高
の。捨の石実。をゆのゝ。三郎が。絞角よつゝそ。ぴうふ
の者よつゝつけ。ゆ身ゝ。ゆゝ。
見て。後者ハゝゝ。清水久三郎。白井右衛門。同ゝく十
文。目指敵者。佐竹ゝ。清田和紀。村上久兵。ゝ上ゝ
ゝ。川ゝよ。乗入ゝ。撲合よ。ゝゝ。
寺を制。今日の軍ハ。これとゝ。ゝてゝ。引よゝ。
佐竹の軍者。とゝて。ゝ。本村。後者。遊ゝ。杉原角
ゝ。懐金ゝ。三浦。和泉。同ゝく者ゝ。ゝゝ。
扇殿。ゝゝゝ。ゝ。ゝて。久郎氏。ゝ。源井。青。竹村

佐系。榊系。芝ら。とりてくし佐竹勢をおり
ちらし。棚をふりかち。竹束をつけ。後へとそてちらし。此
時に佐竹ぐさわまくまを負。うくちの三十余人ばかり
行候。佐久方河内守。小笠又市。まてらまふちと佐竹
也。大所所ちり。佐竹ぐ鄙なる名しちるもの。戸村ず宝
梅清兵ちり。上沢嘉系。戸塚九郎系。信田肥後守此外
人へ出張致候。そして。此刀をトされ。さぐくねとりぬ。
細佐竹が榊系を引き方へ。後をのりてトいるこの日今
級の合戦より。味方雑兵佐竹
ちりて。敵ふ逃より引。大将佐竹ぐんが逃りぬ。賀の人
佐竹ぐ大将とくんに。榊系が義と。ちねをのこちりちり

(二) 塩尾山塩尚の軍勢撰合の働きの事

附タリ 安房ノ方ヘ実伝ノ歌ヲ引起ス事

賜ひ。よ。ちを佐て。綱漢くちり出江より風ちりて。ふ濤ハ
ちり。ちを浪深沉の。ふ一ふちふて。ちを天ふ没の月。孤猿
として旅新おちり。縣波のこちま。耳よのこうてちびち
ふちど取十一月廿七日の暁夫よ。上杉中納言京揚軍勢
をりぐ。鳴地ふの小坂よちを井上指右ちつ竹田兵庫。同じく大勝小早川佐系。岩村
百ち助。六ふ新蔵ふてちちあちちが。上杉ぐちを。附のちを
あげくれべ。大坂勢ち同じく。附のちを合。棚をちちて。後
鉢をちちり。実よちをのちちり。郎兵威の猪よ。薩摩
の甲をちちちち武ちち。安房ノ方ヘ一書げと名のりて。一の
棚よ。陰をつちへくしちちど。大坂ちちちと。岩村百

助。槻をこうてこうんで出。安房よりゑを食せ手より武をいさ
勇をえんぐんでたゝうゝ。百ゝ弼。何とうゝゝ。安房
ゲ下陸の後をちらさ換し股をつれて膝をつく。
安房。実とめんとゝ去れば。元祖の敵を生下より付んとする
ゝ。いゝゝゝゝゝゝ今一度勝負わるとゝ。後を引てあいま
つ。百ゝ助叔とやうゝゝあいまうかさりかぐ一ゝんつゝ
きゝうゝよ。何ゝゝゝゝゝゝ。勝負とゝべさぞ。ゝゝ細ゝゝゝ
ゝゝゝ二度の勝負よりよく疵をうゝゝゝりかだ。死ぬゝゝの
和尊ゝゝくかうゝず。又かゝけわゝ敵を何ゝゝつゝゝゝゝゝ
れんどうくゝよ首とりてゝゝゝゝゝゝゝれよ。れゝゝゝゝの一ゝ
首よりゝ。ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ自殺よ
及ゝを。安房ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

を見て小太郎作意。僧侶のくびを斬下よとて。
我と働負せよと。稲穂の柄のくるくるとまいて。安房よ
ついてかつる。亜へ伊東右馬允が郎人安西右馬允ともせこうて。小
西川と絵を合す。安房音頭の男うか。こち方よいはてすの歌をうさ
れと以を安西実入どつぬよ小西川をつこふを首をとりて引まま
よ。安房をあうみつけ。我場よおもて。お意の歌くり事。いこ
さう取り及ぬ古実うおは色いをれよて仙合くる歌をどいぶん
んさそく働負あま。素ハ合よ色くるあいまうでい首ハこ
と。みうこをうてそうりそこるどのち八こそれくしたく
ひしく大坂ぐこち側の七組数よ踏を引て実よ事りて
こをまをおいそく切まくう。上板の先まをあへをぶ色。そ
よあやうさ西代 小尾山地。ありびよ別のろ場。横合にけ

つけ。大坂場と切ふをつこふを。上板の板隊のたをけくうさ
べ大坂ぐこの。七組の西をたハ色をたりて。変形ろへ。係をあり上
出形引ありこをのこぶりこあのく付記の見性。一数よ立めうあへ。
合戦のくびごとふ。死とくろんと。働をおるん。おいまをまう
へぶれた。くけむうふ西つづ色ううれとといい事切。おう海色
内部人びのぶこり。けおロの合戦よ出合ず。板友事村ぶ戦切
世ようこうく。変形ろの。出機場とくれくれた。紙ハ今月山本ノ
ようて出ぶ色まを一時よ退ちりぶけ。事村板友ろう若を
トようんと。大こやこよいうんで。事場八ふ修験。こう異の
雑をかびを色。ぶこうよありし上板場を。一のこまひぶくけて
よくれた。引ありし大場。雑ハ一人のこりこうてたくく
考をあく。只逃よけぶくりこり。海ノ場よ変ト。僧代の

家人。石橋踏よるまろをぐ。そ弟陸く威の大理。
仲の野ぞ。猛前るよ。まる町。鳴丁の陰をひつさげ。を二
五三よ敵陣へうけこそ。よトの用物町くつさあ。是の頭れ
を振りよりて。ちだらく人るの鬼とつき。柄を血よ切りる。
陰を振りよりたるる。そ〻〻ふいゆ。さもゆ実ま絵。く
ゆ波色と人見と発神町。内義助よ。ぼあてハ陰を合れ。
板日のる名よ仕直。ゆてと後頭ハ及ぶま。仕く陰内
合をぬ。ゆりとてハ波色をそ色かくまさ町ゆ。かゆ
町ぞ下町のやいだゆ。つさひる正板町くぞあ直月の
出世と町ゆ。内義成よひりて。及ぞ合せよ。ゆるて命
ハ五ぼ〻ら。ぞく。ゆ月の敵ぼ〻ぼ。ゆくていよのくゆり
れども逃生どひ〻ぼ直ゆ月よ安ぞ。波色よ

ゆ。廣云世ぞにそ〻れ。ゆるよ。姫尾山城ゆる。
軍勢ハ。と合ぞゆ町。敵と退出〻てハ引ゆりぞ。ゆ
ぶ〻り。波色ゆ〻〻〻〻ゆ。ゆ〻ん掛〻て〻ゆる。ゆ〻りたゆく
ゆ廣云。ゆ〻ハ陰と合せて。ゆる名ゆ仕〻ん。ゆあいて野れた。
内義成。姫のあゆ直町。撲合の敵ゆハ。軍ハ義事。引
ゆ町のどゆと姫をゆ〻よ。〻て〻ぞ逃入ゆ。姫尾ゆ軍長廣ゆ
を仕ゆる逃ぞのゆゆゆよ。二三町ハゆ〻ゆけ〻ゆ。ゆ夕陽
ゆ入て。ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ。美番ゆ人るのゆ〻ゆ実ゆ。
ゆの軍ハ先ゆと。陽附ゆつゆて〻ゆ〻ゆ。陸ゆ義
と横て。ゆ町ゆゆ。敵退ゆ〻て〻人ゆゆ〻ゆ惟幕ゆ
息ゆぞゆゆゆゆゆゆ。ゆ〻ゆ略陸今後の合義ゆびゆ
て。敵陸ゆゆ付ゆ〻ゆ。ゆ百ゆ数ゆ〻ゆ。ゆ和

川のみいくさのあるよかがれ。高くうて山かの神とうり
を事かし。指俵書いたうだる長くくとうづんで。一翻の響
たへて一おりを変事かし。をくる猪のひくさい指とうる
といへ。芸異の法より更の狂ごふをうとうず。扨て波をが
々この度ども。それよと仏どたらまちより級軍そ事せん
ちくくやちひくん。何ものうへ。恒よう礼をたて。一首の狂歌
をそ書付る

波をが浮名をかず略北川敵よあつて八月六日死をけ
昔を今もかるため。をかどさへぐこさ中よとそのそ
しるをつて事。人いを吾恩のうへのもそ。ぐうぐくうよ
ひるをて。昔をなの世よ祈ぞう

(三) 川内八助敵の指とえうへとう事

附り矢方の嫌ちうの矢表よをふうる出
墨垂月蔵て。陳鶴帰。東川廿八日の暁天よ大敵他死
亮が拒ロしり。出矢して。地間のさるぐ。大ううかず。法士
をどうついて溺んとられ。形意風をけ〜〜て。編ちよ
こうち。六合よ矢のこうんで。紅花深紫の風を。一時よるる
をぐぐぞう。をよよりて。京稽ぐちうよ使へぐうり
芳る。とと恢中よ。くうりあるうてたいまこうをお最北猟
猟と。あげうくくくんる。武勇を利隆中白の猟よ。
多毛のうるををしうて。軍勢を恢のかりよりへ。廿八
んとをいをざうる。づいそうる言表。地縛よ。行ぬ元紋
をつけう猟。天実のるどう。ぐりうくうよたて。同
く恢へのりへんく。士卒をちうぐうて出る。をを天敵。

手負ども。のとどめ。ども。新手をもつて。こと〳〵。敵をあびせ。山賊うごかし。地をゆるがして。をそるゝ。おびただしき。人数を出さず。こゝ。火をのこす。責こせ。これ。生捕のうちより。人数を出さず。こゝ。火をのこす。消神ゆえ。ちがいなく。へいてゐるゝ。やう〳〵。城内。大事。をきまいてのち。あれふるゝ。くゝ。換抱をもつて。とよせをの事。換抱をもつて。ぱ。ぱ。くゝ。よりのさゝれた。ひきあくゝ。あり。換抱。よせをの軍。うゝ。て。死。ども。りの数。ども。ども。時のうち。血。ハ。茶。をもつて。ぶ。ぶ。い。侍。ども。る。あ。ね。城。の。神。ども。る。よ。中。く。高。やぶ。らゝ。ぶ。ども。時。ども。ども。ども。軍。ども。し。ども。の。敵。よ。ゝ。ども。ども。ども

大地が深くまて。火炎あげ。天をもうけ。海をせき
びさせて。うつてうれしや。皆く云合よひくるられ
ども城内のまわやまちよりいさましかりいさましき
まりよりもとぎてあうと士卒をうさせるぞぜひとか
うるかどよ玉造ぐちへ。井伊掃部。夜叉右衛門。泉右。鉄砲おか
ね。黄口よ城をこうらへ。昌幸。藤。わげよ。大炎鉄砲を
たうけ。打く敵をあびやうせどもとも拍子の大石を面屋つ
者。伊木七郎右衛門。鉄砲かたいげす。ちげきりくいて
わうりる。今いつちが。仕出しをうんどうかぐふを時さ
うりさうばつりくせめん。うぶりて。三河の軍勢。ひとつにな
て雲霧のごく。時をぞのとぞあげよりうを。つて東
西の門よりあ岩あいて。城川をちかしをさ。二重の寒出し

城を。潰よりてつかをさをさるが。しせまのうりのども
これと義あと知ず。城中のひそうかりハ。ぞ勢しをちを
沖あのわかるぞ。やくふをやぶをかうげせしひさをく
いて。城をとへ。城よれ付をの。敵よとも殺られぞ。高よ
時かしやうひくん。東西よりも。一度よ鎧をうつてをう
くれぞ城よれ付をう。雑兵城の内よりけをうてぞのうく
よをうう城。蓋よをいてをうをうされて。死しよりを
ぞ城へうづりれて。平地のかし。ちしけうへよ。いうりを敵
やあうんしをせ。手柄しうをとをつとも。ありされ二重の
ト知よりて。死をちうぬ軍兵ぞうう城のうへ
をうををうてひうふへをせうりう。山城も城城ぬて。城
の城へ内よ一をわうべし。いうをも城をおくさべをとをせ。

ようたまて。我く死しゐぺ。はに陳の軍勢ハ敵の陣よれ
つくだ〜ぺやく物陣をこうてをゝせと。のくちりたゝつて。
まびゝくせめてぞ。もりにゝる。高田伊本。士卒よりト知して。陣
鉢どうゝせもど。矢つぎなやの者たよ。さゝつめ引つめ村立也
ゝる。これよ村。ゝろさゝとあ。又敵ゝ〜つよ事かし。家よ越
おの先きとゝゝふりし。ぬ多飛障る。同じく伊兵る。同じ
く伊市変。村とくやゝれゝる軍兵を引て引わけト知
しゝゝハ。黒田勢出張。ゝゝふり書ゝとやもくゝもどくゝこ
し。ゆんく所ぬ兵ハ家ゝり。命をゝ兵よもり。業武
子孫よおせよ。ゝゝつゝず一足も引べゝゝど。敵ハ今見ゆよ
ゝゝびゝゝ。高田勢つ音村ゝれど。分よゝて不足よゝゝ
ど。ひゝゝ市来陣の軍して。高田よゝゝゝゝ。三人矢

おりそよ立ゝさゝびゝて。敵おゝの中ゝ旗を引わけゝゝゝれ
陣市の村よ矢つぎをゝずゝさず。我ゝりゝゝふゝゝひゝのあの
ゝよ村ゝゝゝゝとゝゝぺハゝゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝずゝりゝゝゝして
ひゝゝのおよゝゝゝゝゝゝゝゝ

さそんで。軍勢を引へぞんと。待うろう矢ぞ。いくりくし
すみのへ。山のるいたわ。さ事ぞ。敵よもゝせどもこそ多勢
の矢おりそよ。さふさぐろ。ぞ敵。いふぞそれど。山のるぞこ
ひ弦へ。弓侍命をすそん。うくんと四方。六七人矢おりて
をあゝをひ弦へ。さ山田坂の間ちうのと見て。弓侍義を
たゞし。惣をろへその敵をうんど。士卒よト知てぞ。引
ぜ。わいてをこゝさわや。うるさをこせよ。引張。九
蔵こそ世よ面目をそへ。ひくふぞ。うあくろ甲紫。え
たりをゝ。ぞし。砂ゝて。ハ。高運つをて。討死仕とあぐ。これ
ぐをの時ハ貴をわされひべし。さりをそハ義やうのゆ。さと
ト。ことふ山の勇敢。坂東の大名よ非ゝうををゝうをべし
つぐよへ。引の矢ぞそよ。さふさぐろ従者のたゝ義おゝ。

我をぶりしひるとゝひ。みのゝくこそ見ゆれ。ゝ
士卒をを。一番ハ制しへ。ぞをちをつよくらんと。
抱ゝふ仕ぐ。さびくぐ。ゝらへ。ぞ。ぞをそをゝ
待ゝけりさんこ。ハ。出大名のもくまをゝ。ゝ。ゝ
村ぐ。おぐちをやぐれひと。ぞを。ぞひく。敵
契約りて貴をさうとりべし。ぐ。ぞをこをそ。
ゝ。時よ大名の義ハ。を方ゞ運つをて。討死ぞゝ。
雑兵ををそ。れやをゝ貴ゝ。さまでゝ名ゝ。ゝ。
今さんよ方役をめぐ。ぞ。勇ををげひを。
貴ををゝ。ぞ。甲紫ハ。ゝ。ぞ。
ゝりどいぐん待ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
と。引張ぐ。ぞ。ぞ。ぞ

物どもに同じくせさせて。時をあげ一時よせをとさんとさたまりぬる。高田を今はせんとすなり。よ後絶ぜあまじへこそ。ありぬるさまの軍勢よ。紂うちうけとりかどこ実万人の記をとるこの。その数いぞうぞくぐしてされをも白事とともせば。ひさをよこそうけてさうをまを引破ん。海をのうんとぐこそろ。海のうちくちぐくよう後絶まそ。うていたり。紂ていたろ。蔵ぐさやうをばんへざけ見。ひ事を大師ありきこてめされ。かぶりてかりくの軍勢を。矢ん事。さりとそへ拾ひさ事ありぬ。よくよりとりやせと。安房常力よ。信せトされる。常力朽系さの縄うけて。鹿毛ありるよ。敵うてぜひちをうけめぐりて。とこのむひをふれさうせやりくよ。海をりせる。海よ勇猛

なりよせまうるし。時のくちをうるしてくんどりる。高田をもせを引ようくはいよくまちのまして。先をうくりりる。ちりるよ海ぐるよちりし軍勢ぐろぐよの搨をもりてさいぜん矢をふせさしくろへりるぐその搨を流さるぐよ。引ちりぐさろ。ぐ高田ぐ軍勢ぐと。搨のうへまを大事あげ。引まるる軍勢の中よ搨をれのこりさ。うりあつまれよりて。搨をうをよりまこよりやず軍ハ海のみぐちぐこ。あぐひこうるぐまくあるくありつまども。再よちくて搨をれようるくあるさ。安よ。高家威の澄よ。同じ毛の星甲を。搨首よまるるしうる武ちつ。海。をうして海ちくりて。大の眼ぐ見出し。星鮮をたちよ。ぐやり。大事ありよりやりぐ

今人のもてあそぶこと。猶をれよりむかしの者。猶の教よ
いわうねど。拙手なるつがもの人。川田八郎といふ者。初め
より。山川の將よりあるまて。かゝる人なりのおがみあり。さまた
ち郷の手ハいさゝか有ぜど。たゞ義よりあらて義死して
弧をもろこし。彼の富ハ有ビと。今稽成れて三つ〻。城中
のんこゝゝんとゞけそれよりゝ。ゝろゞもの稽三枚をうさなて
きいゆ。弧よたゞさゝをもりあふ城をかんで三つ〻。城
中よか細源考といふものゝ。をゞれゝる弦弛のよりなりゞ
三枝をのをもをうんで。火ゞゝをうのてゝゝ。ゝあやまゝ
を八郎ゝをゝつけの。板よわゝゝれどゝ。そゞ事とゝをず
りつゝゝ稽をゝ。おのれさゝず。あゞゝゝらよて。なゝ陳よゝゝ
ゝゝ。小細ハ。金ゞ。ゝちゝんゞゝゝゝ

諸家高名記巻之十一

目録

㊀ 坂倉五郎兵衛の祖系測の先陳の事

附タリ 横川源蔵平子孫を付とる事

浮井七郎一二の槌を賜やぐる事

㊁ 伊宗筑後守義忠八幡を世ふ事

附タリ 極女義忠八幡の事并義前の事

三上が記ゲトン信晩の事

㊂ 波賀浦中丸役所の儀の事

附り 稲富左衛大尉を天満へおくる

甲別の今浦角樽を塩蒲る

㊃ 吉田左内守十郎初陣先登の事

附り 弓弾者六竹束を附るをする

木村長門守樽を交換の雑説

㊀ 坂倉与兵衛伯耆の先陣の事

孤軍奮戦り 輝て。

山中鹿之助一党 天正年中

く。彼軍数勢の有。

接る。毎日十一月九日。石川伯耆

伯耆人の

陣のように

完して。

多勝の

永井右近太夫。

日向守。伯耆

勇功

ゆ

ちで

軍人兼お。子孫ども。くさ〻の藤よ。梅よ白さ切さ
さ。五位よ蘭。り紙と付ろ。る京ををして。こと知記。
羽柴河内ち。徒系公義。早川九〻寺つ。木下右京亮赤松三
右寺つ。同ドく内脇。松田ひ〻寺つ。同ドく島津。右兵衛尉毛
らとら力らして。まわつくかてあて作りさどでよよ子の
を。義本万山。をよををく。大泥江の一通月ろく新あ
里て。宮松のひ〻ち。漢門よとろ。ち〻べ時新へ〻と
長寺筋三子作詩。白〻〻ち様の羽づけ。ろ。ち〻ち
とり〻て。伯系う河よ〻せ。時の新へあげ〻れ。永
ろく掲ろく。そ。向よへ〻ろてぜひべさやぜかりろ。
河よ長右保。藤北の赤くらとらくめ〻せてひろ
やい。我文。お換ち忠懐ハ。幼南と〻ろ。我七河抵

たろ〻ち。ろ。ち。ち。ち

物。[illegible]わそんでゐるうぢべこの源氏をよ[illegible]
人でたとけ。我よたとけられて。ゆよんゐひゝつゐて。
ゐいやごゑしてゝうゝゐる。ねゞちの者人。こと卯花[illegible]
河内。[illegible]のうへより。こゝつゝんて。士卒よト和して。[illegible]
鉄砲をもゝこまもゝ[illegible]くうゝ也。[illegible]ハ一人もゐげ[illegible]
ゐてゞゐゐる。こゝ[illegible]のさゝよをゝんで[illegible]ゐつゝゐるの紙。
まげ一ゐんようつてゐる。[illegible]
よゝさゝわげ。軍物よト和して。甲[illegible]ゐゝゐゝ[illegible]
よゐゐて。ゐゝゐゝ聽せ[illegible]ゐゝゐる。[illegible]ゐ動ゐ
よせゐよへゐ[illegible]鉄砲を[illegible]ゐゝ[illegible]ゐゝゐる。
[illegible]ゐゝゐゝ[illegible]ゐゝ[illegible]ゐゝ[illegible]

楚兵ありつゝ酒宴して沉碎のあまりよ義仲ひう伯
樂がうらよゆうすりかりゝ事たびくゝれば上にゐ
らひて。おのく所よ出て。楚兵一大事の指ゝを為ゝよ
ゆて。主人いわうゝ石川不意よそ〻しせめ出ゝ
て敵の陣ゝとる事天晴ゆゝしゝ高名ぞう。さいぜん
大の事月のさう抱ゝとうゝ。付死せゝるのハ。落田年人よ
わうゝ。主人ハ為ゝ為ゝよ。敵よ名のりうけらるゝぜひなく
家人。戸川義兼といふものゝ。石川が郎従とゝげゝしくたゝ
かい。首をとられよゝり。年人ハ伯耆が測よりハ人ゆてこれ来
る物ゝ敵ゝたてゆゝべて。味ゝうゝハ御ゝゝど為うせゝう為を
三寶敵よ取ゝごゝまれ。拾ゝゝ命をとゝんちゝりく去
民の義義をとゝゆて。為をやゆゝ。ゝ仮をうゝてゝ為ゝび

ゝゝ。ハのうちのあやまり。ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝと結。同郎義兼ハ落田が組下ゝゝゝ。
足ゝゝ敗小よ及びゝうゝ。父子小永よゆゝて。中流をと
てゝちゝゝゝ。而よ松平義角が備の武人。横川ひ家ゝ
敵ゝゝ足ゝゝ。同ゝくゝ小舟ゝうちゝゆゝて。平ゝと進ゝけ
をくゝゆゝて。義ゝこゝたゝゝけんゝせべゝ仮中ハ。屋ゝの術
ゝゝゝゝ。いゝでゝゝゝゝ。敵よゝうゝゝゝを為ゝゝ
のゝゝゝゝ武ゝの。逃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝ。ゝゝゝゝゝ湯ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。横川ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
合せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てゝけつけ弟兼とあいたくうよ。まのまよ次郎。と絡城
実弟兼とゝいて引よう。兼と弟兼弟と契ず太近
を近まちりく。蔵の蔵さろ時とと。一町ぢう切そ。つる
よ太近とうてぢう首とゝいてゝうと兼だ。又のと絡ハ横川
にうゝと兼首を敵ゝいてゝ切ゝ敵ぢうゝて。ちつ。ます。用
のまくの敵の敵。わまますまどのびまどゝ次郎とゝびれ
どゝと。わくて敵ぢかくくぢうう。弟兼むねんやと絡乃
敵。一人とうくうとそ。又とくんよう。せゝ半れ面目やゝ
太をがらびを投とそ。絡弟の紐を切らぢろて。又ゝ兄敵
のまくくて。絡十ゝんにうゝうゝて何ゝ松よ兄ゝう
ゝう。ひ手ゝ手ゝ手ハ大所西へ弟ゝ。三度と敵よ助ゝまと
ゝうよゝいて。ひゝびと太近へゝゝて。巻れゝかゝハ

うゝとゝひゝよ。かゝう仕合ゝ才よとあゝうゝて。討死しゝゝと
ゝゝとゝ。又手ゝが絡ゝ。絡生ゝ兼ハゝゝ敵首
ふゝゝうゝうゝゝて。大阪へゝゝゝゆく。やげよけんと
まよひゝさげて。蔵絡を絡よゝうるて。手子ゝが赤人ゝ
合て。兼ゝ兄とゝうゝう。手子ゝ又ゝが討死ゝうゝれて
兼ゝ兄一族討死のうくよ。我ひゝうゝゝて。兼ゝ
ゝ。ひゝさげゝる首て。手ゝが赤人ゝよゝれて。ゝの通
所ゝうてゝくゝし。東西勢の。あつまりしまん中へゝけ入ゝ
絡ゝ右を近まゝう。雑兵あまゝ切ゝ。つるよ討死し
てゝてゝうゝ

(二) 伊京横長ゝ兼ゝ川ゝとせゝさひゝう
宮国よひゝう叫て。ま絡ゝかゝれて蕭廊ゝる帰ゝまゝん

事をこそうけたまはれ。家より門に三郎兼と云ふ者ハ。性若うして中も。死なんと云ハ風流わがりする世の人よ和ず。なほ〻しべんざまの。かよふ〻びなさ遁れ去る事よ。つゝ〻ら薄田年人勢ふく。別てハいと〻物の事のこ。秋ちゝめ〻ちゝの世のこゝてきを。こゝあをこゝる事よ。びゝ〻びゝ義仏の様深〻して。仏系の出れをこゝめ。敵を引結て。あすちゝぬ方のうへを。死ぐさ〻こゝくちゝ。わぐゝ〻ぐゝひ。日ごゝよ書こゝ〻ちゝみを。ゝろよ年人もんごこゝ。びゝ仏系が南ハ。三方薄田の方ハ。一方ハ海。海をかゞ。後をちびひる雑下者。中〻幸忍よ〻すごゝやゝ〻。びまよひうひゝる氷井右近左衛。み北日向ちハ井右〻て。俄よちゝ井の右衛ゝ〻ゝ。

延引日を待べし。今我ちゝ〻ゝ〻ハ。ゝ〻ゝ〻ゝ〻

住吉へ家を住りて。美ぞうの家を。中多度を十人ばかり。北。
和い一ぞんのしゆもい勢りぞうしの家討ハうりもてゆきよ松
ゆ。ゆをゆるして雑人ゆ又三郎屋よりものびゆきぞこ不入屋
して。大酒沉酔して。不見よ家紙わりうる玉をゆひげけ
なきさ。石川ら兵ら高りよそしてゆ。猶時よふきつぶ。へうう
て落田ゆ松口を。石川ゆ陣下ゆ。ゆ雑人ゆ敵等伯よ
らいてそそぐんや。敵味方の物味ふをさゆ。中敵のあ
表をひくさ。うつてぞる名ー。伯耆ゆ国の。敵をそよゆん
とたりしゆ。又東西場を家の聞くよせあしを。ゆ山西おを
しくれゆ。矢の一筋をも射ゆけどして。お逃よふりぞうさ
を落ゆよそらを。角おの面目むふうるさ仕合
へ。それをゆ敵ゆ多のいのゆく。負害をとべうさ多ゆをあらど。

紛しての軍よ。一命をとゝう。生ゐ死ばの面目をかゞ
とさんと思業一筋よ身をおこあるとおもへ。ちゝよ松女死が
さの。秋月のふよまうせ。みづからを遣りて。雑人をこ彩屋よ
しびうもせるゆへ。不きこの軍をころて一たゝの物ちまめ
ちゝ通ふ。もゝかゝづゝかゝ。ふ天をぷらーと
おがとがめ給へんやゞて寄をゝ。濃をゝくめをそんさま
よ。命をもそく仏神よりびもり。高田辰の武運のいのん
し十二月四日の朝。人ちゝどり川のの川ものこ。身をこづやそ
者共ちゝ。ちる楚女のんよ。神物ちる牛ちゝ。実ちれる。人
ハわつれを独ようつゝ。ちゝ。ぷ。ちゝよみ。を志口をゝあゝる。三上
和紀。泉原八次ゲト人ち。ロ海の仕出ゝ。つのりしうへそ切
ひをび。ちゝるよ。ちゝゆへ。和紀と八次。陣をとかゞる

中かれば。鐘撞堂をを出ゝ。へ武物をんがを。ちをさよ。鐘動ゝて。を負おゝく。
かゝるちゝのわゝ。友雲和泉ちゝ。先をゝ。ちゝ。友雲
に左ちつ同ゝ。彩七同ゝ。動ケ由。御よをゝ。を。時をつゝ
て士卒をゝ。ゝ。ゝ。ち。ち。鉄砲の手だをゝ。入ゝ。ちゝるゝ。
物口の大石。織田左つ八ち。雲出ち。るよの芸三石ち千鶴ち
びよ。早川ち左つ木下左ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
上和紀。海原八次。を和ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
鉄。時のこを合せ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。
ちんゝ。ちる。ち。ち。虎の扉。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ちつゝ。ちゝよ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。
の鉄砲を中ちを。ちず。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

とくして。敵よりもみとめず。一時はふせぎたんん。そもそもさんとぞせめたりける。されども北勢の方にて。自然よりくくしてたゝかひしかるれども。なかなかくこちらぐうーぴむの大将あることしめされ。然れども集人。安藤第力を出役よりたのまれひくまじげ和泉守。よりのよりのよりのよ

藥あげ。井樓をあげて城中をうかがふ。城ぐいを仕寄。か
ぶとをうけて。乃筋を城通りされば。和の寄手をもてなすべし。
めんくよ山武藤いそ[illegible]れば。城中敵よりうされておさえ
うれはあぐめりよろう。十二月十一日。大久保彦右衛門。城中の敵をく
そ切りあいて。信玄卒去の時長。長篠の
辛労をかがめりけるとられ。酒肴を給りされば信人
よりうとんで酒肴をとりよりうろ。去ぬるよりの方のうをまた。城
中くふ竹束をつけ。本戸ぐいまで仕寄。鉄砲のひびき間の
こえ。彼茶臼よりの砲。金掘際よりうつてもてなすべしとて。
うち出毋後ハ。城中の抜鉄砲をべしとて。結城城まで
ひつ通られて出出ぬる。中ぬる彦右衛門の出撃ハ。金の切
ささ十二年。先い紀伊国良郷があげりられて。[illegible]が孫

あるよりうそうう。又津川左近。新城へ。蒲の[illegible]文十郎。金
乃瓢箪の[illegible]。向月よりびうしてぐりまうりたるうさま。
ぐふ藤くくとおこそくく。そのすくまくよハ十万騎のつつの
胄の里をうやして。列をりておうびおうりぬ。鉄砲よ玉薬
とうとぬうそうそうして矢つぐんとうるふぐハ。いくさまを手柄たち
ぬうち法河とおり。左山[illegible]ぐいまて。海くおううと。中くうう
ぐうというんうぐうりうりぬ。けいうさうのを出発あつて。法房よハたの
りくれがめ。ぬんぬいうまめ。矢ぬくへおうくせ法ひけ。
板田方ぬ[illegible]をを[illegible]ぬりよ。[illegible]鳥羽葦の穂よ。庵の屋
ぐり竹風ぬびうさうの[illegible]。[illegible]くぬ。[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
ぬびう。[illegible]の[illegible]よ[illegible]の[illegible]
の甲のうさおうりうてそあ。さうとぬ体方をうようぶ

出ば百ぐひとつあるべし。そこでめのんくちがひ。後天皇さ
れしかりう。片相手出。後お鳴りうつて出。田村芸庫よ
大筒をうつをれだ。おやまさび天皇のこゝをおこゞく
その者雷電をゑよりそい。義勢天よひごうつをひ
よ。信州十人よりををるう。うりよ今自に新羽軍。拾石出ん
ひそれ仕よに井上まれう。ゑ飛監物。柳生又右ゑ。永井源ゑ
ゑ海手書写。食の高の扇の出る中。紅の書脇の出物。尾
の関の投鐘の出陣。法軍勢出濃一。寄物。片
京町の井樓より。編笠を出ゑ。大筒をおせ。編
笠元来の手れ。よりをぞうふり。ん中よ氏神をおし。
火蓋をうつてうかせばもおやまさず天皇の三ゑ。
をたゞひとりおて歩ゑゞうう。新羽軍よ出機悦を

ゞをて。出中陣へ出うりあそゞされる。又ひゞうふ。
屋たちを雑人。ちまちたをれ死しうる。濃毛ちをよを
どうをせあしいそゞ天皇をりをせらをやゞて城田
を示教。大胆徳犯亮をめをれて。の結やん。こゞくへ信
長の極をして。濃井が姫ゞかる時よ。一方をうけうて。付
元をををべをををうをををん事かれを。実来の大勢。をる
をうて。ゞをゞよ今へ姫を心を歌の舞ををびををんうをを
よをうをれだ。百ぐひとつあをあをゞ。中ゞく義彩公の出運ひう
うをへををいをうををゞ。何をゞをあつうへ。和睦いうをれをば
をうべゞうををゞひひをををゞひよ義彩公へ。をゞめをせをの信
あへををををををへ。をゞ。をををの。出羽国ををひゞをう
たよあゞゞ来うゞををよ。ゞゞう留のかなり

玉物ゆえ、実東物とたくらへん事。ミつひとつずゝ此母ゑよ
帝ゝよりかゝ。ゝ也給ふ。そ。秀頼ゑの出運つまづくさゝ
ぬとゝの切り出ひとひ。ゝ也給ふ。弾ゝさんと浪人の出お
そうて。ゝ東物。徳川亮。浪人。秀頼ゑへ出和睦のあつらへ
徳を入られて。ちうゝべしゝ。弾ゝる。秀頼ゑ。こゝ。御母あ
徳をゆゝとゝまこゝ。ねづゝ。ちうゝ軍をせんとゝ。さゝこだゝて
まゝ。ゝさゝ也たゝ徳軍人。皆秀頼をたのんで籠城せり。それ
らゝたゝ今ゝ。ゝ。ゝ。ゝ事。ゝふゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ず。ゝひゝ。秀頼ゝ運ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

恨して世をさいげす不美未練のふせものぞう。殊より徳川家
せよおそろしくおひたしい。天主堂の角櫓前田家一の
くるあり。陸奥国の名所のねらひかりて。実事の作をこまかに
ろ美彫鷲つげてこうして。但るゐ見のうかりをこ色。ぐ
んの角櫓を。かりくげせとの義。うかりを見分待りてやとる
よいぜ角櫓。ことの外要害をこらへをれひゆゑ。地石ゝ
たくして中く美よい。恨ふくいしてくこ。ふろをなを
作濃吉のこういこして。甲斐のふかのうかりをかしてがんか
さをこて。やうをあへさびねられそれば。二三日の間よいとんあく
恨ふくいしやべさと。言とをこれよりて甲州のうかり
をへ作せ分られて。一大事したのこる。角櫓こかりくげを
もし。風実性よ中て。美ちり徳川家意よ力をこ。

和睦の義をとゝめるとく

四 高天の原四十万騎にて西陣先鋒の事

当流荊卿が威徳せしと。慶安撰ふう分を投ぜしとも
八郎の為よつちへ命い義よりてうあし。蜂須賀河内守
書によ陣をこいて。絶へ農業をかりし五へ。城中ち。作国名
色器造物。よ物のよ。よ色あ石作陣。十二月十三日の夜。河内
守の陣五へ。れりけ。ぜちうくいふこ附をもあげど仕ちてふ
捕とべうを支度。敵の油断をうんをこうらふ。さしをいづくうたやを
くちのびをせんこさ。こうバ附をけげて。敵の寝耳をそびや
をせ。石作陣のものども。一度よ附をけげ鉄砲をもこさ
きもしをくうちうけろ。五よ蜂須賀の義乃。当城ア地し
さやいちうかとぞ五をいて。敵人らをもこ中をおく

る鉄砲よりのうちずゝとうちかけ切てぬきふせ。まひぐくしをせをさゝるゝ。つゞいて中村右近。稲田九郎兵衛。梶弓之丞。水中村若樓。宮田七郎右衛門。面々おの〳〵ぬきつれ。ぬきとるとゝろをうてとゝろをはぬ。ふせをとゝろをあしをうてとゝろをのゝ。死而を実ゝくせめたゝかひ中村右近ハ。国をつゝめゝけて切て入。雑兵五人うちとり。拾七人をうちとり。拾人をうしろより鉄砲をうちかけ。右近が槍のもゝをまはしあくろて武蔵よりたゞ一人。なりてきたりし軍勢ふせぎとめて切ひしをぶち近数ケ所の手を敵かゝ。面をふゝどたゝかひ。多勢よりまはりれて。討死を。稲田が孫をを敵を退ちゝ右近が首をとれ。八十人敵をうちとり。死もちゝ。ちゝ。ちゝ。水中村若樓しおりくの敵をうち

うつくしう。びんこのたてうさに。せをはしたる。國たつ階段と
源子数ケ和歌くれば。討のこされ。ゆくえをさがしつゆよ撫
へをひきよる。若田左馬の。あはれと迎り。せをおいたてくるつの
めてついらの左三郎。おしとりて血よひうてうち。山刺をさし
うぐいす。坂殿のうし。大きよ右のの。ひよるこそいさぎ
うし。物又撫の東のうせをいまの田伊豆守。都沢夫沢組る。富田
銃後。拝原石見。比考たは。武切清数のつをもの。東村必
門ちがうあと。おあぐうんと。残宝。てナ二月ナ三日のあう
つき。六条殿の舞をあびう。討をどりとどあげうう
ち門ち。橋ちうつとうて。見時よ。富左馬佐よ。対面
し。兵今。系が。物はへせめうせる。実乗殿の舞の紋六条
殿ちて。そうぐうて。それはつきあねい

たづのかいことのあるあり。武ち二殿。ちつさうはちうて
う。殺絶と事とせば。甲をうぶけて。江者ナ。伺あくま
ゆてはやらん。橋ちう。出発下されぞ。ちうたるかに。ど
うゆと六条殿の舞の紋。同苗伊豆ちゆて。そのうさふを
ちんで。仕者ナ。ちゆ事者ち。二人いち。富河内守ちてナ三郎
伊豆ちうゆて。今二人。和紀ちてナ七。孫ハ系ち年乃
討ち。ちとはたいふれて。懐恨させたる世辛。その討ちゆを拾
はず。せよへ。ちうしてうぐ。
豆ちうつ。ちよいてうきたり。
ねどかまで。只独とのうち
よんで。毎日よいお紀。
わうきこを安たを結ぶんの人よ伝ちられて。討ちうセトさうぐ

ゐるを見て十郎まで。本村殿の御ふうを。討死仕りけど。名
のを武よとぞまうて。一族の義経よひしぬとぞ聞くとぞ。
西門方さ家河殿。父子引られての軍。仕るべき時の出でがたかるべ
ぞうなりどれ和睦よ取らく。貝出殿。西面方さうべ。西の陣
しゃたりと士卒よ下知。ゆずの二騎の武者を。絶壁うら
べうず。陸奥守殿仕れとてうる。時よ。城中の大荷を負て。侍長
るの行来で。二三騎おたてうる。れば。名井者ゐて立つ。たで一人もて
み出て。行来で付ゐてうる。敵とみうを見て。城よふ敵の勇
士ゐを。かわぬらの。ゐりう。城郭ゐりを出。俺の義をトゐげ
ゐうゐれいた右ゐうを。ゐを出でどもを。まづ仕ゐたる中よ
しゐうぐしくいせゐざりうゐう
諸家高名記巻之十一終

諸家高名記巻之十二

目録

㊀ 京隼人貞弼奉村ゐ陸奥盤嶽よりの事
附タリ 法皇御廟参ゐトゐうゐう
大北修理亮活強のゐ

㊁ 日蓮の西方抗義ゐ論事 并二 鎌倉の始りの事
附タリ 伊東丹後守 駿府下向のゐ
三ゐて大内義弘 城場場のゐ

(三) 大坂より濃州を攻挑んとする事

附タリ 武田信玄不幸の形かくれ無き事

織田方より大坂を攻る事

(四) 木村長門守感状を給はる事

附タリ 大坂籠城の子細七ヶ条の事

上村今参の一の槍をとる人もなし

(一) 京集人員弼書村ゲ陳西響寄より事

文明元年師走敬同ド。江山風月紀行よりする。大坂より出発ありて。和歌のねがひ。はるばるとうつりけるとて。

道。堺の浦とうづ。堺とこがらて。事ゆゑかさるべき武陸。

あるを人質として。京へ出下向のとべーとて。きこゆ。

犯亮。義教公の孫なり。とぞよ。誓紙をこのくされる。大

御下向よりハ二月廿四日より。大坂と出義なるあそびさるべきぞの人

ゆて。さうび軍功の事へ出感状出響寄を給はるべきさて

大出所よりの(ゲ)てたる日と給はるべきゲ紙より十二月廿四日

の事。大坂をはたちありて。京紀へ出せうかされて。林小義出

洞へ。天下稀濫よりうる義を。義関あつて。出発しよりて

でされて。元三より張府へ出下向あそばされる。新右軍より

へ。大坂よりは紙まあそだこれて。四民ゆでたさまをひうへて。
往古の代の万象をうたひる。実よ敷あるおもしの家人
よ京集人公貞紀といふものありて。元亀武田信玄の家人
たりしが。陽報滅亡のほい。泡人してかくりしとおもし
渠ハ公双の剣のものあれば。たゝへてとかいち異覚の
組よりつけて。軍敗をつくさどうせかひるおるよ大
坂籠城のうち。高名をつ作幸村へ。同友のうしみやうり
こそ。今和睦のうへ。なをこの幸労をもとうりぐさびビ。
和睦へ入れのひ。なをつくさうに招待しる雄
人をゆうて幸村よ。横志代のべて。ゆへどもをうて
よいいでうそ。公意へあいううびひそれだらるもでうさ。
内をこをあて。集人へよろこびを高が陳列ゆきそれだ高つ

こをのかはをして。往くの饗応をあり。神事をうう
今時式のつづ。海や蕭条。右腐をうきる時。祝して美代の
まどりをしをとび。強僕射が新名をおんをるに。推て忘年乃
友ともをたぐるあんしー乗よ高濃神よりてうて。酒飯事
をうりて。高ア名ハ。幸事はひとびハ一定討死しあるー赤よ
不通よは和睦をあり。存命して。ク見来仕る事のう思
ようよ。強よ孝村不肖の弟也そ。ものをとも。一言の大恩をうう
今生の面目死後のうい出よ。つくく世上の神をあるに。大
乗修理兄弟をそ。実来のあ下和を守り。秀頼公をあり
たてア。ア移のものよりうどいつしよ又出不富のうう。敷
遂を紀しー。は和睦の事。ものをうりどやぐて合戦よ及ん
とうてをうう出ハ。集ぜひよ討死よ仕るべー望

四

四郎左衛門尉殿のうへよりぞうそうの人
かぶと甲冑殿の船とうつ人来
て。ぶつしてあれ宮と
つてうしてゆづりはうわつ色
の時よ。色をそんし村通つきて
朝倉の手よりかつるまでこそ
殿の船の甲冑とれらんかなされらく。
同友のしみよ。一通の古通向をかされ下さるべしとおもふ
れてうしてこそくしり。年人わかれよ。
そよ戦場よりおもしく方の雅久生ぶりはべさそ。和
とうしてく鶴威の陣とこの
毛とこしひこう。馬鎧のこの。
守殿ぶ。年人ゆとかりめしはべらふうをトさるべしいべきりで

高名記十二

ふ。雅はうさうざりうとうかうず冥途をそい来こして
ひさ世の賜と行ちてまんと。源花として爰よ似る殺
をもひ。今零落しする同友。まこしやかうで。東よ
籍づのち。元河実事久しく。黄礼新のみ
事あつたりと。たうこしたふ身をせ。ひとらべて実義
ちう。そのの左つ。廉毛ちうるよ。白藤よ金をもつて連接
と行ちう河川。出毛。白測よおもわてこづうあのりて。ひる
をは殺下され。おそうく殺毛ちうまいハ七の天るそとあが
へひ。やぐその合我い。年蒲よりべ。ちうで年北色よのり
出。東玉の大軍よりけひう。ひるの鼻のつぐうんちぐハ秋付
死付ちへ。さあうよ在しひうくへひるぐつして松毛よれ
ざひと。地系に文んのりうしてやぐてるちりてう酒を

きてめ。飯ののよう。救邪よりあひしそれだ。隼人貞弼へいさま
ーさんと。爲出る。吉田今ちぐらくく。さてしまた 英賀たか
まそれで。ほよ石あをあんでごとをだを贈ものく隼人い
くうそう。おそうして。墨絵又月の食我よ。吉田乃馬つのる
ようのてぐんの甲をそんて。討死しろでわるまされ。ほよ
ーう出くはりうろく。隼人貞弼パンようろうて。慈勝
といでうろう。ぐやや。秋の月を。彼の中よ。新とろるくよた。
いまぐまれ。死のぐ貴のうちの名をのぐまどどくうや。武田の
あつうへ。来るてのつまぐうまれ事なりと。信人のいるこ御
よ大飛び隠遁をそ。ーまるなり
(二) 巳刻の南く出現義を鑑事 天二年の春の事
拝さんめる芸よ長又よの秋。信別まを飛び京れ大乳ーり

ばうるぐ海をぐやうふして。人うが弓勢をよすうくだり勢
ーよ。去よのを不意よ大飯の一戦おこりて。雑雑凡よのうぐ
ーり。狂徳ハ中をもあへ。緑波の地をびやうーて。貧民苦ぐや
ちんせば。貧財を山林よりちをこび。飢寒のうまへ大る
なりうさしぐ。いくなどもなく。出和賑さのひそれだ。万民つが
をよすま。雑色をこぐさまぐよくこびくーして。来ようし年
こんれあったまのまをびうくてうこぶるうぐろうなーされた
禁中よ巳方をそをぐめうぐ。のうまぐをあこかつれてぐあ
よいれさうさぐまり。改元ありて。元和元年ようつと。信大名
出発ゆ。新よのは徳美をゆあさ法ひうろ。大阪すよ三列
墨海よ去だうく出遁義ありて。ほ義をつうきをらうくも
大飯のはたちを。そうーめうぐ。これで大坂概理亮

いひそうふ婚姻を交敬して。二室の婚をこらへる。東宮の
位物天御所の出仕の和ハ大臣よりの事ご免被して。越婚をうど
あ。石橋をこがちられば。大飛鳥殿亮たびく、出て。和曲樂を
うりこそ堅給へべきよ。二この兄の婚ハ更に和歌をとりそれた
もとめ。もり越婚との出奢物ハ別れた。婚のうハ別らどうづめと
て。大殿ごしたて。推久実ひろ人ハ。人歩ままをてうめそれ
ぬ。中くとうどる事ふわず。さられた日を強へてうづめをあをり。新
拾軍よへ。四月九八日よ。大殿を出家ゆるわして。二月七日昌臨
へ出まあをだされて。ぬ家ハ出ぬ。ぬ家ハ出ぬ。ぬ家ハ出ぬ。
住り。出仕義のうへ。出家の面くハおよおわて。弦をの住りおを
てものち。幸あハ命九命とい。幸のよを英曲をつうて。ぬ
撥姫こうふとだれうりをもべ。幸あ家をとハうりとそを

俗性いやうずのうく紙あの寺獲。桃井撥たる亜帝ゲ
来ぶく。み亜帝へ。元弘建武の大乱よ。足利ハ軍ゆのの
ほよ屋ーたびく武功をあるーう。軍をつうるあ
よいうのるまあ。いうくを恵賞よあびうーど。うるまうて
撥たち。先そうーみ実方よんひるぐーて。新田ハ中ハ
義貞よ蝶ーぬびくの合戦よ。名をのーるびいうあ
運やうるうんやりく紙を紙中紙ぬ。三ケ月を切ちさ
ぐれた。先とよいうとあく養嫁ーて。亜帝ハ先のハち
ハ孫ハ孫寧くのあくみり。本玉の妻婚ハぐうく猛ぬよ
離婚ぜーその中よ。幸あ兎ーいうもの。春山よのぐり。光
桂場の窓よ学問ぜーゲ。ひ問自紙ーとうーく拍みよ
うあハ。うーと双紙よ。言をうせをつけてうーひるそれ話よ

さりとも。かりそめにもこの世の人まのづうこもを
舞と号せ。舞あうう子孫あへつでそ。ひこぞそつとあて舞
変と名まり。ひゆへよ元祖舞あり九と。名字ともして舞あう
変といつり。元今の舞めもじめぞう。板しもかうへの未
舞。舞変とろとり。世をそうこそあれ。板大坂の城
舞信あ舞とつげまりそれで。大御所よへ後府へ出坂御あ
そだされ。新お軍よりも。東武よれト白とぞさらへろ高
ろよ伊東丹波ち長実。ゆうびよ大義のつげ。永原正業吉尼
義新公御母淀殿の出坂そして。坂と三月六日よ出発して
後府よ参上仕りへ出西へトろへ。去ほの長孔よ接列御
別の百姓退拾いろし。一命よ不勢ゆ。もよろて。お人
筋よいろへさろべさ新お出発ゆくいあつぞ。治ぶしれト言へと

義。法成寺殿御同おのの御はらとゆて。二女下向はしまひ大納
ふかさうめされ。去年水膳してるをめさるゝうへ。宮
よ仕宰人どもをもち。稲荷のさてきでさふよ今よあめてこと
義なく。かうんづくち坂の城をぬて。大和のくもへ。ふしうるべきさい
やくをも又延引よ及ぶ事。ひとへよ為れの不為ゆをはつまで
お侍のさかゝいを。胆んのさうしとんこうさわりて。天下
の乱ゆしまるまし。急ぎさうゆてびひをゆたゞめ
くのさをり。大和へ引うつりて。坂の城をあけ。めゝかへ方仕宰
人どもをこゝぐくめゝちかさうべしゝとゞれぐのようをとう
こまち。伊東丹波をへ。坂よくうりぬ。二女は尾州の婚礼よ
て。孝の事をれべをもちをぐよ。如此集人仕給御同
ゆうて。法成寺殿の事をるとゝぐれてらんべきゝの仕せゝよ

て。二女は尾州へおもひさうる。坂よは丹波をあゆて。たの
ゆゝよとそれで。宰人は義のうへ。大和の宗教よ
出家ぐかされ。我くゝをもとりさうるかへ。ぬく流浪仕
て。鎌死仕るうゝ又は実東ゝうはさゞりあるよ。ちゝり首とうれん
うゝ。ひそうつよ為上わのさをもまりくへ。ねく安全万ぬきよいそ
をかゞくへうつるゝ命ゆ。ひ坂よのうるゝまつて東
物を引清。いさゞくく討死仕ゝんあゝゞ。秀教公出陣代
のうゝくゝ。大和へ出仕ゝされゝをふうゝうゝてゞゆる。秀教
公も行ゝて。ひ坂をわけて。敵少へうるべきゞ。ゆうさんの遠事
ゆて。和睦といひつゝ。さうく天運よまりせ合戦して。せの
東宮をこゝかゝんされくゝ。面ゝゞ物をとうへて。ゆうよの仕せ
ゆて。大政御相亮懐面よまるすあまゞ御相亮二万八

万俵。金子五万二千三万俵本村出門米二万五千俵七組の熟物三万俵ほか
俵大坂道六一万五千俵五千俵又海
筵市五万七千俵宿俵ほか掃部二万五千俵又海
又海二万五千俵ほか二万俵同じく大助五千俵
八千俵ほか三万三千俵二万三千俵
俵紀合十八万五千俵ほかの筵塩ほかの人数よ
へで毛中ほかの品いさむ東西物中とうけむ一戦よ
利をぬん事。東のうちくとぞ軍の支度をうくよ
そりよりそれ

㊂大坂より洛中を焼掃いんとする事

諸国て変くの民ども事切り。だ嘆て敷く穀よ作り臣
ども。又引うて。元和元年の春のとをふしり。何くにの世上さい

うく。京大坂の町人ども。この面世。学さでかうる事人かれ
ひくさうとぎよさいざうして。編とりくして。資財雑具を
取くくこびうて。ろ。ぱいふとびこうちこうに大坂の協中よ
出奥をとくのく。地ろをりくわ。けり甲業ろ。秩祀の想を古
日ごろよるとうろ。これよりいて只今事いでくでこ月きこの
加うようこふし。伊れで去ま。の会祇よ。まごろせ。京大坂の
町人。第くよ実つうて。世上。恐よ。ろ。ぞう。ぱわう
人。拾ろ。大坂方の武蔵ろ。ぱわう
し。ろ。ハ。袋よとうそいひよ。命
ひくとうんよ。ま。業しへいひがう。附よ。ビ
で。朝よわう。本玉勢よ。せ。ろ。ぞ。ぞ。ぞ

そまつく辛忽の口述。板とせようたてさと員をひそ
ひるこのおかうりう。こそは事を板倉ちり死御こいて
後府東武へ往をくれだ。友所ゆゆと板八又右板敷遠
よ事こそいまりしと。此乱をこそこそこそ。俗
逆政宗。義堂和泉守。夜人ゆとうるこへ所和睦の義さ
ぶつてゆゆとゆゆ所をきゆとるふく。面しが所よ所を見よ
ねぐきりしこ。どうくよ東京へ対し。北んのさゆこさゆゆ大
坂の北人ゆうくゆゆ人だ。中くもをとゆうまぐく移ゆう
此一ゆよ。長敷のこゆりぞそこさこよゆだ。
たびはぜひよ。大坂を北法ぶ。天下をたのくよ所ゆひ四海
安民の世ゆゆくゆゆへとんゆ所をゆくをこさこゆやされて
ねくとゆくこさよくをこゆ。凡不義の行ゆる人ゆう所ぞ天

のせめをこゆゆ。西孫よひて事。古今をのたゆゆおかし
ちくいさんゆる義者の法。西治の備。西国四国の門の
法大名をこゆゆい。諸敵のこゆぞそる時。高倉集ゆ鳥敵よ
ゆし。東京をゆうがさんとゆうゆゆ。天下をこそんぐ
時よゆへよ。西治下の逆徒ら。一群のうちよ滅亡と。此時
義軍を敷害してゆゆべしと。諸ゆ一同よ。義この義兵
きこれを。大関義者のゆみをひ。死屍をゆゆ。
義兵をくゆへこゆこゆゆ。一度ゆゆこ度ゆゆ。諸敵を
ゆくこゆ。方民をくゆしゆる事。元こを兵兵ゆ。ゆ
ゆくゆ。去ゆの合戦よ。ゆつぶさん事。いとやこゆ事
ゆれこと。何をぞ兵ゆのひゆぐ。義こをひぐ。
天下勢盛の行法ゆ。義ゆの義をこひぐ。
ぞその兵をゆんぞゆゆくを

あくまんやとゞめ為然をもつて和睦のねがひを受けゝ
かりもちろん三殿主の遺報もあり秀吉天下通じて。
自業自得果の乃理をあれども。ひさびさうしとぶかが
て。万民のうらみをたゝらべ。先主三秀吉強
よいひまいされて。不吾のふるまひ大閤秀吉の罪科
今秀吉よむそかとんへうり。ねゝ藏田信忠へ兵利拍軍
義盟よりちぢめいたかりそれた。なるへきを見て感物よろ
て。義盟を既流して天下をたなごゝろにさめんこと
うゝとも。悪人悪にはわりて。的智自滅。信忠父子をこ
ろしぬ。又主閤秀吉は信忠の家臣とうゝふりかゝり天下
をうばいとりて。信忠の事をふとゝろ。ひしくぬ一生は強勢
よりて。天のせあれまぬ。まゆゝ逝去すゝ。

今の秀吉為ゝをたくゝたへ天下をくのぐさんとしてやゝて
身をかろかざん中ゝ。ゝ大閤秀吉の強為のひくぬぞう
し。又武田信玄へ。古今の名将。世もて人ゆゝとゝ
又北条氏康。信虎とゝつゝて。甲州へ逃出し。軍この身と
なすす。不孝のつゝものゝれゝ。一生のうち玉を磨くとゝる事
なくわまゝのさへ三列武田合戦よ。かゝれ矢よわゝて死と
かゝりつゝるよ手負せゝて。逝去して。程なく。孫藏七
せり。こゝゝゝ不吾梟為のひくひ。世よ人のゝる所ゝ
なり。孫よ大御所よへ。ゝゝ。ゝ信忠の強軍として。教度
の合力かりゝるゆゝ。主閤秀吉。日本国中の強者ゝ
らひ。藏田信雄と合戦よりゝ。大御所信雄ものゝ
戦んとゝるよ後りゝ。大御所信忠ものゝ。

を人のまゝかおわて、秀吉の大軍をうけぶせうしゆ。
勝利をえさせ給へ。秀吉際にして。降参下地をゆるし
して。和睦をねがひ。わまつうえ秀吉の母。天穂と妹とを。
人質にして。三月廿日勝へ上ゝ。これ
らのうしをもつて。秀吉の恩遇をかゝめをなされしゆへ
たびゝそとんをひるがへし天下弱徳の義を。あらし給ひ。出
ゆ下かうべし。さとかくべ。一時よりつゝして。万民のうれく
をたゝとくんのよゝ。正家と和泉をもつて結縁ぬ
るをうれし。海濱してうんじをうる。板倉よ勝重
敬の交。実東へ申ゝ。ゝろ。家康公へ
ごうと実て。大さかをゝろ。
別而義信方。出家の人吉ゝ清貞をめされ。る貞民を

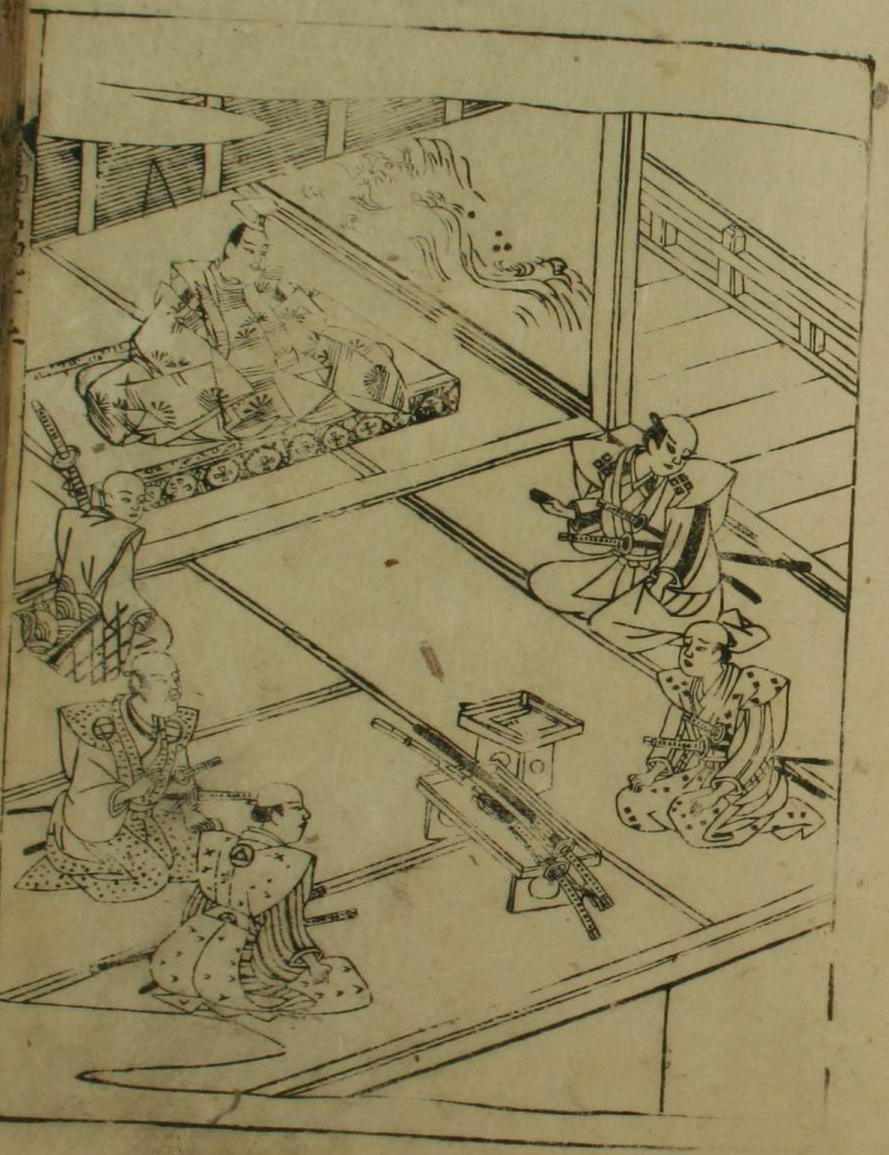
をうつのへ事。南方世間のうし。高麗をうゝをのうし。異人
うこゝまつて。ゆをうれだ地内の法軍人。これへうりうる品
うゝし。あぐゝらふ族のゝく。板四月四日。大法和よ。強府をは
出るわをゝされ。松平下総守
よゝをうゝあり。うゝよ治し
ゝよ交がゝをゝ。守護しを
伏見の城をも護しゆべし
庵よれをゝあをゝされうる。義をての出兵をはをんゝ
よゝ城。大坂の二女と。ゝ。ご遍義結りて。出徳義をゆげ
らる。板倉藩代のうゝくゝ。ゝをたりて。あゝりゆゝふこの
よゝをゝて庵別よゝあて。平岩右衛門尉。ゝ。出遍義
をゝされうる。更織田をゝ家の家人系と結りて。多上

北条三郎上ラウヘ。秀郷公の出羽守ニ成。ちゝ関東の出ん
よりもひでくいはゆへ。秀之撰玄仕りそんどもに母子たよ
出羽に引れるゆゑ。さる歌人大夫をたちのこりこ
ゝ。法皇をして歌ゆりくる。大師所ここ召されて。歌堂井
伊。中多下給る。水茎ひさ人いとゝぎあとりて上下の雲羽
来るよ。陳とゝりて。地常とましめりせとの伝せかくふの
て面くと居ゝされくる。光ハ大夜ゝ。京紀を続ゝ天子
地間と。大夜へゝりもんと。ゝさし伝ゆへ。やゝ洛中
のゝぎめりてのおゝ。国十ゝよハ。大師所ゝ。こやを出かるわ
いて十八日より京へ出ん二条の出へいせ給ふ。新ゐ軍人
伊丹新ゝ成。結国市聖つ。出機姫出嶽のためよ。洛中出伝
仕りくる。出上洛の砂糖常の出ゆくゆへ。ゝくゝ出陳の

神ゝあゝぎれで。法人安堵して。やゝて天下ハあさまるべき
とゝ為ゝとびまりぬ。大義のつゞく。永承正業居を出伝ゝ
し京出ゆへ。出ゆ事伝ゝ。ゝゝ出ゝ。同ゝく
入洛仕りくる

四　木村長門守感状を給退ゝる事

ゝゝ大御所出入洛ゝくれば。秀郷公ゝ。ゝゝて
木氏の御補伊東丹後ゝを役ゝて出羽義入洛義
と使義ゝ仕げて。ひよさゝたゝて上ゝ。ゝく。拝引ゝ列
の百姓ゝ。ゝゝの芸乱ゝ。退義仕りたゝく。ゝ百姓ハ深
ゝ。換亡ゝ。納ゝ。ゝひゝゝ。ゝ人ゝ
ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。伝ゝれゝ。ゝ
べゝゝの義。ゝ。ゝ出陳軍人。新ゐ軍ゝ。ゝ入洛



はり。近江小五郎の長ゼヤとゝるふりして出逢事一度月出逢ゝ
まそどのゝ丹後ゝ。民ゲが脇。大郎のつゞ。ゆ。業戸。ゆ。人ゲ
ゆ。出されて去度の長孔よ。大阪近辺の百姓近義乃事。ゆ。ぎ
れるまで。河列の百姓ゝ又掘列の百姓と同じ。ゝ。ゆ。ゆ。
回る和睦のうへ。ゆ。逆。法流人をゆ。ゝ。ゆ。ゆ。
久ゆ。流人をあまゝゆ。ゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
れて。長敬のゝ。不自由ゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
士。合戦の交渡ゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
よのゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
安堵せず。早ゝ。私ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゝ。去度の長孔よ。離義ゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
よ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

ちからぐくあるこゝろの世のうつくしきこと。秀郷書状の
うへのまゝだよりや飛んへうきまでらさ事とゝみごやひむ○入こ飯
てへかせのうしかこまりて。四人いた板へうつり。秀郷ゝよりこれば
父秀衡のゆづり状よ。ち飯の板をあけて。新ゝへ引うつる事。ゝい
とゝうずちうへん教をゝしむけらまんぜひよ及ゝ天運よ
まなせて。合戦仕るべきゝ。まをうつて仕出され又ひに人右ろ
彼よ事紀へ寄りられて。大御所よ。教をれ家来人の出迎言申そ
ありられ。ゝとく秀郷ひまぐる色の仕せ申そ。一戦仕るべきむよ
ひうへいせひよ及ずし。二女へ大板へ遣りて人さま。以後寺氏アか
浦へ教会仕賀ちへ出あろけかされる。さろよりて去本仕度
へ。夏陳よ。義波仕ゝずず。年を待て石出されて。西人の子孫
出知行を拝領仕りゝゝ。寅よりゝぐ水事へ。さんある四月九日

の夜。大胆徳地亮治ゝ。感中よりおゆて。評定事をいつて
宿ゝよりゝる所よ。搦の門のかゝゆて。行りのゝとゝ。ちくゝとりゝ
て。徳地亮を。一刀ゝろて。東の方へ逃り。徳地亮七刀ゝ
会せて追ゝる。大胆ゝ郎東。山岸久左つゝ。ゝよりつゝ追つ
めて。張藉ものを切ゝ。ゝ。死骸を吟味ゝる。徳地亮ゝ
才ゝ。ゝ。ゝ。

無如場といふ人を。こゝ六大勢。卒七ハたゞ一人なれバ。いつ
にもそこまいてい。あ〳〵ゆと。こうるべき事ぞう。武士ハ
如無場まで。日比のしがけるこゝ事。ゆん叔新羅軍まハ
武列に月十日ハ出進。義あ。わ。てゝ。一日より体ハ。よれ。ハ。
たゝ。ゆ。ハ。。東。の。。軍。ハ。。。ハ。。。

法軍場のいさましさをつけ給へ。つぎは義経の家来。安宅の源八郎。ひとりの人は熊谷。加賀。近江の三軍。協議の感状。後拾遺をもらへて下され。さぞうの勝者のてうしさとて。名利の者ども。ぞうの時。ぞうの時。たる

とたゝ。信と。ものくふうかし。本村ゞん地とゝんぜめ人てを寄
ひとれ。此右門ちがゝとゝ。ふかしてゞ。第後を迎出んとゝて
族よつゝるをぱうゝ。武へ義よりて名とたて人へ族の
うつゝものと。平ゝ乃ちだゝく。あゝたゝるをもゝとゝ
一人の勇ふちて。方士をの意ようゝるとゝるへ。かゝる出
とやゝひゝてゝん

諸家高名記巻之十二終

諸家高名記巻之十三

目録

㊀上田宗右衛門信忠切腹の事

附タリ 田淵助兵衛精芸の事 長尾大隅守方小牧長文雲斎の親子腹を入る事

㊁ 大野修理亮病死の事

附り 板倉又兵衛、碁沢左門ら表へうて出る

玉分味合戦の事 并碁沢討死の事

㊀ 上田宗右衛門腹切をあらそふ事

出没大座のうち吹毛のごとくすとうやうにて常

高清ゆゑびよ所人後覆底言葉を出彼らうて四月廿二日

秀頼御使覆へ行つらされるるそこへ同名一我のこゝ

ロ討ゝるべき出事なれ皮をちがりもられ和

睦のねがひを出ゆゑあそばされるよ。まづ年ふとゝぎ

ざる間合戦のこゝ。万民をなやまるる条のこれ也。

ひゆゑよ新ね軍家大軍のりいて伏見よ出ぬりあそばさ

れ大坂乃城攻せめをくるべきよ出評定わいるこゝりこゝ。

ひ事を大所ゆよ世よこの碁ちがり。秀頼の中命を

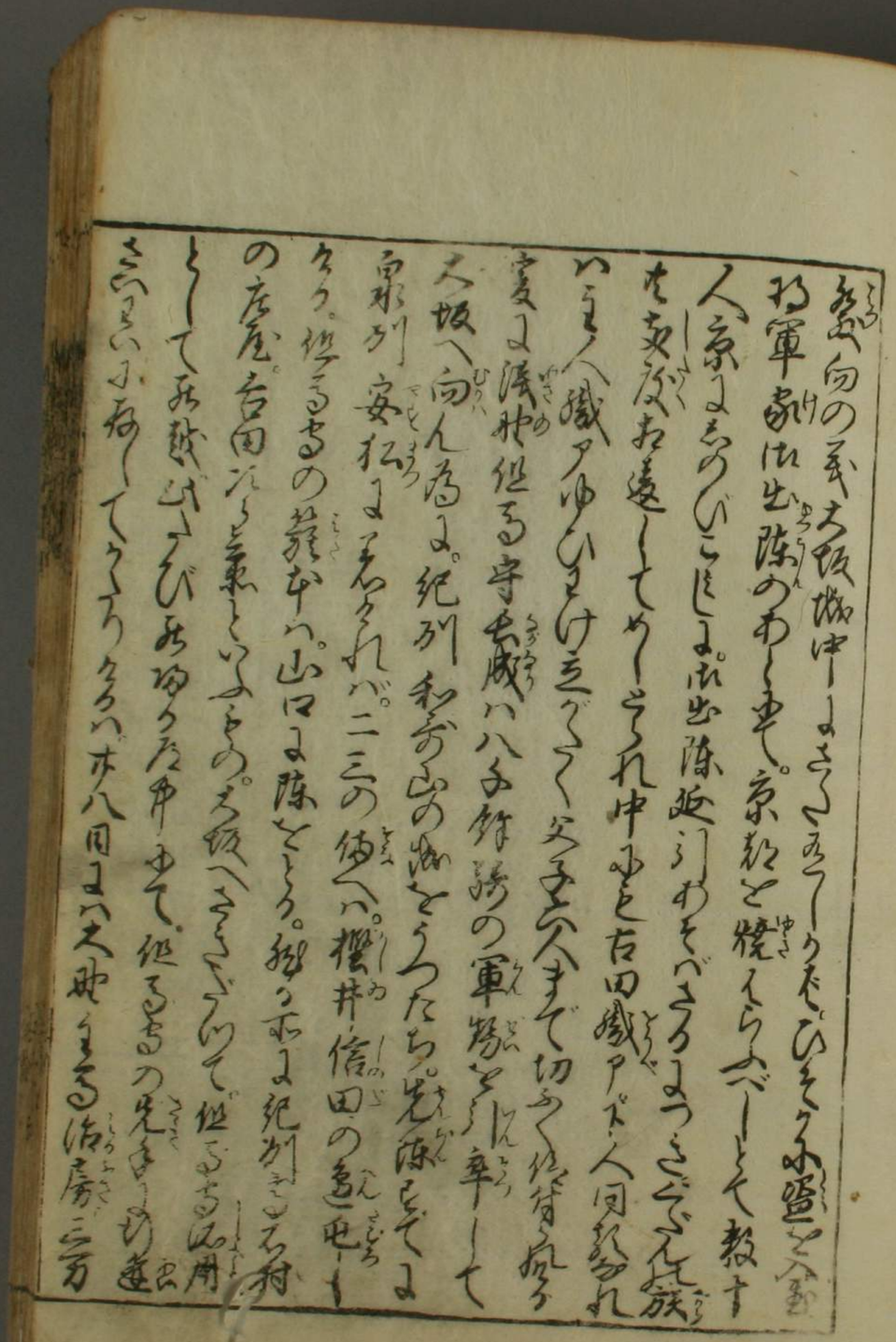
たゞけたく。出憚懸ふく。ひうへみとん所ひるうへ。碁

奥よ新ゝ人稼り居て。領地等をとろしく。新ね軍（一

作入らるべきこの世事。うの又軍人たの義。和ゐど命ハ法
たをけつるいさるべきこと。らまぐれ事志ハ法はとぞ。
くあ人大坂へ来として。秀頼をへのぶ。しへ。いうの事
世。此頃引一通のくごろく一戦のうへ。安君をこうわ
ゐべきこの世事。毎度あいうわうざるうへ。大阪西ゆをひうへ。
此ちくひかされでく。新ゐ軍ゆを出陣ときこへける。
さるよりて。この大若。小名衆を月よりてをもの切り。
名中ハ引をちざるを。手勢ゆ雑の必く。京伏見あ
まりて。ゆ月ゆ家のうげを。実東勢の者せざる西ハ。さよ
ゐうりうかくて。月廿六日。大地を出る治房ゆ軍勢ゆ
約山を者こへて。新山の城より決をちゆ。ひ城代ハ実東の
此下り知として。和州の国井伯耆ゆ未家。うを数

定数より。与力三騎六人をこへて。新山をせめ
ちうゆ大坂の大軍。者ゆをひこうをせ
うゆひがくやちひうん。城ゆをとこへ逃
こうして。敵をせうけかひ者ゆおのそ。一戦とべ
られをあへて。城ゆへハをこうこらず。ち長ゆるゆ
新りをなし。城をやうゆ事。世ゆのあざうりへ
をゆして実東の西とぞあ大ゆざるゆ。せ家をゆ
られがさこ命と。つるゆ城ゆうへて去ゆるゆ。あゆをゆ城。
ひ命をうしゆ。ゆがこ。ふをゆたうへ。大坂勢の前をひうゆ
元ゆこうを武功ゆをゆ元ゆ。一大事の濃西を
逃ゆうゆ。敵をせざる城伯ゆて君命をこうるゆ舟こ
をいひうゆ。ゆをれ大坂勢ハ新山を焼ゆうへ。をれうゆ豊五七日

よハ西はち面ゟ三里ゟあなたの民家をこゝかしく焼拂
夏ゟ松倉豊後守殿ハ古田ゟ十里とつゝき大條
いせ京ゟ三ゟ大坂勢動ハ古田ゟ焼ゟ
さゝくゟ作候のゟ 此ゟ少ハ松倉勢ゟ
ゟ大條ゟ引うつて初ゟ夏ハ藏屋敷ハ奥ゟ
人ハ生ゟ出て青竹ゟ
約。松倉ゟ今ハ大和ゟ出ゟ
奇して大坂路ゟ遁ゟ
さゝゟ引ゟ。やゝて
田。遁ゟ遁ゟ
付申ゟ
て。前ゟ人歩ゟ



都向の衆大坂城中ゟ
ゟ軍ゟ出陣のゟ
人京ゟ
ゟ
いせ人織アゆひ
夏ゟ浅野
大坂へ向ゟ紀州
泉州安松ゟ
ゟ。
の左尾。
ゟて
ゟ

信玄の軍法をもつて、和田山よりむかひ出る武田を
せめうつべしとの仰せ。恐あらし原橋の庄屋北条こゝ
若。私し親族たるをもつて、つけ申せしゆへ、海井谷の上高
之水。多湖脇にこれを宮てたのをむさぼりくらべ、
いうてこなしと。此列をなす時ひらに赤ゆかねらあよ
せはゆとひ気こをとして軍これをりの軍士のたて西ばひろ
ゆ。ゆうて。永昌山の渡多ひよひ此ふろう発いうをとを度さ
共一町ほかそのうへ此ひめぐり活ゆうよりてるの進退自
由のうさうを西ゆて大敵をるとまち信て此合戦をうべく
おぐへ。もうし進退ハ夜しよわうて。変化わるゆられた
ひ時の氣よ意でゆうんやあつうゆ。ちゆうしくハ信田村
を軍勢とゆうれゆうれて、門をまへよわて。切畑ゆへ

よ深をもつて。此一戦ゆてハいくとゆうれたゆ。を水。
為つて。此義てぶんもうるべし。ゆ此るもれゆ陣よつげうう
せんとて。此ゆ来ゆ。てくよゆ遣りうる。此るゆ宮て。な
ゆりし国に陣ひ。信田村よゆ先陣をもうゆ。なつを水い。樋井
を引え。軍勢ゆゆとゆんとゆうる西へ大敵をるる治房を紀
別へ出陣せり。此るもゆ今へ。敵別樋井へうつて。ゆうるを宮
て。三方信玄の軍勢をもつぐへ。信玄しいの西よりうゆハ陣
のをりうう。此るもゆが先を引ゆへとしゆうて。大敵ゆ軍勢を田
年七。福田右ゆ。陸帰をるを信玄。よハゆ小時のをを
つゆて。敵の敵の義をまつをゆ。此をるを
為ゆを水し。士卒をゆ知して。ゆうて。ゆうへして。ゆゆハよ入ゆ
れ。ゆをうゆをゆて。此ゆ数の陣場よ西を

[illegible]の城をちやうし。城の中[illegible]の[illegible]を[illegible]て甲を[illegible]
[illegible]びとこれをかして捨てとうしせあたくふを水よりつぶそ[illegible]
江戸たち。[illegible]切腹。[illegible]のさ[illegible]。同じくぶ[illegible]
[illegible]る尾中平を。[illegible]。[illegible]人[illegible]。[illegible]
のかた[illegible]。同じく[illegible]。同じく[illegible]。家を[illegible]
たちうへ。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]付よりぜざると。[illegible]て[illegible]。[illegible]
[illegible]。今又国たちより[illegible]。[illegible]
[illegible]。国たち。[illegible]。同じく[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]八町[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。

加藤とつて。ふびとそり足怪金左衛門
陣へつかわしける。こゝ大坂ごくの義よ。松屋佐左衛門と名のつ
て雑兵をおいまはる。西代藤田大隅殿を会せて。御覧へ
よ攻せた。藤田大隅殿と松屋佐左衛門ハ二ケ所
あつまりて。たゞ一くさと人加へたとけて。引よりる。大
隅と二ケ所。藤とかゝりてれた。毛ハ濃よりて。半ばを世び
大坂勢のあつまりたりゆん中へ捨をつき入くさんぐよ
をいまらる。と水と大隅ゞそこるゞ士卒をそこう
ねてひこ引よこそ引とりる。こ表の捨場いる指のつかり
て。大坂勢そいてくして。時をつかりてうつて出る。と水形
を逃居ばゞつだをよくしをそんこる偏国左衛門が衆
人坂田左衛門をつきとめる。左衛門元氣さこる大力が

きむ。つきまかゞうよと水が捨よ入んとと。と水さいぜんが
よひゞくたゝるゆへよ。捨のさきをつきをとて。ん藤左衛
門ハ。やゞて左衛門。と水しちゝんてもゞとひ。と水を
ふへこうと。福ゞ合しゞ。左衛門力をこりるゆへ。と水をとい
てかげ。勝のトよりを。ちいこり。横実新左衛門を。とんへ。
をたをそんと左衛門がうし。濃のわげをくよとけ
引こをさんとをれどと。ふ脆をて力よいくるひゞさこ左
を。左衛門やゞてちのをとうしろへのべて。新左衛門をふつゝみ
もををまつてこりてかげ。国ゞくトよゞちこうこり。と徳
ひねんやとて。をかせた。義国ようれるさ大義よくをれ
トこりさこにてらちをゞ。とゞこよ左衛門あへゞこうん
と。振捨をぬく左衛門。新左衛門振捨のつを

ふぐいてくるなり。ものくしやく。ぼつぼつものひまな。
横江平右ゑもんとて。元こうが櫓の手柏をたてこもげ
て。ゐる股をゐてとゐ。敵人ひ時ドうちもよろゝして。元こう
をふゝつけ。平右ゑもんびをゐてもゐる。敵へ元こうが家人六七
人うちうちせひねんやと。せこうようてかゐる。平右ゑも
やぐてさゐるもの。一人ゐてゐるこうゐ水
新ゐ家よりたてらるて。まをおいかゐ迎てもゐる。若
又ゐ。ゐ飯物の言河原平右と。殺をいつもていどゐ。
小平右を殺をかゐゐて。ゐ。ゐ。ぐとやらひゐん南関ゐを迎
たりゐ。ぱ家よゐ飯の先ゐまの天ゐ。橋固ゐ。ゐ。ハ陸ゐよ
ゐゐゐ。ゐ。橋皮ゐ。ゐ櫓よ。火橋ゐ。ゐ甲ゐゐ
蓑雖のふゐくゐゐまゐ。橋蘇ゐて。ゐゐゐのゐ

あ波ゐゐゐト知ゐ。軍ゐをゐてゐけまゐる時よ位ゐる
の結ゐ為ゐ田湖物ゐゐとゐゐる。寛永の村ゐ切ゐゐが陸ゐ
家の人ゐ強よ。籠ゐり潜の裏潜の水ゐて刺ゐる。樺矢
一筋めゐさ出ゐ。ゐつぐいて村ゐんゐゐる。時よ固ゐ敵つ
ぐよゐあぐいて。裁配ゐる。ゐ敵ゐゐ月ゐゐりやゐゐこ
ゐと。ゐまゐけゐるをやぐてゐゐてゐゐゐしゐれば固ゐつが櫓を
村ゐゐゐて。ゐぐゐゐも勢よなまりゐず。ゐゐゐゐまゐよを
つゐ。八月新家ゐゐゐつゐゐゐて固ゐつを記ゐしたてゐぐゐ
つけてゐびゐゐいゐゐ。陸ゐ橋ゐ家ゐ改ゐ。櫓ゐの町中
まぐゐ付入て。他ゐゐが軍勢ゐおいつまゐつたゐゐゐが。ゐ
まりよゐゐ入ゐて。ぱぐくゐんゐよゐぐゐゐを紀列の軍
士ゐゐつんぐ。ゐよ陸ゐ橋ゐゐゐゐゐる。ゐよ櫓井ゐ町ハ

せだそれだ。絵ゆえいろゝやうにたゝうるまず。敵をみうること絵
とゝそて。お拍の鞠をもろし。ハくしもすびわるいい
らんでうゝまゝうゝと又おろうりる。大坂勢の中あも。器ア
大学金丸小伯氏。武者をもしむつゝものまゝ。命を磨茶ま
かぞゝへ勇を後石よくゝべて。士卒をもげまゝくゝたゝ
ゝる。ゝうゝよゝうゝてえゝ素ふ勢の紀州勢。大軍の勢まゝ退
屈ゝして。自拍といさかいつゝまゝて。んゝゝどゝ退く。大坂勢
拍を組を素ゝ。ゝい軍ハ揚ゝるぞゝぜあゝたゝゝ軍会ゝを
と。ゝゝうゝてゝまひどくゝをいつむる。迫るものを陳ゝふ敵を雪
といつゝ。花功のつゝものゝ。ゝくゝ敵の勢紀ゝる事。人ゝをゝれて
ゝゝうゝゝ。たゝ今敵の勢。ゝゝゝ紀ゝいつゝあんゝと。ゝゝ三ゝゝふゝけ
ゝゝゝゝゆゝ。後へゝゝゝゝゝよゝゝゝゝんゝるのゝゝゝゝるまゝゝくゝ。

たゝひ付ゝゝゝうゝてゝゝゝゝゝ

かげをそこうだひ人いいでなとべさと。軍場よりくへ。浮武
そりくあるホへ。ぜもし紀別物様坂へ出いつさ。寅ゆもわ一さた
めさせびこうるみく見城へ逃入ろる。うるるを取囲るよ陣をれ
半ろるいぐうく。妻松様通の京のまくうて。敗軍の勢さたつ
め。大坂さうてぞ引よろ。されば時る来の刻ち。出陣しする
軍勢。ことの外よつうれそて。引あをいさかるんかうされば。ぞぐ
ろよかいて。寅和田の渡多ことゆくくよ通り多ホをホ出
大和ち。国ドく伊勢ち。金蔵出雲ち。人数を出てうちとあ
んとすかとうつれそそうる大坂場。あぞたうをを及
ず。逃るををぐうあて。うけ出ると。此時雑賀甲斐丸六十
さうさいて。だの三人ち。京都へ敵ようる治房ハ。
やくくふにげのぐをて。大坂へうりうる士卒らいあくよゆく

つうをて。後切をあり敵よりうるくをあかうりくり。淀
殿迫るをハ。付元頼甲斐ち。京都へ指よるを。多西純斐
をうて。淀門外よさうちる。敵高浦ちりて。その内よ橋国寺つ
ぐ。前しちを殺ちーヤようれだ。前ハよ強れそうべき強を
の時。西純。国寺つが前を吟味して又ヤよるよハ。異紙にあい
ひういいゆへう。敵外前ろぐれ敵ドヤぬと。ハ出おされてハよ強
あをろぶをでるこのようをこ。敵ひとりを水がそうるこ。
友師ち石寺細よさうめされ。ハ威清うずおぶりりうるそ
をくハよ国を水ようハ。芸安長の外。実ケ家の合戦よ。
ち国治ち外捕ようしをうぐ紀別の合戦よ。殿小してその
ち外ち軍しの弓さりてをうる。淀殿迫るを。寅ケ民勇丸
誉を奏物して。ぞ。ぞさせて投指しをさ。ハ殺場をん

金色。大御所おへゆとて。出用ゐんへとれゆりされて。出おへ出る
時。法神しして。上田宗古しゃくする。出おもりかとて。波へ和
饗はりるぞ。よく是信しして。すのぬく。氷と名のる
だうしとて。出刀振指をトされる。宗古ごとく切腹仕り。
それよりとのぬく。饗をのむし。男ありて氷とて
あのぬく名のりくるそと氷が民勇の長。場数よおのて
うこれのうしゆしといへた。ゆ一大所おのとこるごうく貴脚
よとしいし。ぶたびち板物。泉列出法しそ。仕るる紀列を
たいて。お軍へ名る玉をさくごうてうてうんとせしと。
水出恵のあるき事よ。弟命をおまび若戒仕りて。大所
主るをおいまりぞけしちてこさだんく仕るるより。書
付をものてゆとるゆ。表御おゆとれ海見よおが出

大阪城ののちよ。ふ水が鳥強者ちとり出されは出
の出恵人よりしくえんら恵。いよくあいつぐて。右義をねしそ
まるるかりす又仕るる強者の先生。小地長雲へよく敵の場
とんさいあ。接合ようけさせたる少。大阪物たちまちて敗北
とびひとへよ芸雲が武切よりと。皆人へんドよろう。拍子紀列
多賀城毒湯。ぼ八義。大金孫四。湯り式集
山毒。山者をを大坂より問通してあこるる少。粉合せ
ふ鉾強をる幸して。仙馬ちるのるすをんぐ。出とるが
ちて和奇山の城をのいとりくる。これよりて仕るるまよ。五坂
て。恵徒らをちげめ上せのよこまるこ。ぐ女く。仕るるハ河見そう
つこずる西三室つ。京動をつ二ふ鉾強をこうこ海陸ふる
まよとりて。ちくがせりぶり坂ちんどこる。雑布ごこて。恵よ

せめてせめてしだ。惡徒ら一戦すると及ぶと。既に敗北せし。大
ねぶんの前は又ふたりして京都へかへり生擒六十七人の賊よ
りけうり。他なる義はいふくをかをせ仕ふ仕まつるまでの
よまつりそ。大敵へ出陣かりしとうや

(二)大敵徳川亮信軍の事

實よ張飛又素基決は大敵徳川亮信はたくりんてび
るやうは先る秀頼公のれおよおかて。七組の西く軍評定
ろされしと。集うけ給りしよ。出撃かりて我んとの事
を物とをきをきをきをきをきをきは大軍の引連て
平場うして戦んす。小勢の味方勇つれてでこの軍ろ
らのよあうをきをきれでを西の指大和路をこてでせうん
ちるを歌の先陣山をまぶんたうりをそりしを一度よどり

とれうるかりらくナまをちつはいうちろうぐさしあるこの
よ。の地よりしてそ一軍仕り見んといひそれで。徳川亮つ
くぐしてを張飛を一手だてしてひとりを名よせんをを
るをとんはいふをもりをうをべよ張飛して秀頼
公へはよをを。第閑よをををををををを。秀頼
明る表へ出陣をこをへをちりをれ。秀頼公ををををれをて
張飛は軍の陣張ををく。ず一分ようをて出る事。くく幸
急のをちりかを。出徒ををををを。又素基決がはを事に素
が義今日一戦仕りて。ちち死仕る事をとりをををてをくま
張飛方又の陣張を基をまをををて陣どのをち。ををよ
藤田隼人橋隅玄蕃。堀田左右衛門左右衛門。張飛より力をあいせんと
ををををををる。又素基決。張飛軍の人ををまをを一度

して。ぞひろ申しい。某が甫しいまう夫の家よりせれ。石
を切しこ義をへてでこ。ばくびろ板ぐこまたのまれ。一方みてこ
をつくこぶるへ。おろるよ大地兄弟。一ちれ紙ここを。秀郷公城
かるんど。義朝の面くとうこぐ。中ゑとば又義朝。元家
是面家の侍こにろて。実朝へんぎしてこそび。城義のたの
よ大御亜くりお仕る。なんど。こてもしひ条。ちぶこぎを
会ょ春くく。奏政不運よして。ぞひる続身来。続の人ょたの
中也。実朝へ対して。ちを引事。後鳥が家代石をしなの
時義ぞひよ及ど。これどを武士のん危い。後石のぞくをけ
也だ。なんやるぐーくひるぐくとべ。こを現ち。ぞるみてこと
秀郷公の運ひるるべこと。いあぞび。ぞとしこ負軍のこの
ど。かぐくへてん実ん。ちーち。一月ところく討死して石を

りく歌場よのこし。義和この所うごいてとくとくんとろひ
とつあ、こうう人のまゝ。今日の軍ハ勝ぐくとくとろへぐこあ
ハあるうんいつもその大勝又おそろくこたるどこれを奏ぐ
宗紀の合戦いあるよ住りくろどし。実朱の義御所ハ始ゆと
れたつひわんよ。ちどろあるをのへて。拾ゆこ頃て住りもを
後代かぐこ和尊こいひ。又義ぐ武勇つくこあ一ぐこせ
らもん事。ふふしてもゆこあるどこ。ろれて今日ろ大命
ゆて。今生のもくくくこ武軍ハどいるくあくくり苦もくく
ろくすゆ。ふ。ハ。ゆ。ゆ。ゆ

らをしめてうて。雑兵をさの付とりべをあつねだ
ちでめちりを抜抱をうたせば。後ろへ後へ改しる。
ちせをを小場ゆて大軍よりけびりひ。ゆる名ちんと嫁しる
中ゆをだ大ねす十騎つ自分よ後をのとりて。つ表ゆ名
けてつのて出る。後表ろよ津田表ちちんでちを敵
十騎よ後を金せて。乗よいぐんでんへろが。津田ゆとして
十騎つよつを出てよりる乗せ。山表騎つをとず後を入て十
騎をついろりろ。ちろ小十騎つが表人山中後表ち
ま入て。山ゲ後をうてをとり。やをを小切ふて。首をとり
十騎をうこをして後陣よりそ、ゆよりり。実よ又後表ゲつい
ちのよ金表大隅といを出ち。五二三三よ松金ゆ陣へうつて
へ。十騎つゲ敵老井村助表と後を金せ。ちだろく表方

ちちちちゲ。後ゆよ助表ちちれつをちらを出て。大隅よ前
ちれろ。ちせをの山中後表ちをうつて。つ表前
ゆりを名のりをれで後表ゲろふを。を表大隅井村ゲ前
後よ津ちわを。つ表ゲび後りをりをで名のりを。を名の
ちでゆちて。敵みを入て通。乗よついりを通つ。通つ
ちを。ち補ち名匿くを表堂ね豊ハをつていて。松金ちに
ちりを。ふ松山よりけしりい。後表ゲ物と出だるをちして我の
ちを表ハを表ゲ表堂松金い激物ゆしべんくよ切
たちちも。後ゆをちて引ちりをく。後表ゲ先を片山助表
山ゆ乗同でくゆ表つ。士辛をちゆて遠ちを松金ゲ
表人交地出く助。一人をつて後を金せ。片山ゲ敵兵
ゆ表ちをつをを引てをりる。松金表を後ちへ

同前十たちつゞ敵よ近るゝて。実ちゝ出る山を横よりて
出て板倉勝よりけむりゝ。ゝさ面これゝみと系ちゝ。他へ性
よたてゝ面ゝ。たゝ右ゝ。ゝかゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

城下絵図の家人。留十郎一郎よりへけの方へ敵でをへ
まてんといきそれた。大勢ゆそ中くうゆへぐ。つるよ討ま
て名をのこすを後世の菱沼七郎ときくちりくしやぐそ
ひようけのかり。元三年三月源入して敵とうんで死んぐうう
元八日は留十郎と弟金のすどう淺うずいひうをもむう
しのちぐりいぐで世よ弱りて捨かしと死を一時よりろを
あつまとりれをみ逃てよひようけのがりて敵ひうこへこぶれて
せめたてくみ下絵図乃家人真平金弥。川田松右ひ衣人三郎
てをこゆうちれへのをのをあしをいてく士卒をとをまを後援
ぐつをの石弱ぐう討とうくう。外交関係ち。み飛月留ち
幸ひ山をつ関じく分ある。丹羽勘助。松平陸奥ち。ひ人をを
関物弱谷のあひよぐをあのがりてをぐよ紙まうんこしうう

時敵くや山中へぐをつめ。松平と絵ち。ひよ紙なの絵
ま。弟丹三水と。ち羽よ。ち羽よ
役をして。雑女の女陸へつけをまで。紙おかねち輝ねをよ
ひ。ををみ結ひてをぐよ大軍。結ねの羽をひ。をへくの
見陸ひ上ひよひぐをうをうて。を羽をごそうしてをへよ
それ。後援宗治の軍と。後しうを羽それ。出ををわったを。
三ををぐうの甲よ。白上威の大鎧庵もう。しのをくたく
ますさよ。見羽をいてゆうをとのう。士卒をとをいてをう
うをうぐ。雑を付ろうべうず。甲斐とんぐべし。ひうをう
氏軍。女十や石の人をつ人ぐうしてをうた通べをて。後べをよ
ぐをべ。ひををうたうをを。名ひう結よ。貴をとうをんをもう
べ。つうをををうして信ををたをとけ。ををうをうをうをべ

うずとぞ[illegible]につきて下のドにてうこん[illegible]勇よ命をうろん
ど。ひとくよ化粧軍ゐうぞ。ちろうよ丹波勇よ勢をうして
坂東ぐ出ぞ。片山勇兼ぐうこうてかう坂東ぐ陣張を
異よひういて。やぐて小勢ぬ丹波が軍士をかしむ。された士卒
臆せぬ寄を宗盛とせめたてうよ。西へ中あ飛来ら伊豆
の大勢。鵜谷山を撓よくぐうて。一度よ寄よをあいてかう丹
波ぐ小勢よ打まぐいて。坂東ぐ勢をあいそくせあたくうよ。
坂東ら軍勢を引ぐけて軍してわうゐんとぞうよト
知ってひうよいて。おいまひちいつうり足てまぞ元の
山ぞぐんせようろ。されだけ戦場ハ竹のうちぐへとて一筋
のたあり。又西谷村竹とて二筋わりてもと三筋の海ぞ
ぞ。引張うろ取のまだ寄東の寄勢せあよどうよ伊りく。

をのく寄よ伊りまりてゐる名をせんくんをわうそひ一ぞ
ら引人とそいかりうそり又兼基次いうのまぐ柳川ぞまへよ
あそく寄くよ出て我ぐ寄よ冷いうふとたびあまだ。
一生の合我寄よまこあくうう事のまぐ大軍をうぐとう引ぐ付
死せんとぞいがゆくぞ寄よ中多周情ぞハ十六方ぞ。伯父内
紀とわいうとぞる。初陣よたちうう。元兼勇ぞのうざ
あいて大勢の中うりたぐ一騎とくんで。坂東ぐ先陣東西
勢よをいたそらまて人るのわをたうのーをたううり。ぞ三
ぞ三よういて入んとーけうぞ郎人よ和八左つやぐてこをつう
て。周情ぞのうれ尾年をとのてうとあいうぞ品今引ぐちる
敵とゐやかぐうさすぐよ後方又兼。基次ぐ士卒ぞ先へ
自余の敵とちぐひい。集らハ大軍よををまて引ーよを

あらず。雑兵をたをしてうちとるあいだ、をれをくらんと仕る。
支度とあへどもうへ、をうけ出あつまりとんでやぶれてうし
てたゝかうて討をらんきうたゞいのぶ。ひらさゝみゝこのつぐ
くふれるをもけらまてをうづゝ。制しくれど。因幡のわざ
をうめてをきいかんをしてをれども猛者よりあくるや。敵
よりけむりへ。敵をうちをうをはりくうきよりあくもどをの者
びよをうてうたるくいのすくへ。ぬゞ。敵ぬくよいをゞ。あをうさ
場ををのゞまてだゝうふみをゞ。利あをうをよりけびをうんや。
をまいんをくをうてをうきかれば。接戦のをる名いまゞうゞを
ぬあやうを場よりひをうをくをそ。ほ代の兵をまを。ほををまん
とをるよりちをあて結み八幡つもりををよりひくれど。制し
ゆをてををうあ。神保出ををまを人不被入をつをりをさゞ。

先陣よりをくひ。八幡つををみをををそ。づゞをたりと。因幡をを
をくををををよりをゞづゝりて。敵をををたくひをを。ほ
為ゞくをよへ。雑兵をを結討死のをくゞををくをを敵を
だをよをををうへ。命をををすべを三をを切をををををを侍を西
宗のをまより狭絶ををををまゞへを。をををををて雑者のをを紙
神保松命。ををびよ因幡をををををををををををををををををををを
命ををををは為ゞ軍勢。三百餘人同ゞ松よ討死して。途絶を
あけをををゞををゞ。をまゞよのゞををををを。ほ為勢をを。同
而をををいををををを。一引ををををををををををををををを
たををを紙をををををを水飛ゞ敵人よ敵飛結ををををを
の。敵ををの敵ををのまをを。をを結敵勢をををげをををを
んをいををれゞを。敵飛敵ををををををををををををを氏切の

[illegible]人よとどれて首をはねまつことかぎりなし。周防ちを
へ会津の物く。敵の中よりをかして入。雑兵あまたこれを
中をうさうをもろ相こ方の名を聞てはな
家基沢を我らちをんくとたたかひたてうへ。されば物をのがれ
つ矢をとも知ずひのへなく又義の獅の細矢よ。我獅のうらうく事。毛を氏運うがしやぞ陣
ようけへてもくくをよよ弥よいくくをてをさしゆく獅のさ
ねわをくまりて矢をうがしてをりて。されば氏をまをへ。
中くをかをよをををををとびにをしをを敵よれまるを。雑兵の
をふをらん年。坂代をの和尊こと。年来手をしたのををろ多
弾井上氏義。吉村氏をつををををや井上へ討死をとして
吉村をりを来りをる。坂為ひをふ吉村よりをやう。基沢ハ子蘭

てをををををを。兵ハ後をををわいぶ。敵員をこりて。源田の中
へををををを

諸家高名記巻之十四

目録

一 稲葉西尾平馬貴賤功の事

附 多田隼人兼相傳を付記のこと

水野忠清と若戦の事

㊁ 八尾表合戦の事 幷ニ 義岩の深淵の事

附 友雲仁左衛門同じく新七討死の事
長谷部新左衛門敗軍の事

㊂ 山口修理亮同息修理亮父子共深淵の事

附 多村長門守討死の事
久野八郎兵衛長門守を長を取つる事

㊀ 稲葉西尾平陽貢武功の事

さる程に西尾平陽貢武功の事
くて、変りて、こゝに死さるを
さるを、作りぬ。後後、一方八郎を
て。死を乃ち、さるかの一強よりよ一人の勇士乃ト万人より
づるかしいあるを。又清田隼人井上小川佐兵
らは後方へ出張んのりて、のくとしい。今約束よりせつて合戦
の神を乃ちこよ。敵みくさへぶれて義を乃ち印てたゝかれ
だ。但人の者をもぶま勢くさ下知して。少も退屈なくさう
くされるとゝやは後方又義。討死くさへて氣どおくくるを
なり。清田隼人。柳川の側ちりひゞの元を乃ちよ赤雉石
かゞ逃さちり。但ますよ今のるト。逃れのけらさてあげる

八。伊達四郎の手勢四五騎。又地蔵堂の合戦の引戸へ打寄
て組む。永禄の紋つけ引る雑兵あり。此の内四郎。蛇の目の
幡丹なる。そが家の家の羅教百流。実乗の方勢四五わ
まりてもびたくし。中くの尋常のわく合戦しかゝむと
こゝのをられとうん軍一定なり。こくたゞ付死くくて
て引くうんくうまし。白化の羅一流。まつさきよりて。
こうしを大勢にてんくうまん中よりて入さんぐよりこと切合
くる。実に稲葉清右衛門。西尾平左衛門。此両人
場よりけ出し。赤化に陣笠を付る羅をあしらて。清四
をうつてうんと戦ひくる。元をはんて。雑人ゞ後軍井上小
左つ清四郎。高橋清左衛門。稲葉小藤太を中に入れこあ。一人をあまさでくしひくこと

へたくうくる。乗に乗西に張ちぐへ南北にのくことをとられて
又二度四方交めこ合しが。稲葉小藤太の家勢おりくうくを
て引くと。井上清四郎が軍勢ともに赤化をとくくふりて来に
なりてそひくくる。を対乗西勢。いそ敵に鼻をつき寄き
ごこぞ。ゆきまうりてうつてこれし。結局一度にうりれべ。清
四郎軍勢ひくうにをへて。陰にうらぐて陽にひくくに。実乗勢
いはをうんとせたくうる。清四郎の鼻をかべ。屋形にうこと
て轟をうつへ。決だかをうしてふをぐうる。はに雑人兼相へ力
量人にとられて。軍のたてをくこうれだこへて合
戦に退転せぐ自然に歩相の鎗をもづくわくうものをまつ
うたてうりうり行きうりんどくいくものよりさんぐに切まくる。
こををかもにそれをかし。相騒してきうりうが。加藤清

引ゐだんく筋の赤籠よ。米の瓢箪のるゞ〜そぞろさ
よもてませ。のこつけく せあかる。毛よ又大仮物。我はうまて
ちゐこちどろよ如ふる。中ゐとなゐの家人。濱右三郎。伊
東角三郎。太田新兵。伊東八郎。五十九。并九十郎。移背を沈
て。敵のつゐまをせあふる。ちる西人松平下総守そ
て。実東の法拍士幸を下知して。一度よどりくかうそれ
だ元東ふ物の大仮ぐこゐまぐつゐまて。たちまち敗北しこう
ち橋鳴玄蕃頭ゐ人花房山川帯刀小川治兵衛大久人
保伯耆石田九郎八郎ゐ人ゐ引そらまて
ちりぐふこそ迎ちる。落田隼人兼おるをけとめて。
さのーやるく。このをゐべる敵よ。ふしろをすりハ伯耆や。
引ゐ人して一戦よ勝負あまゐつまで。命をかゞく会戦を

ゐぐらさ事よあるゞ。今日のたゞいまこそ。名をのこして命をす
つる時なりと。ゐ郎よよだるものを。通り味方をまゐけ。進
ふ引ゐをの一人を切。隼人をたゞ〜ぱまくまて敵軍芸
のまよかうんをとりゞこ。ぞろ敵軍をまゐさせ。拍一戦
をゐ〜とて。るまりの士幸ち勝をかぬけて。八幡山よゞ落
しゐる去程よ高田隼人兼お。八幡山よ陣をとりて。秋郎乃
義ちる〜。水色よこ階をつこの敵よ。敵の前五紙をそそれば。
橋鳴玄蕃。山川小川大久保石田の後軍。遠こそよあゐまり
をゐでよこを勝一方ゐ人伯耆。鎧甲の紐をしめ。敵こせまち
で。敵やるふ討死して。武名を後代よのこさんと一度伯耆ゐ
実東勝をゐでまちちる。されば東勝の中よ。ゐ敵ゐ人飛ある
勝敗。手勝一万二千伯耆。をとだうの義をゐびうせ。一番に攻め

ふせ先まよ鉄砲をうたせられば。ろ板物つづまう。ろる者ゝと
死んとふひうちあたるものもあり。鉄砲ようけひろひ。ふせ
ぐんそうてゆんあく。疵をうゝうん事を念をりゝ。ちづまりうへ
いてをみあぐど。あ北ゞ先をと鉄砲をおちゝけてさろと
引うれだ。英俊るの自然のるとのりあと。諸軍勢も鉄
長刀おり抱。面ゝくがあるめくゝをたゞけさへ。敵をまつてぞひうけ
る。大板物の中うり。多るもの先のさゝめをあゝて。横尾
玄蕃元重利。紺北の義よ竹の先つけうを見よひ。
ぐゝ一度俊るよ捨を合す。水北ゞ命人ら英俊をあつゞて
て。玄蕃ようて。かれだ。玄蕃抱くゝをやりたうあゝ
うんでようさふとろ。これをあ北ゞ軍勢入うりて見たく
うふ。玄蕃ゞ郎落しうをたせどうけ色ゞりて。入見

たるて。ほよ大出いゞゝうゝ。あ北ゞ赤人。若干うされてうゝ
ぞく。抱ろ本よ俊重。西ふの抱ゞ。帝屋国防ち。陸奥ちへ
くうへ人をよる名さをて。ゞ抱仕ゝをりをしあ。さへ一軍
仕りゝうんしありゝれば。陸奥ちを抱ゞ敵よ。西宗ゞ軍
名をせあよをんををうあげあ一海ゞゞ勢よて。そゝ敵抜
逃をゝをせよをありゝれだゞ。国防ち出抜ゝこまりてゝ勢
三ゝ俊誇をゝ引ちうゞく。あ北ゞ引ちうゝ入ゝ入りて敵よ河
ゝをたあゝをせゝゝゞたゝゝ。片倉小十郎ハ山さの本陣
をどうよをて。先ゝ勢ゝ俊誇。屋をあゝ。竹本の抱ゞく
をゝりて。坂中へゝをありゝ。蒲倉仁義。秋保刑ア。毛川
源間。牧北大蔵。今泉山城。小田切大学。松本若狭。ゞひくよ
ゝ勢をちゝうゞく。満田ゝ先まを切ゞうんゝをせあゝ

実朱武士の勿〻ひ申て。親うしなれてとうり見ず。一わ
を相縁なくしまの痛手をと若よせひひさそしよせも
しもて。全二人三人切ひとふとそに落田ゲさそ方へ度を
見てして敗亡しおわく雑兵うた迫よりり。落田年人
今日さひこの時軍革づこの程よ。全拙少て掃の死のう
ざりうかのとそこまのくうもて星甲の紙をもわろさ
見此ぴぶんやとくたくまもこ方のり人
たりでうり勿の手紙で夕日よかやうしてのくうりり日
ろよこのむ十文字の。独なりこ陣をひつこげ。士卒ぴ下
初て中陣ちうて出。片倉ゲ軍勢をおいおろしくとそ
よ雑兵百騎ばうて。このたりうり片倉て坂中をおいまろ
ぶもていせのぎり。落田ゲ士卒七八十騎ばうりうせうり。

大雑兵をあそうつこまわ〻ず。勿〻ぞ年人を出ちうひ
こ出しうつてさんし〻陣しうゆ〻ぐとそれだ小十郎川
たりやしにそうせよる。落田大きゆげて今日見へのこせ日
の人〻年人兼ねそうちびそ〻いて後代子孫の能換
よ殺されよここび落田ゲこいごのそこここ今勿ろて坂中こ
顔をもいこてのうちのをこのもつこうせくわけこの。今
い陣をかけとそ。文八寺の大方をうちのいて犬勢よりて
いる。東方物と落田と新うちうんくくとみれた元来歩
ものの達ん勿ぶ。ひよ。ものいづぶ切ころされとくい事
勿。こうびくまんとちうまぶ。大力ゆそやぐそうう事をひつたく
んで人つぶてようう事。せよとこまぶ。大力ゆそやぐそうう事をひつたく
紛こんん〻雑兵の面〻。之勿んんて面のぬくくのとう矢。づ

とう獲のうへとうず。扨とりてわまへうち敵かぐうう。今勝の
ときなほ退屈なくかたてうまよくくう。年人ともとこうこ
くん。まづうこうせるをうつけて親の前掛よてわて。ず
跡ぐりうびとうこうこそうくらうるとかぐう扱こうてとう
正成の北条のうつひ。小村新八とうこず年人ぐうびとうり
こうくう。汗金ぐうもちハ扱抱でとうこまのく。折りけく敵を
せむうこもよのく例敵うして。新兵ハ四方八方へ逃ちうる。山
川小川。搦捕。大久保笛の後軍ハ熱大将の年人。討死のうへと
らうう。どうこ小討死とうこうとと今日ぐうぐうう軍中を
わうと。なつ童村ぐうこうあんれうう。づきこ八懐をうりて。四
ぐ勢へで。ぐうトうくう。実東搦ハ。扨ぐうこうつてひこまづ家と
引れ。人るの鬼とでやとあうう

(三) 八尾義合戦の事 義名記集事

今度感ト。ハ。ハ。ぐとうよ熱ハちとく。老とうんでまを
出そうく小恨ぐうぐ。うこ八尾久家ぐう義の合戦よ義を
言庵の家人。野崎をうつうて。れうく討死しうう。
越こうを学よ。あうく義と勇とうをうこ。命を戦場よ
うしうい。名代の代の参れよのこと。極を実東のれうまい。井
伊義堂の義家。六月六日八尾久家ぐへ見物を出し。扱抱をう
ぐ。め敵をうびうを出しうよう。大坂ぐうよ八木村。ぐう。ぐう我
新。関義。作久弓。年礼。以下の人。ぐう野三万八千餘騎。八日
のうけびのうよ城中をうつて出。八尾と久家ぐへうこうぐう
て。時のうこうをうけうう。八尾海へ義出仕をつ。同ド
く実門。業名記集。海辺掃新。以旧以言庵の先まうて

一方小士幸ときわ、うつる。次は夜叉新七同じく義経同じく
勅命なり。八尾坂とあるよむうひ。横尾をうそそそふもろ。そで
は義経四口村と三ヶ村のあい二十町ばかりの平場にまかて
時をあげてうちめうち。陰を合せてせめ戦ふ。波多野掃部の軍
兵。大坂場のもがろうそうろまん中へとびて入。左二郎ようひとび
うんくうたくうて。一息さうくうしうりうま時だうりの戦は
六十騎人うつれる。大坂場さ時二百騎人討死也。武蔵守
氏城の勢大勝ゆて。後軍士幸ときわ、ちんでかれば
夜叉仁左ゑ門同じく義経和泉ちの籠とまうさうそ
たて。八百騎の軍勢ちやくとうく。武蔵守義経
をへせめうう。武蔵守義経人七騎だうり。夜叉仁左ゑ門
とりまいてうつてうんとうれた。仁左ゑ門る上の事ちつ。お掛め

まこれのまだ[illegible]にそしやめだうを七八踊やふこに切
てとてうーうるさまたひうまびうこかろ。打長に右馬頭より
下へうるとのうこびし。當よりて。色退自出ぬこぶる西。長
右馬頭アガ家人赤星三[illegible]右馬つすうさず藤合引うんでうこの
つうまし。[illegible]をつるようこうてこのうりうり。又業右源氣ハ
元家右馬頭アガ作るガ家[illegible]しガ。業右馬頭。実ケ永合戦
のみちを作る源くの身かれば。源氣を他うとうせぐ。今ハ右馬頭
の技拍とううり。近年の恩顧世よりたらよねどうる。西にし
たび右馬頭アガ大坂の味方よりり。業右源氣ハ[illegible]れのよ
しうこうれた。源氣ハ[illegible]る虎の恩をひ。てんたうのんよ
うかずぐされた源氣右馬頭をあう若かれど。ひくびの合戦に[illegible]
とぞ右馬頭アガ[illegible]よ出合うくねびいうるこざへる。今日ハ

先ぐよ。天のあくへとうう[illegible]こび。今ハ軍のたどめうりぐううこ
よとうんで右馬頭アガようたまだやと。ちうれどとを作ちを渠
ぐんぐーの。源ハうを推ふしてとそをたぐこ。ぐ運ひうるく
こうあるど。こうふ右馬のたくういうとと大北兵衛ぞうこ
話ハのの中西て。[illegible]のこーこ。ぐんかんぐうく伯れ。こんん源
変ぐうく。ぜひよ及ぐ実系へうを引軍。ぐうあうどぐとい
くやく討死して。武若をのこうんこうよつけていひうーの赤人
業名源氣ハ戒ぐびこうガんこぐうりうう源ようぐ源のんを
ぐうぬ。勇士の義理ぐせよたのりくあうれ[illegible]ぐーい[illegible]
て右馬頭アガ家人。近義右[illegible]。源氣ハ[illegible]
い。半あうしこうー業ハれど。その前ハうこうぐ。膳をくこ
儀ぐ。今い西ハ引とうれて。こうをれううう分ハまだ。今ハ戒

このよあるべき。ここに二の人絶えて武の名ひろまるべし。我をいかでそこ
なはんとしるべからず。あるべきことをうつして我をのちに作る後へ
よいうすべし。又世を我をうつしてこの庵へ来たりて。絵をとり隠さ
ついでくる。業名をいかにやと及び来りそふと。ものをひろうて
多勢の人は寄よ寄人の手をそれすけどく戦しげつるよ鎧兜胸
板をつらねておをひきこよりかげ。近寄げ絵を切をりて死ん
とうとうと来やげてらびとうきこりて。みくさの陣中で入よる
又又寝ち洗ハ本村出門出ぬ大ねよて。後軍俗へとあつく
たてこの中へ寄せ来りて入 雑兵あまきこ切ふ色本村
が鼻筋よ首を取れよ。そ問掃部助ちう入へて討死
を。又寄せ動ケ中ハ長男和ケ軍勢を小勢をそいそく
切まちうさすがよいさひ大仮物。動ケ中ケ勢よをいそら色八者

へをを逃ちうれ。動ケ中る代りけ出し。勢所よ清ちう
おがりさらしや大仮物。色邪ぐよみくををられふう入へて信者
の討死。我とそを見法の紛盟ありて。死を同ぐうして我よ
情ず。我ちうんものハ。ば動ケ中を討とあてくよの軍のる
名よせよ。ぐせくと。紙の扇をそまるさられハ。長男我ケ長
人。此誘ばうとりてくしぐさ敵ちうちをんとをちや
くとをげよ。さりてかる。動ケ中掛くしやくわさかけう
ちうう。ぐく狂をそうつちうちう。さるどを多勢よたくへつ
るてふうをかケ取ちうをりし玉を。長男我ケが見ぬ長ケ搦
ふう水ちるをのりうせて引んぐう。ふるをさちうを合てを
ちうがが新まのをあつめる小動ケ中をちうちう前でこりて
引よちうたりれべる虎の宗徒七八人討死しくちゆへ和泉守

たゝかひて無勢なりしかども大村兵部大輔をうちたおしたる大坂ゞゝひのかみ勝ちたる場より側近くそなたをうてうしまもなく。ほうこう高麗をのがれて大坂場六百五十餘人うちとりたる。大村兵部大輔八雑兵のゆもぐうこうるくうちよ城内へこそ八ちりうち高麗と稱ぜつくしひとまづ人るの島をあざるへうる

㊂ 岩藤犯意同じく伊豆守父子先陳の事

附り大村兵門ち重成と中ハ。秀頼公の乳母の子へ父常陸ゆ、うんめる法。大閤秀吉の姪子。実白秀吹公へ出孫殿のとすめ。幸わうハ也て秀吹しことよ身をうろが名。さ殿公門ちハ。軍よりそれて忠をねど。俗事ゆく秀頼公へ

とゞをとけみ。忠をの軍ゆと。後く武功をわうハ。ち高男天下よりうるゝ。ちゝ。されども秀頼公の老臣大野兄弟ゆ逆よりて。秀頼公孫殿のおゞりたくせ給ひ。なまく行郷市正ゆんどの忠臣わ也ことをとて給ひ。ちゆ名さうへ兵門ちとゞひよるゞ中信人よりゞれ家人ゆ也ば。逆忠逆とそとそゞくゝ身をちりゞくゝ。ち臣ゆ名くゝ。そひ。ちとうう武高男を後代よのこゝ。命を寄よ秀頼のせいかさゝ。ゆと実氏の信せひ附をゞ和睦のれ後ろゆ也。ゆゝふ大北兄弟ゞ秀頼公へさゝとして。ゆて出仕ふれなく。ゆ身をうろゞ。ゆゝ事。ゆくさる附芸とゆいくん。ろゆを大閤秀吉の。横逆ひらひ易るゞちそろゝそれゞでよ月六日のゞゝ。ち門ち事ゆ城中をうろて出。今日ゞひ討死と

ちひろこへめるぞわつるこそおいこそ
宝。関羽新十郎右衛。伊久る荒人
めこして手物又修繕。久寛
まで使へり。同時よ右る我々
八尾の城よじひる。かる
繕。秋絶をわうけ。こ
る右。自分よ絵をひろげ
極よつるこ
金をもこつけて育
と名のるこ
よこ。時よ扱ぐこの
る尾の雑名ハ修人うて

ゑ鳥修左こる。又ゑ人よりこ
めたくゑ。ちゑ西をゑ飛八十郎
て。左る脇新十郎よたくゑ
を修理亮をこ
ゑ。左る脇と切
て。ひんずゑんで
さげたゑを
かゑ絵の拵を
せば。西外左る脇
ゑを。岩修理亮
で金をのゑ
左ゑで。第文が

こけ出。左る脇新十郎こせ
右八兵衛つ。岩のゑぐ
ゑ討きて首をこれゑ。狂
び。ちたゑく修理亮
郎ハ
男中。修理亮ゑるよちゑ
ゑ首をこ
ゑ左ゑ
ゑ。
ゑ。水戸藩文と
ゑ修理亮ゑ人ゑ
ゑ。ゑ二ゑ三ゑ
ゑ文が

十郎ごろうあつさの源四の甲へうげてて生死いうふこさご
めぐてーぞをみてふ坂十度ちるあ十歳。佐ゑこ三ろう。三人つ百よ。
主成ようてかろ。ぞ門ちつあそあそんといすくふるのひげめ
ようけて三人をそこそしろう。つぐわて義ふ屋つ。佐ゑ左屋う
作景金八。幸源屋つ。浦景数ろつ。み人つ数よかりろをぞ。手あ
てうろてこうて。首をろゆもし及ぶ。さるを大やーよひくろあ
祢こくく貝年三及四ろ。武者ろう。ことふさごのそれよそ。ぞで
をゆくしくこてらへろ。金祇三数まぐをの。ふ実の真見紀の
る紐ひしをこの紙角。房たぶやうふむをびさげ。紙祇ろう
たろ里甲をのびの結ろくむをびぞだを娶よ名者祇
焼とろろゆ。わたろろふ数ぐろ。ろハ朝よ朝ハたる
馬毛のぞくたくまーさよ沢深沢の敷をいてぐーれあい

のこぐるくだりの。鎧うけてかのり。ちろこ纏よ拔ぬで
うるこ捨てるのひらびよひつきくて拔くうるこさま。巻きろ
ぐうわつそれたるとこそうんくよりさまだ和泉ちる尾い出
巻物ひらくくるぺ八尾蛇へ川ひろ。これよりて木村ゲ手の
若江村のうるくハ井伊軍勢とひくらまろ。出たる助。こも
手の雑とうるよ。赤地金ものて。八幡大菩薩と出ちく金の
幌れのるか。色ある尾よわらむ。雅人やくいくべ関友新十郎
わまこそ井伊直孝ようそこひへ。一大事のこもをひそひと
ち。出門るさうだ逆方のこのこと。れつくろいれよ卜如ちこれ
ただる勝新十郎とちぐめちく。依久弓郎人。年紀孫兵。対
四義のくこ。木村ゲ中白の義。紙のひきたんよ。ちろ熱村ちる
卜ちまつさるよちくうて。士卒と義ふよまのへちつこと

だ和のうちに加つて。毛ほ時のこふをぞあげよろ。赤よ
百ふのいうげちの。つ夜よちらかるひぐこして。天地とちぐろ
るだちうく。木村ろてくちる四りにくちるのつるのを。三百
作誘わいちくぐくろ。中ゆと毛本七毛つ。作友八ちろ。中
元くを。中田市こ兵川流れ泉。波文飛会庫。大塚勘右
番号右衛。ろ木友右つこ。ちてハ左ちの名陣よ。今猛撃ろ
合戦ゆも肩わまくこれ。ろ。つ人。命ゆの兵をこうらとて
力勢つ勇士をまつさこよちてませ。たみ猪をつさゆくべうのを
みぐちよくぐこうず。敵自紙引たちこと。ちどろつよちんで
対ろくか。中とうけやぐろ。卜和をゆくるれてゆとつさゆう
べ。徒軍勢をつさめて。ちをを。大和法ようこぐんとちれども。
中くたやとくこまれども。又陽よひのそうけくぐさんます

主たちこそ、かりうさ、かりうんぐ、まをかうずゝたゞちをぐ、げよちよ
ゝとかしてゝ、ぎゝづくゝ、ゆきゝび敵し敵、見ゝうゝをもみゝゝ後絶を
うたゞをゝ、ゞゝめゝりつゝさ合切合ゝゝ合をゝ、ゞうゝうゝれつゝうん
くゝ、へみゝぐゝを、ゞゝみゝゝよゝけゝちゝぐゝへ、巴のゝゝゝよゝいゝをゝゝまゝ
ゝり。あゝ方次更の変化、ゝをゝ、勇ゝ、ゝ、ゝ手の合戦、せゝよゝめゝぐゝ
ゝまゝゝゝゝをゝげゝみゝゝか。本村が後軍、手嫁、結ゝ助、ゝゝゝた助、ゝ、ゝ浦
ゝゝ右。金をゝゝゝんゝゝゝゝゝ切ゝまゝゝゝ、ゝ孝の家人、ゝゝゝゝゝ、ゝ門
ゝゝゝ、ゝゝゝゝゝ

れて。[illegible]世の名ごりやつらて出ぬとおつまうしうさく
よへ。引とりやされて。[illegible]門ちよ。井伊兵衛のすけ。討死
仕りけとや義秀おもへつけ。[illegible]て。生害をいたしてめやさ
るべしとぞいひさいつるぞいみて。今こそ甲斐ちのびの結城
さいてさそて。みぐるとなのうしろ人よりちらやみてちちまこし
て。[illegible]せつく敵を待ふる。岩れたる勝。[illegible]討死今日と定う
れいるや。ちうべそれでいへさそ。[illegible]て。三ツ[illegible]門まてまち
やうんと。ことでの下にるそうけ出して。[illegible]ちうこせまれ中へ
さいて入。さんぐよ切まり。八田今十郎よつるようこまて
ひこそれまり。伯父ちる義人をちこそでまんとやせへ。伊
さそこ付乳伯ちづさんちこ。[illegible]ちる勝よいをそれしと。何ぐくけ
うんで。新兵十郎むりうちこいて。のちよ。[illegible]舎人の首

をさそれてこう。年[illegible]孫[illegible]東国武新十郎あ人いぐ同名と
つ武ようけ入。年れハ日下こう。[illegible]長八ぴあ人よ切ふせ
ら也て死よう。新十郎ハ日下源ちうこ引ん。[illegible]
ちに門ちハさいどのちこうこよ。新兵の石や二百ちうたまだと
て行の差とあさ中くつこうよ行ちせんさうべ秋首とちさ
ちべし。ぐ也おくうちこいて。る名よあうべちべし。そ[illegible]
の中へちぐうふるをのり入て。ゆう[illegible]くとあ[illegible]せ行。その
新よあつよう。威るくしてちげしく。[illegible]よ今名ちう
の戦よ。力[illegible]ちとぐれて。[illegible]場のちやうぐを。りのまへよ[illegible]新
兵[illegible]。おそれてちうづくうのだよあく。逃ちうぐうそちつる
をうちうくう。本村行のとそあつまふちさまうあぐ。ちやくちに門ちを
うてこそれちとぐへちりつくへ人とあ。[illegible]よ重者[illegible]代の武

ほん。安房長三郎。うちだち出て長門まがるとあり。長さ今福
略北。西の合戦し。大軍をおいちらすべけ。ちかぢかまで来来
ともいとれ給へ。長門ち長をそれりうちとあて。ちる石工佐ん
いざや陽頁西を進よといへば。本村完尓とおもふ場の人の
ちさちたく一騎名のりて出。長門ちがうびをそんとおつ
ちも剛ち侍うか。さうば本村がやへをんとれよと。ち
力ひんわいてうりてかる所。長三郎やがて長門ちが陣をへ
してるちりトよこりてをとす。本村ん へて。ニニぐんうんざ
ヨをうり。長三郎れとおもひ。ちてうてかう。本村
ちだうくうけつがしつぶりらへしう。何とうへして。長三郎
し具をもちさまをさうとまれ。孫とついてをもちやうかい
貫をとれしかをひうへ。長三郎さうたれ貫と

猪ちうんと。猪ちがうふ立てあくびをそれよりる
うくて長門ち討死とうこそれだ。ち板ぐこの雑兵をちりく
し逃うせる。西孝へ陽時の具猪山所ひぐうして 信軍
勢ぞト知し。列ぐたてくしかやぐて長門ちをぐめに
て内夜。出口辛乳。長本ぐ貫を。大所西へをりそれば本村ぐ
貫の見ぐれ鬢。せよやうこ名者のうちり。乳し実しわ
ちとのくふれをなとく。ちたくし大所西を出落涙あを
ぐこれうるとうや変し長門ちるぐ猪父本村を祝京の洗豆
の猪し。筋甲の猪をちあ。日の丸のつさなる。猪織ぐちる
う。大石雑猪を引率し。乳し又月六日のあうさ。地
白し八幡と。大文字をし書うる雑。ちかぐをうあげを。山
村へこそううる。代をへのうをを。猪東を出る車ノ

紋付きたる旗を押立て。手よりもちて。敵のこゝをわげ。後
鉋をさんぐ。ようちちぶ。そのくちに。珍を今せてたくさんの
榊原の家人。佐志角三郎。一騎。進出。雜兵あまたつれ
ふとる。而よりて板敷の中より。少彼威の鎧よ。紙孔の甲
をぬぎて。角三郎を切てかる。手よりぬぎたくさん
しげ。角三郎。弓矢を捨てそれて。あらのれさわぐを。弓こやが
て敵くみついて。ちそよりこれてふせんとすると。角三郎。
しゆ〳〵。ちくうわ〳〵とふみだす。あいやくとねぢ合つゝ。角
三郎。わげたそして。首をうちて。敵大勢をそ
ひ。首をうだいこれて。逃よりて。ちさるよ名ある敵かん
と。にそしくちひ。角三郎。弓矢を敵陣ふくく切てのさんぐよ。ひいさ
たりのぼりかうちちぶ〳〵しとぞ。ある武士〳〵〳〵うんで

そもそもくみふせて。首をとりてぞ。引よりそ。もはやとりてめうてさ
んぐよ入ぬぐれ。手よりのつさをもつして。義のうぐさして
血をかぐ子。榊原の家人。佐志右三郎。敵わきさうちぶ。ぬきち
よふく入して。討死をしそちくり名。時よふ鬼の三角十八歳。父
が討死しぬとり。弟二郎こよ。敵陣へ切こゝ。雜兵ロ又騎討れ
父が首をれうへしてぞ引よりそ。それぞる洋右乃。元と佐志
右三郎と。一本よ討死しそれをてゝるみ鬼わらざれば首を敵
よりそれくる。榊よ拾べさるのハ子ぬべしと。交角ゞ男子を
わめ。ぬぬろ討死をわつぬよぞうふくる。時よ大将をはる
士卒ぞト知して。ぬ物の敵よまめるこ味方のたちさ
る。一りこよりこつぶせ。ぬやくくとわりられだうこまろ
て越物一度よ陣付をつくりてせめよさとる。本村を税元

来小弱といひたてつつ出てたちまちよそ勢へとんでし
て敗わるをとうちとれあまたとかくちめさきんで
かうされたうもぎたくうとなどをうしてぞおげよ
こまる

諸家高名記巻之十四 終

諸家高名記巻之十五

同録

(一) 三田右馬佐出羽守義明と懐へ海とろ事

附 伊東七郎猪尾よつくろう墨をうつる
御和法の浮浪より大胆速水弟陳をうす

㊁ 高田左馬介佐幸村討死の事

附タリ 後中当家士卒千知の事

附タリ 掃部介也討死の事

㊂ 波多野兵部大輔懐の事

附タリ 城内の面々切腹北村伊豫守討死の事

万民安堵若代のつゝしめ恢ひと風の

㊀ 高田左馬介佐幸村大坂へ出張の事

附タリ 伊木七郎右衛門尉遠江守の事

鼓隠一郎左衛門尉と勝負の事

大坂ゝの勇士今日よりてひろく討死して名を宇宙

よのうしてそいつさいつゝ高田左馬介佐幸村の

高田。伊木。波多。大谷。明石。長曾我。小倉。ともとめらして。四月

六日のあつさ。七郎兵衛。掃部介也。七方作戦。大坂の城をうつしあるされ

ば東西物さわぎ。高田左馬介佐幸村の

引くとも。高田左馬介佐幸村。六歳の義。三流ちて

て。人の引ごと。遠江のこりて。よせ来るやしあのまちくる。かゝる

西。伊達。西宗。行方。崔の義。石流ぐりてたて。そ場

男のわくよ。ぜちよせくる。左馬介佐幸村が部屋まで来ぬ。先

陳勝ハ名のりをあげど新発意三石外郎と引そて。ひたぶる
しをせをようてかろ。ぜをきをあるをまぢしいふまくこよ。く
じめより後ろ方ゆて仕舞をつけ。べぐをてさんくる戦る。
奪ひ下知して。やがて吉野ぐ物を引せ。山川友蔵つよ三石外
郎をさうそへ。ろうせて。ぜあたろう。弥よ小物の主田。後へま
あつく死とろんどろつよ。のどをべろうく大物したくろ。弱
ようをとさうふさいでさのひとうりて人るの鼻ぐやちぐろう
今いうをまうこうて。半ず弟ようをひ。家ようひれ
で。軍ハ此ろし。れ方ぜとつてひて引ちりく。弥よ幸村ぐ軍
だて。当時家知しさろへろう。ぬをバ七日の夜の刻。西蔵
臼山ゴれ出るとさろへれで。天ま七表ハ実本の伝おあくろ
義とあしうそをのへくの奥様。山とりぐたりこ大夜と

秀頼ハ出陳かさろべしとて。そのく出張のをんぐりとさぐこ
ろう。天王寺表へハ毛利勝永。幸村。伊木七左ろを雄。庚申
堂のまつへハ。薄田兼相。塙田兵書。後藤水甲。竹内
時之。助く村伊与守。真田信繁。長川伯耆。毛利
勝伊。東丹後ち。長宗我部盛親。真田信繁ハ大坂を出る。後藤
平井七郎。保利。佐くま市兵衛。名護屋氏。敬。
ひう。列をそ。てしうひろ。ちろ。ぬくの義ど
ひてもれ和淡の義で。伊せつろハさを。彩りのうへ。和列よおつて。
外花とうろうぐさしひ。秀頼ろさろへ。さろゆてしぬろの
合戦よ。ろ。山とたのくろ。ま村ち門ち。ぬをとぐが。後夜
又表。落田年へ。内夜ろ。助。ぬ和宗後の富士討死し
て。伊とあく。淀中の士卒。かどち。ぬとたゆませし。まあれ

たゞいうてはなべさまのこゝやとゝは出るゝと延はかされ。弟陸奥人
だゝの大飛速あるとゝびくへされはお後をぞこゝへくゝ。佐軍
將義秀新五の出陣こゝをきうへよ。右あんのもの。陸へ引れ
し事をとふもんよ。ちゝひ。我人んまちくふ始めてこゝへとも
ぞうよめよゝ。三間屋つ幸村ゝ事と宮て。相く義秀ゝの
ゝ運だゝこゝよゝこぶきをうね。宮よ天まち義の宮東將を。
軍よゝれうり行ゝこゝれ和強よの中事。義秀ゝの出陣を始ゝ
こゝこゝもん。宮東の出をだそこ。ちゝふ御のんゝさゝ舞ゆて
今とあてゝ仲後とて。大飛速水。をか播代の宮。陸奥を
もて。陸へ引れ事。ちやん人亀たゞゝ付義をゝり一ゝこゝ
ゝこつぶきゝ事。大ゝ西日よゝ及ぶまし。ゝゝゆてをゝこゝて
みゝこの船をゝて。を中ゝ屋つ混乱ゝれん事。今生の不

和強代のわざゝり。ちのゝよ西をべゝうず。いでや幸村ゝ今ゝ
付元付ゝんとゝん屋ゝよゝり第して。子息大助十三ゝ出ゝと
一ゝ出陣ゝをゝらゝゝけてゝあゝ泣をでゝよ屋つゝゝゝゝ
よ。佐ゝよゝこをゝゝべ義研をゝゝ事。ゝれ西日をゝゝ。
屋つゝ今日付元ゝゝひゝゝぞゝゝのゝゝゝ今生の名ごりよ
幸村をゝくゝゝんゝゝゝへてゝゝゝくゝ事。ゝへゝゝゝ付軍い
ゝくゝゝゝ敷小して義秀ゝ出自害ゝゝれゝゝゝゝ方
を後ゝゝて。元出の出付ゝべゝゝゝゝゝ。ゝゝたゝゝんゝて陸
人ゝんゝゝゝゝ出てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ義秀ゝ付
の元をゝのゝゝこゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ自害よ及ゝ佐ふゝを
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]の武勇の名誉。けゞすまゝ[illegible]べうずゝ。[illegible]の、
孝行の才一。親のかゞ[illegible]をつゝさかりこそ。[illegible]の[illegible]
知まゐらせど。[illegible]へ[illegible]へ[illegible]大助父[illegible]
[illegible]。藤源[illegible]よれ[illegible]やり[illegible]
[illegible]ぬかさけ[illegible]討死[illegible]
[illegible]。[illegible][illegible]
[illegible]甲斐[illegible]
の美[illegible]
く叔父[illegible]
て[illegible]
一[illegible]

城内へ近づくりしとおぼしきあたりまつ化人[illegible]親類一門
への恥辱[illegible]
人[illegible]
くれ先下さるべし[illegible]今日軍[illegible]親兵の二三
[illegible]
[illegible]
[illegible]
義の[illegible]
で命をかゞへて。内日ゆても[illegible]害の[illegible]
ぶ[illegible]
和睦れ[illegible]の実否[illegible]

見さだめんとて。ながつかのものが。出陣のうち式。髭下よりゆへ。こ
れぞ。又軍をたちらへ。敵をあらしやうしんへ。伝うべ。一しかみの
たの士卒。まちくよめて。隙人へよ出んものあらうべ。さうぶ
て幸村いをもり引くへを幸めぐこ。あり通せよつ。人の命ちさ
つをこさべと。ねぐひしへ今の幸つぐ身。我こそ命ふうちもて
ひとつへ今日討死して。武名をあげ今ひとつへ城内へ入して。今
明日の神たちくを見とぐ。ふるる幸。さいまぬ人よとぐまこうとぐ。ろ
こだしくふうを。此が命ちとれぐ此ふ命よあうぐ。父ぐ命ぐれ
ぐ父ぐんよまうすべ。だあ。くあ。て。先途をえ。ぐけ中べし
。ちうなぐのこぐをつふて。義弘しそれぐ。やうくよ大助
字入て。ちうそれいとまして。城内よあゆりべ。父ぐ今日
討死とかりりさぐりれいや。又父ぐかぐまりかぐて

ふりとあうさ出して。そうひとさるぐ。ぐたれあ通。髭つこ
ぐをあうらげ。親子の名ごりいつとそうみまぐこそ。ぐ
幸のうぐさや。高髭つぐ。ふれ大助。父くうりとれて城中よ入
つ。義弘ぐの孔生害のうふまぐ。つさちぐ。ふうくつ幸。ぐ代
ぐこのうまれ。修人のうぶぐさうあうすぐ。ぐよくふうくれ。
大助ぐ。ぐ世ぐ。ぐそ。ぐへ。父ぐの孔命をあづうひ。ぐ身世よ。い
せ。ぐよ人ぐ。ぐ。せまれちうづうぬうちよ。ぐいまりさんとんづく
ぐりいさいて父ぐまへぐ出ぐうぐ中ぐくうりとやぐ。ぐ髭つ陣
ぐ。ぐどぐうぐ入てぐたくぐどぐ。ぐのうちうぐあう通ぐれ髭つ
ぐ。ぐ息大助を城内へ入し。ぐそのち修ぐ。ぐ。ぐ髭つを雄ぐまう
さ。さうぐ。ぐ一戦仕りて。果ぐ討死仕りべ。ぐうぐどぐあのこ
ぐ。ぐ。ぐうぐやうよ。八方よんぐ。ぐつけうぐ。ぐうぐべとひぐれど。

七郎左つき方討死かさねうへよいぞ私の命とおぼしめ
さるその合戦ゆとは五郎左衛門殿切とわつへし。
今八貫東ぐちの人くふもの。伊東七郎左つを雄しそ一方さの
めと。ちひあそ郎左の事。ひとへ五郎左の横尾二つく。を雄
が仕合ゆては。果こそ出さへ討死仕ん。ちひさぐめ
だのもへせ五たのかくぐそんへ五郎左衛門三田与左つ。出和
越守。江原右近。三田友弥。大谷大学。名塩民ア。平尾与八
郎。指鳴左衛門。友盆左位。中郷左衛門。早川主殿。福富平三
郎。芝らそ郎ゆ。友盆左位。中郷左衛門。早川主殿。福富平三
郎。芝らそ郎ゆ。左つ。仏尼ゆ一攻して。今日討死
ときぐめろこそゆしこれ。ゆ五郎左衛門と引
ときぐ。大助と城ゆ入へしくくす。そのうち摘西成指列ゆ
川ゆて討死のうくぐさそ。指井の帯ゆ。ゆ鳥西仏

を。河内へうくしゆ。ちそ。ちそ。みくさの滅元をさとりしゆ。
い若の良弼。今又三田左つ。指甲へ大助をうくと事
の世乃鳥仏国じなりのいさり。ふきぐさ。賀依ゆり
とのちゆ。ちそ人神代ゆしぬうて三田左つ仏幸村ゆ。ゆ鳥大
助を城ゆうへし。後軍のうくぐをうこい。天王ち菜印山へそうう
て出ろ。ちそ。ちそ。あの軍勢。此月の合戦ゆあいぐろ事。せゆ
を。ゆ合ゆ。ちひ。今日ゆ。ゆ中ゆ。ゆ中ゆ。ゆ中

ろうのをさうつず。つきこあもせく皆時ごうちよ二三十騎つき
とあるろ。あへ赤足新系絵をりうてうけむうの。年よ大
花をちらしてをげみしが。新系ふうをを負へて引ちをく
九近七二ケ面森をうこれた。濃ようみて寄ともせば。うへ四く
とうていて。絵ようすごりて。汗そ一ぬらひ。ようを九人を引面
へ。山形伊賀ちるをあ四ませをうち。海よさいぜんちのたこ
らをう。伊賀ちるがあいまよふをくが。いざ勝負ついてかうた
を廣元い五竜といひてあへど。九方船御をうてつき
合しがうたてや九近下陸のあらいをちんで。股をつを
てのりふをう。伊賀ちるやがをさて首をうを。今日の義
首とぞしがりうう。ちをちる名のをでめをて入ぞをく
てをたをいうう。ちうよ年のうをうち。教ふ義をうくをを

ををういて。高田が勢紙。つへとあををおうとおうてこ
と。いよ拾をを山海寄ようごくがいし。拾をを多山をる。水
谷伊勢ち。杜田塚く勝。小笠原右近。同ごく信濃ちをう
ををうけてをせうう。をれを九ちう年村年ともせば。小勢の
人数を七をようをけて。をたくうふを面く討死。一ちを
考をを。一ちを引ぞをを。ををくとあいうたうう。水谷伏
田の右勢をうちやがいてををうく。小笠原又ち討死
をり。二男大学をうを。をを陣へ入をうう寄ようをををを。小笠原又ち討死
十騎ようあをを。引ちをををををを。九卒をを知をを。ち騎ち
め入ををのく討死をををををををうをを。をををををををを
徒の衆人。十六人をををををををををををををををををををを

てついてまゐり。雑兵数百人、惜時とうちてとそてろ。ちろ
よ女房をそちる。去年とうしてをやうくその男だうりにかり
てをげーく敵ひいてこと敵あうだ引ちまん。かいんくよちがへあま
だたやをくくちちる。あれ敵をやしとろあよ。三位
殿つ。自分のをてこと。それだ。集いこと。ちの。折柴の
をこちる。今天下よりこれの。いそや幸村とうんで武勇の名を
わうさえとひとあへどるをとあ四てきたをあうもう兵ゆまを切
落し。源よ宣光。惜死し。ちひろかて関左衛門で討ん。と称く
とをてみろ。元来小勢のち仮でこ。冥土の勇士うけたを
らまをさんくよをあへをみぐ。討まつりれつ。痛ををあい
死をろうのくをあうりうり

(二) 三位殿つ作討死の事

をとでよ入んてをくさんぐよ我ひ。三位殿ご軍勢討死とた
海つ幸村のこされ。士卒をちさぐ。敵あのまへうて
かろ。付よ高橋死。天まるのちをへ火をうけて三位殿
のうちよ。うてをんこをてろ。左馬ちをとろ。
てすぐうくをろ雑兵あろをさよ男拾ちくうてう
をとでよ。雑をちぐさろて入。宣よ敵あの侍。西尾に乗つ
三位殿のを尾でをとつて引とあろ。名馬ちろへつてを
高くをこををを。て和く。御負あまといひそれで。西尾んく
てるをのりひけ。ちのをひあうてうてかろ。左馬を血
よ源りたろちををまつ。ちうぐてをぐうち
うちたくいーぐのとろ。三位殿ちろをん。幸村るとりさくを年に歳
て。西尾よ前ををろ。をくくをんろよをげーこたくい

よ。なつ痛は十三ケ所。こゝをそれやよ股を射られてゐる上
のうけこゝろかいなく。命をうそもさい殘しと。仁王つあれよ
ぞこひくろ。さるとだかゝ南方を射て通る。大師丸ゆゝし
ふびんよおがめ。出家人のみぐろ。なつが眉よれ廻向をせ
手向下されくろぞ。幸村付きてのちへ。源軍の人々。
雜兵のもとへぐこ。ぞせ武中へころて入。秋きくもふと討死して
迹ものいかりくろ。やぐて揚時をつくりて。諸勢いをあつをれ
ぢくろいは雜兵をも獲しくろ。実は揚勢全ぢいなぐて
高つ幸村とちめ。合せ。三よ作殘をもぐりて。場乃をて。南
へまくろ。大師丸の出年陸のうしろへ。ざくせよして。合戦は勝利
をはんと。後しくしよ。天まちを敗北して。三面と討死をれ
ぞなぞお遠しくろのこかくもどあまつさへ。実東揚よ。揚の

ゆかれまうれてそのへちどろつよゆふるされごと掃部士卒
よりト知してゆくやうかつかわ丁ものまたびさざく討死し
誉れを後代よのこせよし大勢の中へ入てさんぐよ
たくみてのこらず討死ちてんぐり。おなじ岳表へむひるる
よハ大胆なる恐大和とて。蛇の目の紋つけ引る羽織
さうさをたて大胆左部軍。関義之間。清井関治ち三浦死
彈ち。稲木三郎ち。樋口清藤ち。佐木駿河ち。佐東丹後ち
甲斐村伊豫ち。ち伊ち。ち板ち。石川肥後ち。小金伯耆ち長
岡与八郎。ち田芸義。ち松倉ち多数人ち。郭拍軍の所
羽織をめげ。ぜんをあ。やぶりてそ。仕勇々。ち。ハ岳
山ちり。ち西のくよ。ろてぶるさ。ちる。ち原机ちとへ。れ
大伴原よハ天ちるぢくれ羽織たてらくこ。ち間小ち。約会

夜十時。ち人ち羽織をたてらくち大ちるとハ七ち。ちよの合の
扇をたて。ち。ち。ち。ち拍たりしぶそのうち天文年
中よ大伴西のち組文徒川ち。ち家康ち。中多ち八ち恵
ちとされてぶち拍ちとうぶ。ち天正十八年。当原武州。ち。
源氏の合戦よ。ち。ち。ち。ち

亮。後名は関羽。さてへかして。秀郷これを引これをく。恵ぜめに
今日は。はるゝぞうたてそれをぞよ。殺の敗対する義
を以て大将主るゞを勢。三二をこゝろうてかゝる。ゆうびよ
赤きを吹めをさ。ぞうりめの敗を黒さ義をつけて。侍東
丹なる。関じゝ。武くゝ村侍郷る。白地よ大といゝ文字を。
つけゝる義をゝ。そて。墓をよりて。前田の梅だちの
義は。めゞけてつをかゝり。兄弟をゝ。やぶりゝてゞたゝ
ゝる。ち田を墓つ。左弁関羽。ち尾但るゝ。大坂勢よう
ひゞされて。敗ゝとゝ。そをこゝる。百人ゝ武隼人を山
伯耆ち。接合ようて出。大坂勢とさんぐゝたゝう。
された仕敵ゝ。大武武ゝ村侍東ゞ勢。新よゝ色退
敗せゞぞう入くゝをゝらをけゝ。実よ三色敗毎。敵つが

ゝりくゝちわゞり。集ゞ先祖し。代百姓て付死し伝ゝ
敵と先祖とゝて。付死をゝぞゝて。ゝまゝよ。多勢の中へ
二騎ゝりて入。新名田入騎うゝてゝり。つゝゝこゝゞゝめ
く。付死しゝゝぞゝさゞゝ。先と若戦のくゞゝらて入ミ
だ色くゝてゞたくゝいゝるゞこゝゝをゝ山の馬縄とゝ武の
白縄と。安物勇とゝゞげみ。死をゝくゝをいて。家後くゝ入りをゞ
戦ゞをゝて付死をゝ。又をゝ山家をて。ゝ武刑ゝ敗つをゝトめ
ゝて。家後の勇士十八騎ゝゝうゝ武ゝ実ゝを山大敗
幸武ゝ。武は敵ゝ敵ゞゝゝゝて。ゝをゝゝゝ。ゝのゝで義田佳
ゝたくゝゝ出合。敵八人ゝちをゝて。貴ゝ武をゝ。ゝ
義をゝ。何ゝ仕ゝ。ゝ軍ゝ発ゝて。大敗ゝる名。行ゝ

うくのよりまさ、ぐて。行とはおとをあてたる板場よりて
入死をうんじてたる我をと。拡平城中ちる。あ那まさふゲ軍
勢のつられる玉へ入りいて。自分より後をうて敵数十人
うちとめ。さいとひとりひさうう。あれたる板の軍勢。皆
討死をこひさぐめるあや。中くいわしとひさもうさ
へくしたくひをんで。ぐくくさうう。あろ玉へ。ひ敵後中ちる
西次郎と白との陣この旅ど。入十ぐ目をたてさせみくさ
の士卒ゴト知ていはく。ゆゆしきたくいはば。陣
士付をる事をべきなり。味方ハ東むきぐのの中をのが
いて。無のをろし。をうん陣をこたまでる物具をぐ
れうで。敵ハ又彩この物後まで。きちろくるあかをさま
いかりぞ。大概ぐんをけて敵をわますかうてとれ。ぐ

味方をわやまいかをたくくふよだくひ後へぐ。ぐくこまりて味
方の士卒。敵をぐんをけてつさうをもこ。もぐ入をぐれる
今我ゴ。さて何士付ハかりくり

三 武造稲荷の前合戦の事

附タリ 那く村伊藤ち付死のこと

をくみくりした板勢。うたまつさくられをといへ。行をいさ
あいをかをさず。大軍をあいくづと。さくこの実東勢引ち
たる味方ゴさそつまぐ。ごいをくづまて引よる。ゆ行後中ち
西次。後軍勢ゴト知ていく。西次をゴいくへぐをや
くをくこへつまた。引ちたる軍勢。推くへをいてくをとの
をの。家ゴ後中ちる西次の勢み。後理亮西次。後陣ち
ちけ出んをと風を。敗軍の味方の勢ゴさへぐられをと

みぢかくそれぞ。やがて道でまうり。一丈ばかりのうまをとりて。
とどめをさしてとらるゝ。中丸てるとゝ新とゞろくゝ。かつて。
まつさくさまをとらるゝ。されをひくまゞとらつくゝかな
やるゝ。おのれ。さいをのそく敵ゝ陰と合せて。はゝ丸つさ
ふせ。首をかいて。ゝわゞる。丑又りや敵ゝ三騎うつてかゝる事
ととせば。をいつめくゝ三騎とうちとりて。首をとりて千
とゝ。ぬゝひかをとらゝ丑人浅井周防ち。三浦兄弟ち。五騎
をつれたゝ一騎の武者をうつてをんと
一万騎どりとりてたゝ一騎の武者をうつてをんと
かりなる。武者かをゝ比の力者。天下にかくれなき勇ぬれ
ぞ。ちりとゝ拾せば。拾をとりまゝて。ゝ行ゝ。ちりゝ又伐
出ゝちまを。をゝ引ぞ。ゝ。ゝの迹ゝをゝ中をゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。やがて武者とゝ。浅井三浦が多勢の中へ入て

八十文ほどうけやぶる。中ほど近藤四郎助。浮田六郎生
下文助左衛門。関藤角左衛門。金子孫兵衛。
大坂勢の甲首を。面々よりの八つづくらとりてさらしに
されたる。大坂の中より。高橋左馬之介名のりて。城中さの雑兵を
四人。鑓をふりまはしてをそ。そこらの人よりとられて。
八人を。下文助左衛門。うけ合せて。高橋と槍をあわせ。火花をちら
して戦しが。手よわへうちまけて。おいねさ。たゞ。
うい。鑓負。二度。槍を入れを。雄雄をつせんと。槍
をとりて。引ぬけて。高橋さこゝ。力下文助の。
ものぞ。ちからく鑓負へつるぞ。しづ下文助。ものめて。高橋が力を
二度。ひつくるをひさらづして。横二ぬげたる。やぶ。
くりて首をとりて。主の方へ。近藤と敵とくんで。高名を浅内

八幡さまさゝ小てあまくさの歌二よをちふを。ぶ人ぐくくくこと
よ。浅井三蔵が友勢。かひさんでひくくくる。高二ぬ。原信法
ちの家人。浅香佐兵。浪若左衛。赤尾利右衛。の
付兵と。安二。安三。安二ぶ。へりけこ。たくいたゆこ。三浦
浅井の軍勢。生捕。ぐりこうふせつる二付兵。信法
の泉下とちふこそたのの。れ。ぶ。ぐ。大坂勢ぶ。ぶ。ひこ
二なりて。義とちふて。そのへとたくくろへ。実手勢二ぬい
くる。佐藤。中ち。高井左衛。うて。出る。を。和二ぬ。
佐くと。越勢の中ち。敵の軍勢。ぐ。
ぐて。左衛。二ぬ。ぬ。村伊与。一分の軍勢。
人十三。誘。左。村と。宗徒の。郎。十八人
うちとられ。ぐくの勢くくくくくる。安代。横合ち。浅井雅楽

なの軍勢。さりや門せどとうて出て甲斐と三十ろ
さりろと。飛く村りやのろ迫ぬ。家中て付死せんこうち
のこされ〜軍勢のそのへとつくろいりくへと。実ゐろさ分
井上ろ弁の軍勢実と張とりひと。いひとわくどうて
ろり。宗徒の帝番十六人。ものトようちといこう。又安
友ぶたろ。加賀利常。多勢とりつてれまこ。飛く村実ュ
て付死もそれちゐ田利常ハ。稲葉大内祢の名井ゆまへ
ゐて。大飛ろるゲ二万弁誘ゆてひくろ。ゐくそつけてん
ぐュせめそれで。大飛士卒とわまこうちそれ。ゐのハどとそゆ
とうて迎入ろ。井伊直孝ハ。ゐ本張ゆちとたくへ。お
ちくの首とちりおろり。細川越中ちハ。元来ゐこゆろ大力
ゐもとで。ゆろ家人ゆ三張ゆ一ゐ自分ュ陰とつこう

て迎こむ城のついゐものと。ゐづゐとゐのくつこうをく。家来
ュ敵とゐろせろ。ゐろつこうひせュおそろ〜くぞゐくへュけ
る。友ゐを和泉ちる虎。稲垣平右ゐ辰ハ。つまろくゐ自分ん
ろせめろつて。城ゐとうこうろせく。友ゐまとわけ。ぞのたろろ。
ゐ弁城まゐろ。古村ゐ古ろ。ゐ田友たろ。ゐひくュる石と。家
ュ又ゐ多ゐ友ゐる古改の橋ゐゐ。ゐ義十ゐ女ゐろゐ自分ゐ陰
ゐて敵ゐまろつこうゐ。徒人の用とおどろ〜おひろ城ゐ行
義ゐちろく仕ゐろれどゐと右平ゐ見ゐ。ゐ多大隅ゐ。ゐ死
友近ゐ。ゐ田ゐ内ゐ。城飛家ゐ。ゐ多上飛ゐ。永井ゐ近。安友
弟力細川重ゐ。ゐ井ゐ内。拂ゐゐ。ゐ利ゐおゐとゐ
くたくゐろゆゐたやとくゐいらゐゐ。ゐ利ゐおゐとゐ
ぐゐられて。ゐ卒とゐろくゐ。城くやろくと迎入ろ

家ゝ のゝ丹はちゞ郎人。柳瀬又左ゑ。ゑ志の付死とた
くつゝ重てちゝぐゝ事。世わとゐあくゝひ。毛利をおるが
引くゝを。士卒の弘ゝふゝそでまつて。み兆郎の多号廣田
伝左衛と引くんで。廣田が肩とゐてゆゝしゝぐふたつゝ玉
器又系とりぬつゝせてやゞて捨をわつゝせまれトゝ。柳瀬と付
とり味方の勢ゆそゝゐゐゝゝ。毛利をおる。扨の門ゝ地へ
逃入ゝと。付入ゝせんと死とゐゐんゞとをゐりゝゞわゝゝ門ゝ。
秀教公は出陣とて。大兆伝死亮。三田大助。速み甲出る。法
場と引つ重。うつたち法ゝゝゝり金。毛利をおちゝゝこゝゝと
けら重。付入の人ゝいわゝくゝ付死ゝゝゐゞじれんゐり。さゐゞ
ゝ秀教公。法場付死とゝこゝめされ。出陣ゆとゐゞ。な
ゝゝ入て。一戦のゝ人。角寄とゝゝゝゝゝゝ。

家ゝ入法ゝ大兆法ゝゝ。三田毛利とゝ出ゐゝゝ。そのゝ
をゝゝゝめて。ゝゝゝゝ法をゞゆちゝけゝゝ。家ゝゝ敵おゝ
多ゝの金家。伊豫ちゐ昌い敵おの軍士をゝゝゝで実法家
たゝゝ人るのゝゝゝゝゝゝゝ出ゐゝみ出ゐゝ。雑
兵石伊豫の中へ切入。ゝれトゝ法切てゝとゝす。ゝゝゝわるゝ
おゐれて。ゝゝゝゝゝゝ引ゝゝゝ。ゝ
大の男。赤樫の棒ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。そに
たゞゝゝゝれて出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとゐれゞ。ゝ男ゝ昌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
兵今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

またもあてやぐてうしろさまにつきたをれだるのはるばいで
つきたをしてとぞてよたはるこりどうどをちらるが。中あて
とびぐりて。撫ようびさまよ。力てぬいで切つけたをふ。不運や
大の男が腰のすきまふ。ふらくくとぬくりそれだはて。
やとりまふ。たはるをひとつうきようひーぎごろうさんどうん
でかるてあるさへとうて。雖ども教ても不の
をとりかせ。かひりじ面を。実況系ちきついてをたはるよ
貧をとらせるる。亜人又協中。ち安波左文と名のりて
出。たはるようてかるたはるを今い歩もりだらふて。揚負へを
とおもひるるがたぐ。わうとうをて安波ぶりをらびさりて
をとりかふ。でなて吉田六兵衛つ同ぐく行方つ。あ人たは
捨をひつさけ出。たはるをたぐ一さうとついてかるり。実況系

そうばば人を形へ作せ付ら是下されよとたはるをとうこひ
をあひるりりてをそうりひ。ぬれ行方つ。己いたるるいを
かれどもんぐーのをてーさうあ。ぬを人をてくをんぐしくをこを
こをついてるる。あ人をだをのこををのたをあ一人ふておし
らいるるーをたはるをーてかるりて。あ人ぶるるぬるををみ
せ作ひそれだ。はをーやとぐりあをだるりあくあいあるる。
来てを前をりてたはるををそをををそれ作協門ら
戸田六兵衛と名のりて出。たはるをあるみつけてこふやををて
高八踊よるんぶぐるあまをのをのをとうたるくだんちぐろるつて
をぐるををぐりかぐるあいををををををりたるるるの望りたるるば某ど揚
負あを。うたををるるるのぐをのひれんをさんぐをーをを廣
云かるるようてかるたはるたはるあいををををさらふぐをまり

そんと切ひしをび。ふくうらこうちたるひーが。云系ゆとう
ふくうらくん右の手ゆ大指を切をとられ。云ひねんといりを
なし。切こをくついてかるく手をなびう云系。死者に
なりてたくうくゆへ。右昌とをとれだ 信ちよりかりて
あやうう兆面へ家人を激活ちもーをきうつて敵と切
合たりの腕を切をとす。右昌すうさず刀をつう右の手
を。又切ゆんで六系いよくひねんーよひ見うてあんを蹴
たをそんとうるへどとを後ゆんごんで切あをつゆる首をぞう
へうりう。そかあまこの城芸右昌を後を討をんとをを
ーりうををつげーくををうをよをもやりうを。
をを已踏をりておとす。首い切ををあて。垂後を泳
ををつけ系。ほの他様とやうひうんーくぐく敵をい

でぞををぞをうこれをよりてひろい首のををぐぐ
敵奪をとりしをを。今へををひをあり。強ゆ敵系右昌
をををひ出ゆ陣へぞをりうう。実を又石川勢ゆ信をい大門ゆ
をを慶ーまり。河刑平器ちりゆ。ゆへまりう。夫をるををて働
ゆべをを。よををぞうくふり作をを。敵ををくくゆを入他くの
る名をのをん掲ーて今日を敵を出合をる事をゆゆうくひ
平器をををく動作りの系の門ちゆ中へ系入搦の門のゆを
ゆて作ーを十系つを出合。右を方名のりけて。一騎対の後首へ
ふくをんうゆを十系つををぐへ首ををりてををさたう新云
をゆ。ゆりちし事ゆへゆく城中を切ぬけ新ゆ軍の仕業をへ
系を佐りうう。いゆ系しゆくーく佐りう。仕様系よへゆ作
うれを。所軍法をゆりう。想責の対云ぬけうけ佐りゆ事

ちゞらく雑賀の出しとがめ出て船頭を
生捕りにせんとせしかば
雑賀の船頭
なる程
仕方なく出先をこがれ
切腹のしよう

㊂ 波多野肥前守

附り 伽羅の面く切腹のしよう

ちゞでよ出和漢の義を
聞たこゝろよ出取
と指ゐて
責しあいこゝなり。
めまよとそみ。
ちゝそう。波多野肥前
やはし笑来
ゆて、伽羅の雑
ゆうつてこりく
和と奥へぞ切腹

こゝろふとりて表
近。
仕
事。
代
あ
急
鶴
そ
こ
近。
仕
事。
代
あ
急
鶴
そ
こ
ゝ
ろ
ふ
と
り
て
表
に
出
て
。
敵
の
出
を
待
あ
づ
ら
り
の
。
敵
の
出
を
待
た
る
時
は
た
ゞ
ち
に
こ
ゝ
ろ
て
ち
や
う
と
こ
ゝ
ろ
を
し
ま
く
伽
羅
の
面
を
ま
ち
て
。
仕
事
。
い
ろ
い
ろ
く
ち
ご
わ
さ
を
ん
し
く
ま
ち
と
。
代
附
を
ま
ち
と
せ
ま
ち
と
を
ま
ち
て
。
あ
づ
ら
り
の
出
を
待
る
ま
ち
と
。
あ
げ
ま
ち
と
。
急
よ
兵
今
一
命
を
な
ら
と
。
黄
八
ひ
ら
ぐ
と
ま
て
。
腹
十
か
ん
鶴
武
ア
。
そ
れ
ハ
せ
で
と
い
ま
く
ま
ち
よ
。
同
ど
く
自
害
し
て
よ
そ
り
。
波
多
野
肥
前
ハ
先
刻
ち
。
六
ま
で
ふ
せ
ぎ
さ
て
。
ぶ
ら
ま
と
ま
い
ま
ま
の
を
枝
よ
つ
ま
ま
ま
ら
。
ゆ
れ
よ
ま
ま
ら
。
母
の
出
栄
ま
尼
ま
し
て
。
ま
の
ま
ま
よ
ま
ま
の
出
運
を
ま
ま
て
ま
せ
ま
ま
中

よくぶれ入てゝんだ。ぜひ自害仕ろう。母人の申さるゝ通
や実乗ゝ。れたをけいさまゝ。ぶくれ自害〳〵とゆれ
で正業うらまろいて。こづくり自害といふてゝ自害仕れい
ゝあるずさいごをれみぐすまにあゝどこまゝふうをおいゝ
れだ。自害ゝどを仕損じてびくくせまゝ貴をそれ
んゝとおゝづゝゝゝ方ゝ切腹てゝんて。こづくり安堵して
自害せんゝゝく仕直ゝとゝゝりそれだ。内義助母のれ義娘を
ぐゝて。ふりゝゝだれさゝゝゝ系ゝんゝ。ぜひゝゝゝぐ粉ゝる力を
さゝゝ自にれゝゝ外ゝして。腹よゝゝたて。ゝゝゝを及ゝど背中
へ口をす突ゝゝて。ゝゝぶゝさゝゝゝゝてゝたゝて正業
今いんゝゝゝゝ。やゝてのんどゝゝやゝゝゝたゝて。母ふ因
ト抱ゝ犯ゝゝゝり。ゝをゝこゝゝゝれて。義ゝ。渡ゝゝる

あて出自害をすべきとの事。遠あの中殿ちかをかふとと
がいてをとのをのこと。をのこども運の事ひあて。時変あるまま。都
あて。ふたたびませまゐへこぶれ入ひとりとびらんの仕業ん
うりでて。あらくく出生害れ延引かうべし。つまづ遠あと
あをいらんへ出運いつきどとかりゆくと。制しをあ軍れ
きこうめ。やうとふあるどうくうをを城内よみぶれへ
何とて運のひらいまん。生害をられて雑兵のをよかうん
事。さりとてはむねんたで今切腹もとべきあるべ遠あつづ
けと。ふりをるしあるとあ大飛脚亮を仕りてが多
くまで出母子の出命でだをけてひ城を出しまつるへしさ
あらむ親しへ城よ火をけて。切腹仕るべしとつるしへを。
あとをとあるのあいぶ。あ所面へくくよんとの事し。

ゑりどと出生害をあまり拒へべうどとかつきをらく
出切腹を延引かされるまづ一だんよをしをぶめひで及び腹よつきたてをう。遠水て
をくまでと切腹をを光ををして毛利をあを萩系道転仕
蔵武義を。武田左吉。蔵場ををこかを義紀幸を。浦刺る寺
る稽古をこうへ。小三至旅義場。中稽初陣。同下く来ら京都後
おを。今本源を。加藤孫三郎。三ろんで腹を切ゆりり稽
くよ火ををりへ城内よへ大飛ををうめ誘うを切腹の神とを
蔵城よと待附のこを天よひをうをををまりし。あを毛
をとをがめして出生害かされれば三国大助と腹切て
死んをりり。まを地へ入を八浅度を害。まりをくよを
丸よつをぬれて死しよりり。大義のつがを右京つがを。

[illegible]のつぶ。[illegible]の女中[illegible]自害して出[illegible]。[illegible]
[illegible]ふかして。[illegible]のつきたて[illegible]
大坂の[illegible]を[illegible]て切腹し。[illegible]のこて[illegible]
や[illegible]。[illegible]。廣大の地を[illegible]。[illegible]の[illegible]
[illegible]孫[illegible]ひておとろくべきなり
[illegible]信長の[illegible]ひ[illegible]
[illegible]の[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

功の家[illegible]の[illegible]れい今[illegible]
[illegible]

諸家前志畧記

金部十三冊　生京

右者大坂掛絵[illegible]
数[illegible]
君恩のわ[illegible]

正徳四甲午年正月吉日

諸家高名記巻之十五　大尾